
空からの贈り物 ~ after story ~

ライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空からの贈り物 ｝ a f t e r s t o r y ｝

【Nコード】

N 8 5 3 5 I

【作者名】

ライト

【あらすじ】

評価・感想よろしく願います——『空からの贈り物』の続編です。それぞれの思い出から時が過ぎ、三年生へと進級した誠。『スカイ』によって願いを叶えた少女たちとの物語を終えた誠は、妹であり恋人でもある湊と幸せに暮らしていた。しかし、物語はこれで終わりではなく続きがあった。少女たちと再会し、誠を想う諦めない気持ちを抱く少女たちの物語と誠の新しい一年が、今始まる！

泉編 part 1：回想

桜が舞い散り、綺麗な花びらが地面へと積もっていく。

寂しく立っている木だけで、枝には青葉が生っていた。

桜楼学園に通う三年生の誠は、今日もお気に入りの場所である小さな山を登っていた。

少し体を震わせるような風が吹きつけてくる。

空は綺麗に晴わたり、青々しい色がどこまでも広がっていた。太陽の日が照り、暖かい陽射しが当たられ心地良さが増した。

頂上に着くと、改めて回りを見渡した。

真ん中にある泉、近くにある木造ベンチ、さらさらとした芝生。

すべてあの頃と変わらなかった。

「懐かしいな……」

誠はそつと目を閉じた。

風のなびく音、小鳥のさえずり、木々のざわめき、さまざまな音色が耳に届く。

そして去年の思い出が甦ってくる。忘れられない、最高の思い出。

さつきこの山の持ち主である柏葉さんの家を訪れ、挨拶をしにいった。お年を感じさせない元気がある。そのついでに、綺麗な花束を持たされた。

誠は踵を返すと、周りにある雑木林の中を進んでいった。

雑木林の奥へとゆつくり進んでいく。木や葉の匂いが鼻をつき、枝には小鳥がとまって鳴いていた。

太陽の光を遮断し、中は薄暗く少し気味が悪かった。足を踏み出すたびに落ち葉が音を立てる。

誠はある場所へと辿り着いた。

目の前には2つの墓があった。木の枝を十字にし、土の上に刺さっている。

誠は左にある一つの墓の前に花束を添えた。そして、手を合わせ、そつと目を閉じた。

今日は、泉が死んでちょうど1年なのだ。

「泉、元気にしてたか？ 俺はずっと元気だぞ。お前と別れて1年経ったんだ。俺は3年になって、いろいろ頑張ってるよ」

誠は目を開け、語り出した。

「もう知ってるかもしれないけど、俺、今湊と付き合ってるんだ。毎日楽しく過ごしてる。本当は湊も連れてきたかったけど、あいつ遠慮してな。また今度連れてくるよ。……お前との思い出は、忘れ

ないからな。いつまでも、天国で見守っていてくれ」

誠はそつと笑みを浮かべ、泉の墓を見つめた。

頭の中では泉が最後に見せた幸せの笑顔が思い浮かぶ。あの笑顔を、もう一度見たかった。

泉の家族は毎日が苦しかった。

泉とその母親は、父親のせいで暴力を振るわれていた。父親は麻薬を所持し、それを売買していることが警察にばれ捕まった。

そのことが近所でも広まり、泉はそのせいで、学校でいじめられるようになった。

生きるのが嫌になった母親は、夜にこの山を訪れ、スカイを使って最後に泉の記憶を消した。そして自分は自殺をして泉の墓の隣に眠っている。

そこから誠と泉の物語が始まった。

透き通ったような綺麗な泉の前のベンチで出会い、話しかけ、小屋に住み、楽しい時間を過ごした。

家族に会いたがっている泉に、この世にいる唯一の家族である父親にも会わせ、最後は記憶が甦り、天国へといってしまった。

それまで、たくさんの思い出がある。

誠の目からつーつと一滴の涙が流れた。思い出すたびに出てくる。

袖でぐしぐし拭くと、すつと立ち上がった。

「じゃあな、泉。また来るからな」

背を向けながら軽く手を振り、元来た道を歩いていった。

雑木林の中から出た誠は、大きく背伸びをすると、ふつと息を吐いた。

そして綺麗な泉の先にある、古びたボロボロの小屋を見た。

「せつかくだし、あそこにもいくか」

小屋の中はやはり汚かった。何年もそのままので、いたるところは埃被っていた。しかし、布団だけは袋の中に入れていたので大丈夫だった。

誠は布団を敷くと、その上に座った。

「ここでもいろいろあったな」

この小屋の中にいるときは、誠と泉はまるで夫婦のようだった。

学校から帰って来ると、迎えてくれた泉と夕飯を食べ、そして日課である日記を書く。

楽しかったとき、幸せだった日々、次々に思い出される。

誠は泉の日記を取り出すと、ぱらぱらとページを捲った。

ほとんど、泉は誠のことばかり書いていた。そのことを知ったときは涙が出るほど、泉の想いが伝わった。

すると、あるところで誠の手が止まった。そのページを読むと、誠は可笑しそうにクスクス笑った。

「そうだった、そうだった。こんなこともあったな」

誠は日記をテーブルの上に置くと、両手を頭の後ろに回し、布団の上に寝転がった。

「あの時は本当に楽しかったな……」

誠はそつと目を閉じ、そのことを思い出した。

いつものように誠は、学校が終わったあと、泉のいる小屋に向かった。

この日もいたって空は晴れ渡り、日が傾き始め、空は茜色へと変わろうとしていた。

お気に入りの場所がある山を登り、泉の脇を通って、その先にあるボロボロの小屋の中に入った。

「ただいま、泉」

「……おかえりなさい」

泉は腰まで伸ばされた長い髪を垂らし、整った綺麗な顔立ちをして、ここらではあまり見ないような美少女である。

あいかわらず笑顔を見せないが、少し恥ずかしそうに、頬を赤く染め迎えてくれた。

そんな泉が可愛く思え、誠はつい口元を緩ませてしまった。

2人はギシギシときしむ音を立てるテーブルを囲み、泉の作った夕食を食べた。

熱々の肉じゃがはおいしく、凍てついた体を芯から温めた。

「今日もおいしいな。泉はやっぱ料理がうまい」

「……あ、ありがとう」

泉は頬を赤く染め、うつむきながら礼を言った。

それから誠は学校であったことを楽しそうに話し、泉はその話を真剣に聞いて夕食を終えた。

一段落して、泉が今日の日記を書いている最中だった。

隣で誠は携帯をいじっている。そのとき、泉が誠を見てそっと口を開いた。

「ねえ……誠くん」

「ん、なに？」

「あ、あのね、再来週の日曜日……暇？」

「再来週の日曜？ ……今のところ予定はないな。どうかしたか？」

すると、泉はもじもじし、顔を真っ赤にしながらうつむくと、かき消されそうな小さな声で言った。

「え、えと、あのね……その日、私と一緒に出かけてくれないかな？」

言い終わった泉は、緊張したように体を硬直させ、固く目を閉じた。

誠はそんな泉を見て、ふっと笑みを浮かべた。

「ああ、いいぜ。その日は泉とデートな」

その言葉を聞いて、泉は恥ずかしそうにうつむきながら小さくコクツとうなずいた。

「あ、ありがとう……」

泉は記憶がないせいか、感情を表に出さない。だが、内心すごく喜んでおり、はしゃぎまわりたいほど嬉しかったのだ。

この日から、泉の計画は始まった。

泉編 part 2：労働

泉は朝早く起きると、朝食や小屋の掃除を早く終わらせ、出かける準備をしていた。

持っている服の中で一番清楚な服を選び、小さな立て鏡を見て身だしなみを綺麗に整えた。

「が、頑張らなくちゃ……」

泉は気合いを入れ小屋を後にした。

誠との約束の日は再来週の日曜日。今日は金曜なので、残り二週間と二日。

その間に泉はやりたいことがあった。それはバイトだ。

泉は誠に絶大な感謝をしていた。してもきれない感謝を。

だから、少しでも恩返しがしたかった。いつもお世話になり、面倒をみってくれる誠に、何かしたいとずっと思っていた。

そこで思いついたのは、自分が稼いだお金でどこかに出かけること。

それで喜んでくれれば、どんなに自分も嬉しくなるか。

携帯でどこかい場所がないか検索すると、隣の町におしゃれなレストランがあるのを見つけた。

少し高いが、おいしそうなディナーをご馳走したかったので、すぐにここだと決めた。

そのためにも、交通費や食事代、他にも自分の服などのお金を稼ぎたかった。

誠には内緒にしてびつくりさせたかった。嬉しそうで、楽しそうな表情を見たかった。

なので、誠が学校から帰って来る時間帯までには帰りたい。休日は休みで、平日は4時くらいまでがよかった。

「や、やるぞ……」

泉は恥ずかしそうに小さくガッツポーズをし、バイト探しを始めた。

まずはコンビニに向かった。たまたまバイト生募集のチラシが目に入っただ。

自給7百円。1日7時間なので、4千9百円もらえる。平日だけでいいので、10日で4万9千円。

少し金銭的に心配だったが、仕方なかった。

泉はさっそく中に入って、店長らしき人物に頼んだ。

しかしあっさりと断られた。

身分証明書もなく、接客も十分にできないようでは雇うことはできないとのことだ。

「あ、諦めないもん……」

それから次々とお店を回っていった。真剣にお願いするが、やはり断られてしまう。

それでもくじけず頑張ろうとするが、断られた数は二桁になるとしていた。

だんだんとやる気がなくなり、諦めようと思っていた。

そのとき、あるお店が目にとまった。

それは喫茶店だった。

レンガ造りの建物で、見た目はおしゃれだった。

規模は中ぐらいで、誠が通う桜楼学園や小屋から近い場所に位置していた。

泉はここでダメなら諦めようと思い、恐る恐る中に入った。

中には誰もいなかった。まだ開店していないのか、それらしき準備もしていない。電気も点いていなかった。

泉は少し不安だったが声を上げた。

「あ、あの……て、店長さんはいらっしゃいますか？」

少しうわずってしまっただが、自分のできる限りの声を出した。

すると、店長らしき人の声が奥から聞こえた。

「はい。いらっしゃいませ。あら、かわいいお客様ね」

出てきたのは背が高く、ムキムキの筋肉質のオカマだった。

男であろうくに、化粧をしてフリルの着いた可愛いエプロンを着けている。

一見優しそうだが、怒ったらすごく怖そうだ。

泉は少し戸惑いながらも口を開いた。

「あ、あの……こ、ここで、は、働かせてください」

泉は固く目を閉じて頭を下げた。

すると、店長らしきオカマは少し不気味に笑みを浮かべた。

「あら、嬉しいこと言ってくれるじゃない。もちろん、いいわよ」

そこで泉は恐る恐る顔を上げた。

「で、でも、私、身分証明書も何もなくて……」

「ふふ、そんなの別にいいわよ。働きたいならそれでいいじゃない。その気持ちだけで十分」

泉はその言葉で安堵の息を吐いた。

「あ、ありがとうございます……」

「ええ、こちらからもよろしくね」

2人は奥のほうへ移動すると、店長からいろいろ話を聞いた。

店長の名前は木村静香。

こんな名前のせいで男か女かわからなくなり、こんなオカマになってしまったようだ。

勤務時間は開店の朝9時から夕方4時まで。1時間休憩有りの6時間労働にしてくれた。

自給は千円と高く、1日に6千円も貰えるのだ。10日で6万円。

十分すぎるほどだ。あまりの好条件に、泉は文句なかった。

すると、店長が少し心配気味に口を開いた。

「それで、泉ちゃん、だったわね。ちょっと訊くけど、ここがどういう店か知ってるかしら？」

そこで泉は疑問を浮かべた。ここは喫茶店ではなかったのだろうか。泉はしよじきにそう言った。

しかし、店長は首を振った。

「実はね、ここはただの喫茶店じゃないの」

「え……？」

今日から泉のバイトが始まる。

もちろん、誠には話していない。何も知らず、変わらない日々を送っている。

月曜から来週の金曜まで一生懸命働き、稼いだお金で誠に恩返しをする。計画はバッチリだ。

泉は開店時間1時間前には店に着き、開店準備を始めた。

ブラインドを開け、全てのテーブルを綺麗に拭く。床の掃除や材料の確認。

そして店長から渡された服に着替え、準備は整った。

時刻は9時。開店し、一人目の客が入ってきた。

大学生だろうか、カバンを持ち、オタクみたいな雰囲気を出していた。

泉はさっそく接客した。

「い、いらつしゃいませ。……ご、ご主人様……」

泉は可愛いメイド服を着ていた。

頭にはカチューシャ、フリルのついたスカートのメイド服、黒いソックス。

泉は恥ずかしそうにもじもじしながら顔を真っ赤にしていた。

大学生のオタクはそんな姿を見て呆然と立っていた。

「か、かわいい……」

「え、えと、こ、こちらへどうぞ……」

泉は大学生を奥へと案内した。

影で店長は隠れて見ており、泉の接客に感激していた。

「うーん、すごくかわいいわね。あの容姿で恥ずかしそうにしている仕草。そしてオタクには最高のメイド服。もう、食べちゃいたいわね」

席に案内した泉は、大学生にメニューを渡した。

「ご、ご注文はお決まりでしょうか……」

「あ、じゃあ、コーヒーを」

「か、かしこまりました。……ご、ご主人様……」

泉は最後に可愛らしい仕草をして、その場から早歩きで去った。

そして厨房に行つて、店長にコーヒーを頼んだ。

「とても良かったわよ、泉ちゃん。その調子で頑張つて」

「は、はい。あ、ありがとうございます……」

泉は壁に背をもたれると、大きく息を吐いた。

すごく緊張した。誠以外の人と話しをするのはほとんどない。なによりこんな服を着て恥ずかしさが込み上げてくる。

この喫茶店はコスプレ喫茶なのだ。

だから時給も高い。バイト生は高校生などが多いのだが、平日は学校で休日しか働けない。

そこで泉がいるおかげで大助かりだそうだ。

さすがに店長一人では何もできないようだ。

そうやって泉はずっと緊張したまま接客を続け、午前中だけでどつと疲れが出た。

「お疲れ、泉ちゃん。どう？ 初めてのお仕事は」

店長が泉に飲み物を渡しながら訊いてきた。

泉は飲み物を頭を下げて受け取った。

「は、はい。つ、疲れましたが、とても楽しいです……」

店長はニコツと笑みを浮かべた。

「それは良かったわ。午後からも頑張つてね」

「は、はい」

午後は午前中よりもお客が多い。

泉以外にもバイト生はいるが、それも少数。

ほとんど満席になる時間帯は忙しかった。

「こっちのオーダーまだ？」

「コーヒーお願いします！」

「レジはいませんか？」

やはり客が多いと大変だ。泉は急いで次から次へと動いていく。

接客をして、オーダーを聞いて、注文の品を持っていく。

これが泉の仕事だが、何席もあるので、休む暇はなかった。

泉はレジができないので他の人がしている。

飲み物や食べ物は何店長が作っている。

たまにオーダーを間違えたりするが、店長は広い心で許してくれた。

午後4時。

泉はこれで終了だ。

この時間帯は高校生の客がよく来るのだが、夜から働くバイト生もいるので大丈夫とのことだ。

「お疲れ様、泉ちゃん。また明日もお願いね」

「は、はい。お、お疲れ様でした」

泉は奥で着替え、誠が帰ってくる前に、急いで帰って行った。

小屋に戻ると、疲れたのかすぐに布団の上に横になってしまった。

今日から始まったバイト。最初は不安も緊張もあったが、だんだんと慣れてきて楽しさを感じられるようになった。

なにより、自分が頑張るだけで誠に恩返しができる。

誠が喜ぶ顔が見たい。一緒に遊んで、楽しんで、レストランで食事をして、最後はホテルに泊まって。それから……。

泉はガバツと起き上がった。顔は真っ赤になっており、心臓は激しく鼓動している。

激しく首を振って煩惱をかき消した。

「ま、誠くん帰ってくるし、ご飯作らなきゃ……」

泉は立ち上がると食事の準備をした。

しかし、すぐに疲れが出て、お味噌汁を作ったあと、つい寝てしまった。

そのとき誠が小屋に入ってきた。

「ただいま、いず……」

誠は泉を見て声を出すのを止めた。

布団の上で気持ち良さそうに寝ているのだ。

やれやれといった感じで笑みを浮かべると、優しく毛布をかぶせ、味噌汁以外の食事を作り、静かに帰っていった。

泉編 part3：人気

泉がバイトを始めて一週間が経った。

バイトにはもう慣れ、ぎこちなさが無くなり、スムーズに仕事をこなせるようになってきた。

先週給料が貰え、予定通り3万円も貰えた。

泉はそのときの嬉しさを忘れなかった。

このお金で誠に恩返しができる。そう思うだけで心から歓喜が溢れ出た。

泉はお金を大切に日記の中にしまい、取られないように隠した。

今日は月曜日。誠との約束の日は今週の日曜日だ。

泉は今日も張り切って仕事をした。

午前中から訪れる客数が多かった。先週と比べたらその数は二倍くらい。

そしてみな、なぜか泉のほうばかり見ていた。

「あの子が噂の？」

「めっちゃかわいいな」

「友達になりて〜」

「彼氏とかいるのかな？」

「いないでほしい。つか、歳いくつかな。高校生っぽいけど」

「いいよ、そんなことは。かわいいからオッケーだ」

周りからいろいろ言われる。

しかし、泉には聞こえていなかった。

自分は一生懸命与えられた仕事をこなす。それしか考えていなかった。

どれもこれも、誠のため。

泉は毎日真剣に働いた。

そしてある日、今日の勤務時間も残り1時間くらいとなったときだった。

今日は学校が早く終わったのか、窓の外には帰宅する学生の数が多かった。

「誠くんも、早く終わったのかな……」

少し早く帰らなければ、小屋に自分がないことに気づいて心配

するだろう。早く終わることを願うばかりだった。

すると、ドアが開いて客が来た。

泉は急いで接客をしようとした。

「い、いらっしやいませ、ご、ご主人さ……」

泉は途中で言葉がつかえてしまった。

数人の高校生が店の中に入ってきた。

その中に誠の姿もあったのだ。

「な、いいところだろ。誠もそう思うだろ？」

「こんなところがあったなんて知らなかったぜ。お前、よく来るの？」

「週に3回くらいかな。それで、ある噂があるんだよ。なんか、めっちゃくちかわい子バイトしてるらしくてよ」

「へ」

誠はいたって冷静だが、他の友達は興奮していた。

泉はすぐに隠れて影からその様子を見ていた。

まさか、ここに誠が来るとは思わなかった。ばれたら計画が台無しだ。

それに何を言うかもわからない。すぐに辞めさせられるだろう。

そんなことになったら、恩返しなんてできなくなる。

泉は接客を他の人に任せようと後ずさりした。

すると、後ろには店長がおり、泉の肩を掴んだ。

「さ、人気ナンバーワンの泉ちゃん。しっかりと接客してきてね」

「え？」

店長に背中を押され、泉は前に出てきたしまった。

そのせいで、誠の友達は泉に気づいた。

「あ、おい、この子だぜ」

「す、すげえ、めっちゃかわいい」

「本当だな。お前よくやった！」

誠の友達たちはじっと泉を見る。

泉は恥ずかしそうにメニューで顔を隠し、目だけを見えるようにした。

「……い、いらっしやいませ……ご主人様……」

「声もかわいい！」

「恥ずかしそうにしているのがまた萌えるな」

「やばすぎるだろ！ な、誠もそう思うだろ？」

「あ、ああ、そうだな」

誠はじつと泉を見た。

泉はばれないように顔を伏せ、誠の友達を席に案内した。

誠を含めたお客を窓際の席に案内した。誠は窓際に座っている。

3人の誠の友達たちはにやにやしながら泉を見ていた。

誠もテーブルに肘をつきながら、考え事をしているのか、険しい顔をして泉を見ていた。

「う、ご注文が決まりましたらお呼びください。こ、こゆつくり……」

泉はさつとメニューを置くと、ぺこつと頭を下げ、そのまま顔を見られないようにしながら、そそくさといってしまった。

「ああ、かわいいな」

「なあ、友達になってくれるかな」

「誰か話し掛けろよ」

「おい、誠。さっきからぼーっとしてるぞ。もしかして、一目惚れか？」

「あ、いや。なんか、どっかで見たことあるような気がして」

「なに！ ど、どこでだ！」

「それが思い出せないんだ。なんか見覚えあるんだよな」

誠は思い出そうとするが、なかなか出てこず、首をかしげることしかできなかった。

泉は奥で安堵の息を吐いた。

ばれていないようだ。助かった。でも、それは時間の問題だろう。どうにかしなければ。

そのとき注文の声が聞こえた。誠の友達からだった。

「すみませ〜ん。注文お願いします」

「は、はい」

泉は慌てて辺りを見渡す。

このまま行けばばれてしまう。なにかで変装しなくては。

そしてあるものを見つけた。それを掴み、頭から被るとオーダーを聞きにいった。

「う、ご注文はお決まりでしょうか？」

泉が来ると、誠の友達たちはいつせいに固まってしまった。

泉は猫耳のついたヘアーバンドと猫ひげを着けていた。頬に三本の毛が着いている。

泉はみんなの様子を見て戸惑った。

なぜ固まっているのだろうか。そこでわかった。マニュアルが違ったのだ。

「え、えと、ご注文はお決まりですか……にゃん？」

その瞬間、誠の友達はいっせいに笑みを浮かべた。

「か、かわいい！」

「このかわいさで、にゃん、なんて言ったらやばいだろ」

「すっげえかわいい。萌える！」

「誠、お前もそう思うだろ？」

誠はみんなと違い、呆然と泉を見ていた。

泉はできるだけ誠の顔を見ないように顔を背けていた。

「な、なんか、予想外で……。多分、会ったことないな。俺の知り

合いに、にゃん、なんていうやついないし……」

泉は安堵の息を吐いた。

よかった。ばれていない……。

そのあとは、注文の品を持っていき、泉は影からずっと誠を見ていた。

今思ったのだが、誠が自分以外の人と話をするところを見たことがなかった。友達と楽しそうに話している。

なぜだろうか。少し苛立ちを感じてしまった。あの友達たちに誠を取られたような感じがして。

そのとき、後ろから店長が話し掛けてきた。

「あの子が気になるの？」

「え？ あ、その……」

「あの子もかわいい子ね。一目惚れってやつ？ 泉ちゃん、かわいいわね」

「い、いえ、その、あの人は、私の……」

そこで泉は思った。

誠は自分にとって何なのだろうか。

友達？ 家族？ それとも、恋人？

どれを考えても、当てはまる言葉が出てこなかった。

「どうしたの？ 泉ちゃん」

泉の体は震えていた。小刻みに動き、ぎゅっと自分の体を締め付けた。

怖かった。誠と繋がりが無いことを知り、恐怖を感じた。

自分は、誠にとって何なのだろうか……。

すると、店長は泉の肩に手を置き、そっと呟いた。

「泉ちゃんは恋をしたことある？」

「……恋？」

「そりゃ、泉ちゃんも恋くらいはしたことあるわよね。私はあるわよ。でもね、告白はできなかった。こんな顔だし、性格だし、きっと気持ち悪いと思われるだけだと思ってね。でもね、泉ちゃんはかわいいから、きっと大丈夫。……自信持つて」

泉はコクツとうなずいた。

自分は恋をしたことがあるのだろうか。覚えていない。

でも、これが恋というのかわからないが、大切な人はいる。

今、目の前に映っている人。

清水誠。

誠にだけは、他の人とは違う感情を抱いていることは、泉には少しだけ気づいていた。

この感情を、大切にしようと思った。

そのとき、誠の友達たちがレジに行き、お金を払って帰って行った。

誠は最後に泉の方をチラッと見て行ってしまった。

泉は恥ずかしそうにうつむきながら、小さく手を振って見送った。

そんな泉を店長は見て、やれやれといった感じで息を吐いた。

そして、無事ばれることなく、バイトを終えた。

泉は誠が帰って来るまでに小屋に戻り、いつもどおりに振舞った。

夕食のときに、誠から喫茶店での話を聞いたときは、顔から火が出るほど恥ずかしかった。

泉編 part 4：計画

泉がバイトを始めて二週間。

金曜日、泉は店長から給料を貰った。

「はい、お疲れ様。今週も頑張ったわね。これからも頑張って欲しいけど、また働きたくなったら来てね」

「は、はい。お、お世話になりました」

泉は丁寧に頭を下げ、店長から茶袋に入った給料を貰った。

「そういえば、泉ちゃんはどうしてバイトを始めたの？」

「あ、そ、それは……」

泉は頬を赤く染めると、そつと呟いた。

「た、大切な人を……よ、喜ばせるため……」

その言葉で店長は満面の笑顔になり、泉の肩に手を置いた。

「頑張つて。応援してるから」

「あ、ありがとうございます……」

泉は深く頭を下げると、自分の家に戻っていった。

小屋に着くと、泉は改めて給料を見た。

封筒の中には二週間働いた分の6万円。一万円札が6枚もあった。しょうじき、こんな大金を見たことなかった。

「こ、こんなに……」

泉は嬉しく思えた。一生懸命働いた甲斐があった。

これなら十分に日曜日は楽しむことができる。なにより、誠は喜んでくれるはず。

泉はお金を封筒の中に入れ、布団の下に大切にしまった。

「が、頑張るぞ……」

今ようやくスタートラインに立ったのだ。大切なのはこれから。

泉は日記を取り出すと、計画表を書き始めた。

土曜日。

とうとう約束の日は明日へと迫った。今日はやることがたくさんある。

泉は早く起き、朝食を終え、小屋の掃除を終えると準備に取り掛かった。

まずは昨日の夜書いた計画表を確認する。

我ながら完璧な内容だった。あとはそのための準備。

まず思ったのは、着ていく服だ。

誠からいろいろ服は買ってもらっている。しかし、余所行きの服はない。

バイトで稼いだお金で服を買うことにした。

それならバックもあったほうがいいだろう。おしゃれをするならあったほうがいい。

そして、忘れてはいけなのはレストランである。

泉は携帯を取り出すと、さっそく予約の電話をかけた。

明日の夜6時に予約が取れた。席は窓側と絶好の場所だ。

ディナーはできるだけ豪華なものがいい。服やバックを買うお金や、ディナーのあとのホテル代を考えるなら、4万円までのコースがいいだろう。

泉は2万円のコース二人分を予約した。

料金は振り込み式で、今から言う住所のところに郵便で送るのだ。

キャンセル料金は取らないが、一度予約した料金は戻らないようだ。

泉は携帯を閉じると、封筒の6万円を抜き取って出かける準備に入った。

泉は商店街に向かった。

休日だから人の数は多い。いろんなお店は人で溢れ、ざわざわとした声が聞こえる。

泉はまず郵便局でお金を振り込んだ。やり方がわからず、苦労したが人にきいて何とかできた。

今の所持金は、さっき4万円払ったので、残金2万円となった。

いつきに無くなり、少し虚しい気持ちになった。

ディナーのあとのホテル代、誠に買うプレゼントのために使うお金を考えると、残り5千円くらいしか使えない。

泉は残りのお金で買い物を始めた。

次は服を買うことにした。

高級レストランに行くのだから、綺麗な服を着たい。

お金は少ないが、良い物はないだろうか。

「誠くん、どんなのが喜ぶのかな……」

泉はいろいろな服を見るが、どれがいいのかわからず迷っていた。

すると、店員が話し掛けてきた。

「お探し物はなんですか？」

「え？ えと、あの……」

泉はつい緊張してしまい、言葉がつかえてしまった。言いたいが出ない。

「どこかお出かけになるのですか？」

店員の言葉に泉はコクツとうなずいた。

「余所行きの服をお探しですね。それなら、これはいかかでしょう」

店員は紹介したのは白い清楚なワンピースだった。

女らしさをアピールするスカート。綺麗な白にさらさらとした生地が魅力的だった。

レストランにいくなら文句なかった。その上に上着をはおり、さらに可愛くなる。

「今人気のある商品で、着心地が良く、素材がいいので、デートにはぴったりですよ」

店員の丁寧な言葉で、軽くうなずいた。

確かに可愛く、誠は喜んでくれそうだった。値段も3千円とおてゐる。

泉は納得するとすぐに決めた。

「こ、これ、ください……」

「はい。ありがとうございます」

服を買った泉は、次はバックを買った。

服に似合うように、白い肩掛け用のバックで、安いものだ。

ついでに財布も買い、買いたいものは揃った。

「これで、いいかな……」

泉はレストランで軽食を摂っていた。そこで買ったものを見る。

必要なものは揃った。5千円以内に収まり、金銭問題はない。

あとは、明日どれだけ誠を喜ばせることができるか、その力量次第である。

「よ、よし……」

泉は強くうなずくと、再度計画の確認を行った。

小屋に戻ったときは陽が暮れようとしていた。

泉は余ったお金を持ち、温泉に入りに行った。

入念に体を綺麗にし、長くさらさらとした髪を優しく洗う。

明日はデートなのだから綺麗にしくはなくては。

泉は体を綺麗にすると、湯船に入って体を温めた。

ふと窓から見える夜空を眺めた。

月の光が眩しく、周りは満面の輝く星がある。明日は晴れたとわかった。

「誠くん、喜んでくれるよね……」

これまで本当に誠にはお世話になった。それは大きく実感している。

疲れるだろう、面倒だろう、嫌がっているだろう、そんなことをずっと思っていた。

でも、誠はそんなことはなかった。

毎日会いに来てくれて、明るく元気を与える笑顔を見せ、自分が寂しがないようにそばに居てくれる。

それが温かくて、安心できて、嬉しくて、胸が締め付けられて…

…。

泉はぎゅっと手を胸の前にやった。

そのとき、一筋の涙が泉の頬を伝った。

情けなかった。今思い返せば、自分は誠に何もしていない。何一つ、恩返しをしていない。

甘えてばかりで、迷惑かけて、世話を焼かせて……。

改めて思う、今まで自分は何をしていたのだろう。

泉はふっと息を吐き、明るく照らす月を見上げた。

「明日は、頑張るから……」

そう心に誓った。全てを、誠のために……。

小屋に戻った泉は、携帯にメールが届いているのに気づいた。

相手は誠からで、明日の午前は用事があるとのことで、デートは午後からにしてほしいそうだ。

泉は、わかった、と返事を送ると、計画表を広げ、明日のデートをどう成功させるか作戦を練ることにした。

「が、頑張る……」

泉は気合いを入れ、携帯で情報を収集し、そこで何をするかなど検討していった。

泉編 part 5：崩壊

日曜日。

今日は待ちに待った大切な日。

そう、誠とデートをする日だ。

この日のために、泉はバイトをしてお金を稼ぎ、少しでも誠に恩返しをし、喜ばせようと思って頑張ってきた。

すべては、この日のために。

泉はいつもより早く起きると、外にある綺麗な泉で顔を洗い、眠気を吹っ飛ばした。

空は透き通るくらい晴れ渡り、祝福してくれるように気持ちのいい天気だった。

清々しい気分になり、すべてがうまく成功しそうな気持ちだった。

絶対に喜んでくれる。そうと思えず、泉の胸は弾んだ。

「が、頑張る……」

泉は小さくガッツポーズをして仕度を始めた。

朝食を終えると、時間はまだ十分にあるので、今日の日程の確認をした。

まずはこの小屋に誠が来て、一緒にバス亭へと向かう。

そのとき、できれば手を繋ぎたい。

だが、そんな勇氣は自分にあるだろうか。上がり症で、すぐに緊張してしまう。できたらしようと思った。

バス亭から隣町へのバスに乗り、その商店街で買い物をする。

誠にはいつもいろんな物を買ってもらっている。

今日は誠の好きなものをプレゼントしてあげたい。

嬉しそうな顔が頭に浮かぶ。きっと喜んでくれるはず。

それから少し喫茶店で時間を潰す。

いろいろ話をして、会話を弾ませたい。

いつも誠の話しを聞いているが、今では自分も話したいことはたくさんある。

そして夕食は高級レストランで食事。

このために稼いだお金だ。すでに予約はしてある。お金も払い、準備万端だ。

誠はきつと驚くだろう。そんな姿がつい想像してしまい笑ってしまふ。

ここで最高の一時を送れるはずだ。

最後に、近くのホテルに行って終わり。そこでもしかしたら……。

泉の顔はいつのまにか真っ赤になっていた。ぶんぶんと首を振り、心を落ちつかせた。

最高の恩返しと完璧な計画ができた。これで、絶対に幸せになるはず。

「や、やるぞ……」

泉は張り切ってぐつと拳に力を込めた。

誠が来るのは午後一時。できれば朝から行きたかったのだが、誠は用事があるとのことで午前は潰れた。

でも構わない。この日は誠のためにある。自分は恩返しをしたい。それができれば、十分だった。できれば、自分も楽しみたいが。

時刻は一時五分钟前。

泉はすでに出かける準備はできていた。

昨日買った服に着替え、白いバッグの中には財布、携帯、計画の書いてある日記のページの切れ端、ハンカチ。

忘れ物はない。何度も確認し確かめた。あとは、誠が来るのを待つだけだった。

しかし、その誠がなかなか来ない。

時刻はとうとう一時を過ぎた。焦りが募っていく。

テーブルの前で座ってじっと待っているが、そわそわして落ち着かない。

「何かあったのかな……」

泉は心配になってきた。

何度もドアを開け、外を見みるが、誠の姿を探すが見当たらない。

それでもきつと来てくれると思って待つことにした。

誠は今まで約束を破ったことがない。きっと、来てくれる。

だが、誠が来る気配は一向になかった。

時刻はとうとう予定時間から三十分過ぎた。

小屋の中で、泉はじっと待っていた。

今自分のところに向かっている。

あと数分したら声が聞こえる。

ドアが開いて誠が顔を覗かせる。

数分後にはもう外に出てバス亭に向かっている。

そうやって自分に言い聞かせた。

だが、不安は高まっていくばかり。だんだんと寂しくなってきた。

来て欲しい。

早く訪れて欲しい。

すぐに、逢いたい。

泉はぎゅっと手を握り、そう願った。

すると、バッグの中に入れてあった携帯が鳴った。

泉はすぐに携帯を取り出した。着信相手は誠だ。

「も、もしもし……」

「あ、泉。ごめんな、約束の時間過ぎてるだろ？」

「ううん。大丈夫だよ。……今、どこにいるの？」

「それが、今学校にいるんだよ。宿題し忘れたら、先生閑々に怒って、終わるまで帰らせないって。午前中に用事があるっていったのはそのこと。午後までには終わるって思ってたんだけどな。最悪だよな。今もこっそりかけてるんだ」

「そう……」

泉の手は震えていた。

なぜだろうか。抑えることができない。

「そ、それで、いつ終わるの？」

「ああ、それがわからないんだよな。なかなか返してくれそうになくて。抜け出していいけど、そしたら留年させるってうるさいし」

「そ、そうなんだ……」

どうやらすぐには終わりそうにない。計画は大きく崩れてしまった。

でも、夜までには帰ってこれるはず。レストランには間に合うはずだ。

それだけでもいいから、一緒に行きたい。

「あ、あのね、誠くん。……今日のデートなんだけど……夜からでも」

「ああ、今日のデートな、悪いけど中止だ」

「え？」

泉は雷が落ちたようなショックを受けた。

中止？ 中止って言葉、どどういう意味だっけ？

「多分遅くなるだろうし、十分に楽しめないだろ。また今度にしようぜ。そのほうがいいし。それに、夜は湊と一緒にご飯食べたいってうるさいんだよ。悪いな、泉……泉？」

泉は耳から携帯を離し、放心状態となっていた。

中止という言葉が頭の中で響き、信じられない気持ちでいっぱいだった。

楽しみにしてた。やっと、恩返しができると思った。最高の日々が送れると思った。

なのに、その夢は簡単に、もろく崩れ去った。

「泉？ おい、泉？ 聞こえてるか？」

誠の声が届き、泉は再び携帯を耳に近づけた。

「あ……うん。……聞こえてるよ」

「本当にごめんな。次は約束守るから」

「ううん。気にしないで。私は大丈夫だから。……宿題頑張ってね」

「ああ、ありがと。……あ、先生来そうだから、またな」

そういつて誠は通話を切った。携帯からはツーツーという音が聞こえる。

泉は携帯を置くと、テーブルの上につつぶせになった。

すべてが終わった。そんな気持ちだった。

この日のために、自分は頑張ってきた。

お金を稼いで、毎日その日のことを思い浮かべ、毎晩どんなふうに過ごすか計画して、服もバッグも買って、レストランも予約して……。

泉の目には涙が溢れていた。

自分がバカらしく思えてきた。何のためにここまで頑張ってきたんだろうか。なんのために夢を膨らませたのだろうか。

「つつ……つつ……」

大粒の滴が零れていく。視界が滲み、溢れ流れていく。

泉はバックの中から計画表を取り出すとびりびりと契った。

もう何もかもが嫌になった。すべてが嫌に思えた。

悔しい。苦しい。悲しい。いや、そんなものではない。心が締め付

けられ、切なく、寂しかった。

「うつうつ……ふっ……うつ……」

泉は大好きな熊のぬいぐるみを抱きしめると、一人小屋の中で涙を流し、この気持ちに耐えていた。

こんな感情、初めてだった。

次の日から、誠は泉の様子がおかしいことに気づいた。

以前よりそわそわしているというより、どこか怒っているという感じがした。

夕食は作ってくれる。だが、一緒にいるとき、雰囲気が違うような気がした。

「なあ、泉。どうかしたのか？」

泉は黙って食事を続けた。黙々と、口を開かず、静かに消費していく。

「あ、そうだ。泉。今週の日曜は絶対大丈夫だから、デートしようぜ」

誠は元気良く言った。しかし、

「……いい。もう、デートはしなくて……」

冷たく、重い口調で言うと、泉は誠に背を向けた。

「い、泉……」

夕食を食べ終え、誠は家に帰ろうとした。

「じゃあな、泉。また明日な」

しかし、いつものように泉からの返事は聞こえなかった。

布団に横になり、大好きなぬいぐるみを抱いている。

誠は少し心配だったが、ドアを閉めて行った。

坂を下っているときに、誠はふと立ち止まった。

やはり気になった。泉の様子はどう見てもおかしい。

やはり、この前自分が約束を破ったせいだ。

誠は小屋を見上げた。

中からの光が消えている。もう寝てしまったのだろうか。

誠は引き返し、真剣に謝ろうと思った。

小屋に入ると、中は真っ暗だった。携帯を開き、その液晶画面を頼りに泉に近づく。

「泉？ もう寝たのか？」

泉からの返事はない。静かな寝息を聞こえる。すでに眠りについたらようだ。

しかたなく、明日謝ろうと思い、小屋を出ようとした。

そのとき、ゴミ箱の中にある紙切れを見つけた。

「これは……」

誠は一枚を取り出すと、ある文字に目が移った。

「デート大成功の計画表？」

そこで誠はピンときた。

ゴミ箱をあさり、中にある紙切れを全て取り出した。

そして一枚一枚丁寧に並べていく。

完成すると、誠は愕然とした。

「俺、なにやってんだよ……」

そこにある泉の計画。それを見て自分が情けなく思えてきた。

泉はこの計画をどんな気持ちで書いたんだろうか。

誠はそつと泉を見た。

背を向け、静かに寝ている姿。

誠は自分を本当にバカだと思った。

ずっと前から約束したのに、泉は毎日楽しみにしていたのに。

その気持ちを壊してしまった。簡単に踏みにじってしまった。

誠の目から涙がこぼれた。

申し訳なかった。本当に、自分が情けなかった。

「ごめん、泉……。本当にごめん……」

誠はうつむき、顔を伏せた。

「本当にごめんな、泉。……。ごめん……。俺、次は絶対守るから……絶対来るって約束するから。どうか許してくれ……」

誠の嗚咽が小屋の中で響いていた。

泉の気持ちが伝わり、反省したんだと十分にわかる。

泉は目を開け起きており、その声を聞いていた。そしてそっと呟いた。

「……うん」

泉編 part 6：恩返

日曜日。

誠は約束通り、午後一時ちょうどに泉のいる小屋に訪れた。

何分も前に来ていたが、ちょうどになるように合わせ、針が重なった瞬間ドアを開けた。

「泉、出かけるぞ！」

誠は元気良く、そして明るく満面の笑顔でいった。

テーブルの前に正座をして座っていた泉は、少し恥ずかしそうな表情で顔を上げるとコクツとうなずいた。

二人は山を下り、バス亭へと向かう。

泉はチラチラと頬を少し染めたまま誠を見、手を繋ぐか迷っていた。

そつと手を伸ばすが触れることができない。あと数センチが遠い。

やはりできない。恥ずかしすぎて、その勇気を出すことが出来なかった。

泉は小さく息を吐き、諦めようとした。

すると、誠の方から手を握ってきた。

「え？」

泉はそつと誠を見た。

誠は前を向いたまま優しそうな笑みを浮かべる。

泉は頬を赤く染め、うつむきながらぎゅっと握り返した。

おそらく、あの計画表を見て知ったのだろう。温かさが伝わり、男の手だという感触が手を伝って感じる。

十分に伝わる。

誠は優しい、と。

隣町行きのバスに乗り、揺られること数分で着いた。

誠が泉の分までお金を払おうとしたが、泉はそれを止め、誠の分も全て払った。

「きよ、今日は、誠くんはお金使わなくていいから……」

バスから降り、計画どおり商店街で買い物をした。

あらゆるお店が並んでおり、服屋やゲームセンター、飲食店などたくさんある。

「けっこう賑やかだな。泉、何か奢ってやるよ。何か欲しいものな
いか？」

誠は未だに手を握っている泉に問い掛ける。

泉はここだと思い、緊張しながらも、勇気を振り絞って口を開いた。

「え、ええと、私ね……」

「なんだよ、何でも言ってごらん」

泉は上目遣いで誠を見ると、恐る恐る言った。

「ま、誠くんにプレゼントを買いたい……」

「俺の？」

泉は目をきよろきよろしながら、最後はコクツとうなずいた。

誠はそつと笑みを浮かべた。

「そつか。ありがとう、泉」

誠は優しく泉の頭を撫でた。

泉は顔を赤くするとつつむいてしまった。

誠のプレゼント探しを始め、いろいろな店を回っていく。

そして、かっこいい帽子を見つけ、それを買うことにした。

それから、近くにあった喫茶店で時間を潰すことにした。

二階のラウンジにテーブルと椅子があり、そこに座って過ごす。

誠はコーヒー、泉はアップルティーを頼んだ。

「え？ 泉、バイトしてたの？」

泉の話聞き、誠はつい驚嘆な声を上げてしまった。

泉は素直にうなずいた。

「ま、誠くんも来たことあるよ。あ、あの、コスプレ喫茶に……」

そこで誠は思い出した。あのかわいい店員の正体は泉だったのだ。

「そうだったのか。知らなかったな。でも、まったく気づかなかった」

「う、うん。ごめんね、言わなくて。で、でも、驚かせたかったから……」

泉はアップルティーに口をつけた。

「だからお金持ってたのか。てっきり、柏葉さんがあげてるんだと思ってたし。そうか、ありがとな、泉」

それから泉は話したいことを全て誠に話した。

いつもは誠が話すのだが、今回は泉が話す側。

誠は楽しそうに笑いながら聞く。

普段口下手な自分だが、このときは意外にすらすらと話すことができ、楽しい一時を過ごすことができた。

そして二人は本日の一番の目的であるレストランに訪れた。

いかにも高級そうで、学生が入っていいのかと思うくらいだ。

「す、すげえな……」

誠はあまりにも驚いて言葉が出ないようだ。

泉は予想通りだったので、小さくクスッと笑ってしまった。

中に入り、窓から夜景が見える席に着く。

周りの人たちは高そうなスーツやドレスを着ている。自分たちも少しはおしゃれをしているが、とても敵いそうになかった。

「な、なんか、緊張するな。こんなところ初めてだし」

誠はさっきからそわそわして落ち着きがなかった。

泉はいたって平気で、冷静に席に着いている。

それよりも、その後のほうが緊張する。

ホテルの予約は入れた。

誠は一緒に泊まってくれるだろうか。

少しして食事が運び込まれた。

高級そうな食材が鮮やかに盛り付けられ、芸術的だった。食べるのがもったいないくらいだ。

準備ができ、二人はそつとグラスを持ち上げた。

「泉。こんな最高のディナーに招待してくれてありがとうな」

「う、うん。……よ、喜んでくれた？」

「もちろん。最高に嬉しいよ」

誠は満面の笑みを浮かべる。泉はほつと安心した。

乾杯をすると、食事を始めた。泉は練習通り、マナーを守って食事を進めていく。誠は音を立ててマナーが悪かった。

「ま、誠くん。スープを飲むとき音を立てちゃダメだよ……」

「で、でも、けっこうむずかしいぞ」

誠はスープ相手に悪戦苦闘している。

「吸うんじゃないで、中に入れる感じで飲むんだよ……」

「なるほど」

泉に言われたとおりすると、難なくうまくいった。

「おお、できた、できた！」

誠はつい大きな声を出してしまった。

そのせいで周りの人たちはじっと見てくる。

誠は気まずくなり、頭を下げた謝った。

泉だけは、可笑しそうに小さく笑みを浮かべた。

食事を終え、レストランを出ると、誠は大きく伸びをした。

「さてと、そろそろ帰るか」

誠はバス停のある方へと歩いていく。

そこで泉は誠の服を掴んだ。

「ま、待つて。……その、このあと……」

泉の顔を真っ赤になっていた。恥ずかしそうにうつむき、なかなか言葉にできない。

すると、誠が泉の肩に手を置き、笑みを浮かべた。

「このあとはホテルで泊まるんだっけ？ はは。俺ら不良だな」

泉はほつとすると、頬を赤く染めながらそつとうなずいた。

近くにあるホテルに入り、一つの部屋に入った。

中は広く、バスルームとトイレがあり、大きく柔らかそうなベッドが二つ。外から見える夜景は綺麗だった。

「けっこういいところだな。なんか修学旅行みたいでわくわくするぜ」

誠は外の夜景を眺め、部屋のあちこちを見、好奇心に溢れ落ち着きがなかった。

泉はベッドの上に座り、じっとしていた。

なんだろうか。いやに緊張してしまう。男女が二人でホテルに泊まるなんて……。

そう思うと、体が火照ってきてしまう。

誠には喜んでもらいたい。最高の一日にしてもらいたい。

そのためにはどうするべきだろうか。……やっぱり、するしかないだろうか。

でも、誠のためなら構わなかった。いや、して欲しいという想いのほうが、どちらかというと強かった。

泉は意を決し、口を開いた。

「ま、誠くん。あ、あのね……」

「あ、そうだな。先に風呂に入れよ。俺後でいいから」

「え……あ、うん。わかった……」

泉は立ち上がるとバスルームに入った。

お風呂に入るということは、誠はやる気があるということだろうか。そう思うと顔が真っ赤になる。緊張して、心臓が張り裂けそう
だ。

泉は服を脱ぎ、シャワーを浴びて体を綺麗にした。そしてそっと自分の体を眺めた。

「ちっちゃいな……」

お互いお風呂を済ませ、あとは寝るだけとなった。

誠が濡れた髪をタオルで拭きながらベッドに座った。

隣のベッドに座っている泉は、誠がシャワーを浴びている間や、今でもずっとそわそわして落ち着きがなかった。

そろそろだろうか。心の準備はしてきたが、いざとなると大丈夫だろうか。

いや、頑張らねば。これも誠のため。そう思えば何でもできる。

泉は顔を真っ赤にしながら、誠をチラッと見ると、思い切って口

を開いた。

「あ、あの……誠くん」

「さて、そろそろ寝るか」

「……え？」

誠の言葉に、泉は固まってしまった。

誠はベッドの中に入ると、幸せそうな寝顔で寝ようとしていた。

「あ、あの、誠くん？」

「ん？ どうしたんだ？ 泉は眠たくない？」

「え、えと、その……もう寝るの？」

「あ、まだ眠たくないか。なら、テレビでも見るか」

「い、いや、そういうことじゃなくて……」

「え？ じゃ、なに？」

誠は泉を見る。

泉はもじもじしながらそつと口を開いた。

「そ、その、あのね、え、ええと……誠くんは、今日楽しかった？」

「ああ、最高の一日だったぜ。すっごく楽しかった」

「そ、それで……もう満足した？」

「ああ、満足、満足。これ以上何か求めたら罰があたりそうだぜ」

「そう……」

泉は少し気が抜け、ほっとするが残念な気もしていた。

「じゃ、そろそろ寝るか」

「う、うん」

泉がベッドの中に入ることを確認すると、誠は電気を消し、隣のベッドに入った。

泉はふつと息を吐くと、誠を見た。

暗くてよく見えないが、そこにいるとわかる。

今日は楽しかった。自分も恩返しできて満足だ。計画通り進めることができ、申し分なかった。

泉は誠の方に体を向け、手を伸ばすと、手探りで探し、誠の手を掴んだ。

「ありがとう、誠くん」

泉はそのまま眠りに着いた。

誠はそつと目を開け、泉のほうを見た。

「俺のほうこそ、ありがとな、泉」

誠もぎゅつと泉の手を握り返し、眠りに着いた。

二人の最高の思い出は、静かに幕を閉じた。

誠はそつと目を開けた。

眠たい目を擦り、体を起こす。

寝ぼけた頭で周りを見渡し、自分が泉の小屋の中にいることに気づいた。

そして記憶を手繰り寄せ、なぜここにいるのか思い出した。

「そっか。寝てしまったのか」

泉の墓参りに行き、この小屋の中に入って、泉の日記を見、あのときのことを思い出した。

いつしか眠っていたようだ。時間を確認すると、すでに夕方近かった。

誠は帰ろうと起き上がる。

そのとき気づいた。自分はいっしか毛布を被っていた。

寝るときは何も着ず、布団の上で寝ていたはず。

誠はその毛布を見てそつと笑みを浮かべた。

言わずとも、誰がしたかなんてわかっている。

布団と毛布を綺麗に畳むと、誠は最後に小屋を見て帰って行った。

そのとき、日記のページが風で捲れ、最後のページが開いた。

そこには書かれているはずがない字が書かれてあった。

『ありがとう、誠くん』

香編 part 1：帰省

青く澄んだ晴天の中、誠は必死に脚を動かして走っていた。

火照ってきた体は熱を帯び、少しずつ汗が噴出し始め、つーっと流れるのがわかる。

心臓が激しく脈打ち、張り裂けそうだが休むことはなかった。

時刻は午前九時五十五分。約束の時間まで残り五分。

誠は急いである場所へと向かっていた。

タクシーに乗ればいいのだが、慌てて家を飛び出したので、財布は机の上。戻っても余計に時間がかかる。

誠はただ走ることしかできなかった。

でも、つらいとは少しも思わなかった。それよりも、目的地に近づくにつれて嬉しさがこみ上げてくる。

今日、香が帰ってくるのだ。

空港の中に、一人の髪の長い少女が、大きなキャリーバックを横に立っていた。

たくさんの人で溢れている中は、冷房が効いており涼しかった。飛

行機が飛び立つ音が耳に微かに聞こえる。

少女は壁に取り付けられた大きなデジタル時計をじっと見る。

時刻は十時を過ぎていた。だんだんとしびれをきらして苛立ちが募る。

少女は辺りをぐるっと見渡した。だが、目的の人物のいる気配はない。

「まったく。遅いな」

そのとき、後ろで大きな声が聞こえた。

「おい、香！」

名前を呼ばれた少女は、嬉しそうに笑みを浮かべて振り返った。そして、大きく手を振った。

「誠！」

誠は香の前に辿り着くと、疲れた体を休めるために膝に手を着いて息を整えた。

「もう、遅いよ、誠。約束の時間過ぎてるじゃない。何してたの？」

「わ、悪い。途中で横断歩道を渡れないおばあさんがいて、困ってたから手伝ってあげてたんだ」

そこで香は疑いの目が変わった。

「ふうん。本当は、寝坊して湊ちゃんに叩き起こされて慌てて走ってきたんじゃないの？」

そこで誠はクスクスと笑った。やっぱり香には隠し事はできないな。

誠は顔を上げると苦笑いを浮かべた。

「はは。あたり。そっちが正解だ」

香もクスクス笑った。

「ふふ。でもいいよ。許してあげる。ここまで走ってきたもんね」

香はハンカチを取り出すと、誠の顔に着いた汗を拭き取った。

「か、香。いいよ、別にそんなこと」

「ほら、じっとして。照れなくてもいいでしょ」

香は誠の汗を拭き終わると、改めて誠を見た。

「久しぶりだね、誠。元気だった？」

「ああ。毎日元気にしてるよ」

「そっか」

香は満面の笑顔になった。

「それじゃ、いい」

香は大きなキャリーバックを誠に任せ、空港を飛び出した。

二人は誠の家に向かって歩いていった。

一週間ほど前に、香から一本の連絡が来たのだ。

ゴールデンウィーク中は、時間があるから島に戻ってくると。その間、誠の家に泊まると言い出したのだ。

そのことを聞いたとき、誠は抑えることができないほど嬉しかった。

香ともいろいろな思い出がある。つらい思い出もあるが楽しいこともあった。

そのときのことが、自然と思い出される。

香はスカイを使い、人やあらゆる物の心が読めるようになったのだ。

だから隠し事はできない。あっさり見破ってしまう。

そのせいで、桜楼学園の中等部や高等部に在学中はつらい目に合った。

自分の心が勝手に読まれる。

そう思い、ほとんどの生徒が香から遠ざかり、香はいつも一人だった。

本来はそんなことしない。

香は優しく、正義感が強い子だった。

しかし、一人の少女によって、悪い噂が流れ、いじめなどの苦痛にあったのだ。

だが、今ではそんなことはない。

ケンカしていた親友の一河岬とも仲直りし、他にも多くの友達もできた。

スカイのせいでいろいろあったが、香は楽しそうにしていた。

しかし、香には将来獣医になりたいという夢がある。

そのために、東京の学校で勉強するといい上京したのだ。

あれから一年。香は久しぶりに帰ってきた。この日をどんなに待ち望んだか。

「この島も一年ぶりか。懐かしいな。あまり変わってないみたいだね」

香は両手をいっぱいに広げて先を歩いていく。

誠はその後姿を見て、どこことなく安堵した。

一年間会えなかったが、香は変わっていなかった。

ずっと心配だった。

あっちでうまくやっていけているのか。いじめられたり、環境に慣れずに困っているのではないかと。

そんなことはまったくないようだ。自分の夢のために頑張っている。

そのことを知り、安心した。

「ほら、誠！ 早くいこうよ！」

香が大きく手を振って待っていた。

誠は軽く振り返して、香の元に走った。

家に着くと、中で待っていた湊が出迎えてくれた。

「あつ、香さん。お帰りなさい」

「湊ちゃん、久しぶり！」

香は湊を見た途端、勢いよく抱きついた。両腕いっぱい抱きしめ、優しく湊の頭を撫でる。

湊は少し困っていた。

「会いたかったよ。あいかわらずかわいいね」

湊は香の抱きしめから顔を出すと苦笑いを浮かべた。

「あ、ありがとうございます。ははは……」

香を中に招き入れ、湊特製の昼食を食べながら香の話聞いた。

東京は空気が悪く、こことはまったく違うようだ。自然が見当たらず、コンクリートの建物ばかりだと。水道水も満足に飲めず、慣れるのに時間がかかったようだ。

学校の授業もこと違い、難しくもつと先を進んでいるので、追いつくのには必死だそう。毎日帰ったら四時間は勉強しているらしい。

「湊ちゃんの料理はおいしいね。いつもコンビニのお弁当だから、余計にそう思っちゃう」

湊特製のハンバーグを食べ、香は絶賛していた。

「ありがとうございます。ほら、兄さん。口開けて」

湊はハンバーグを箸で掴み、誠の口元に持ってきた。

「み、湊。今はいいって。香がいるだろ」

「いつもしてるじゃない。恥ずかしがらないでよ。ほら、アーンし

て」

湊は止めようとせず持つてくる。

誠は仕方なく口を開けてハンバーグを口に含んだ。

「どう？ おいしい？」

「あ、ああ。うまいよ」

「よかった」

すると、香がいきなり立ち上がり、誠の腕を掴むと居間を出た。

二人は廊下に出ると、香は誠に問い掛けた。

「あ、あんたたち、いったいどういう関係なの？」

香の声は少し震えており、混乱しているのか、異様に迫り寄ってくる。

「え、ええと、あのな……」

「まさか。誠、いくら家族が欲しくて妹を願ったからって、その妹に恋したんじゃない……」

香は湊がスカイで生まれたことを知っていた。

香が上京する前、最後に香は誠の心を読み、秘密を知ったのだ。

誠はそのことを教えたことを覚えている。

「え、ええと……実は、その通り。で、でも、別にいいだろ。血は繋がってないし……」

「だからってね」

香は重いため息を吐いた。

「まあ、誠がそんなに好きなら別れるなんて言わないけど、うまくやってるの?」

「おう。ちゃんと仲良くやってるぞ。校内ではベストカップルって言われてるし」

そこで香は誠の心を読んだ。誠と湊の過去がどんどん頭の中に入ってくる。

「……どうやら本当のようね。全部瞳ちゃんのおかげだけど。それでどこまでいったの?」

「どこまでって?」

「キスは何回?」

「え? き、キス? ……」
「五回くらいかな」

「う、五回? あんたたち、三か月くらい付き合っておいて五回しかしてないの?」

「で、でも、さっきみたいにご飯食べたり、一緒に帰ったり、仲良いぞ」

香はまたやれやれといった感じでため息を吐いた。

「あんたらは子供か。小学生みたいな付き合い方ね。もうやってると思っただのに……。それもまだみたいね」

香はビシッと誠の顔に指をさした。

「いい？ 男が女をエスコートしないと、女の子は不安になるの。キス五回じゃ、湊ちゃんかわいそうでしょ。誠がしっかりしなくちゃ」

「そ、そんなこといわれても……」

「このゴールデンウィーク中、私が手伝ってあげる。あんたたち二人を最高のカップルにしてあげるわ」

香はニヤツと笑みを浮かべた。

そして、香の作戦が始まった。

その作戦が、改めて自分の心と向き直るとは知らずに……。

香編 part 2：作戦

香は布団から起き上がると大きく背伸びをした。

窓から注ぐ太陽の光が眩しい。今日もいい天気だ。

昨日の夜、誠の家に泊めてもらい、客間で寝かせてもらった。

仏壇もあり、そこには誠の両親の写真があった。

香はその写真を見る。

誠の両親を初めて見た。

誠の両親がいないことは知っていた。いつか心を読み、口に出さず心の中に沈めた。

香はそつと写真に触れた。そして心を読んだ。

目を閉じ、写真立てから想いが流れ込まれる。

読み終わると、香はそつと微笑んだ。

「私は大丈夫ですよ。あの二人の幸せを、願ってください」

香は布団を片付け、居間へと足を運んだ。

居間にはすでに誠も湊も起きており、テーブルの上には三人分の朝食が並べてあった。おいしそうなご飯や味噌汁、焼き魚があった。

「あ、香さん。おはようございます」

「おはよう、香」

湊はキッチンで卵を焼いている。誠はソファに座ってテレビを見ていた。

「おはよう。おいしそうな朝食だね」

香はテーブルの前に座り、その上に置いてあった新聞を広げ読み始めた。

「なんかおもしろい番組あるか？」

誠が中を覗いて訊いてくる。

「誠、テレビ欄しか見てないでしょ。ちゃんと全部のページを見なさい。バカになるわよ」

「兄さんはすでにバカですよ」

最後の朝食の品を持ってきた湊が笑って言った。

「そっか。それもそうね」

「おいおい。なにそんなバカにしてんだよ」

そうやって楽しい朝を迎えた。

香は一度自宅に戻るといい、帰る準備を始めた。

客間で荷物の整理をする。湊も手伝い、今は二人だけだった。

そのとき、香が口を開いた。

「ねえ、湊ちゃん。湊ちゃんは、誠のこと好き？」

「え？」

湊の顔を一瞬で真っ赤になった。

それを見て香はクスツと笑った。心では大好きだと言っている。

「な、なんでそんなこと訊くんですか？」

湊が恥ずかしそうに言う。

「ごめん、ごめん。ちょっとね、二人はお似合いだと思ったから、応援したくなったの」

それを聞き、湊は頬を赤く染めうつむいた。

「あ、ありがとうございます」

「うつん、いいのよ。さて、あのバカはどこにいったかな」

香は立ち上がると、誠を探しにいった。

誠は居間で新聞を見ていた。もちろん、見ていたのはテレビ欄。

「誠」

香は誠の隣に座った。

「いい？ 私が家に帰っている間に、湊ちゃんをデートに誘いなさい」

「え？ なんだよ、いきなり」

「いいから誘いなさい。絶対よ。それより、今までにデートしたことがある？ 旅行とかさ」

誠はすぐに首を振った。

「いや、ない」

それを聞いて香は頭を抱える。

本当にバカだ。

「明後日一緒にデートしようっていうのよ。デートもしないカップルなんて聞いたことないわ」

香は立ち上がると、居間を出ようとした。

「またここに来るけど、それまでに済ませるのよ。あとでエスコートの仕方教えてあげるから」

香は軽く手を振ってその場を後にした。

香はキャリーバックを持ち、家へと歩いていく。

快晴と心地良い空の下、気分よく住宅街を進んでいく。

「誠、ちゃんと誘えたかな。ま、デートくらい誘えるわよね。そこまで誠は臆病じゃないし。帰ったらいろいろ教えないとね」

そこで香はふと立ち止まった。

それで、いいのかな？

自分はそれでいいのだろうか。誠と湊のために協力する。

そんなこととして自分に何のメリットがあるのだろうか。

いや、そんなことはどうでもいい。あの2人にはお世話になった。

恩返しができれば、それでいいのではないか。

そう自分に言い聞かせ、香は再び歩き出した。

誠の家に戻ってくると、香はさっそく誠に状況を説明してもらおうと思った。

「誠いる？」

居間に足を運ぶが、そこに誠の姿は見当たらない。

いるのは湊だけだった。台所で夕食の準備をしている。

「湊ちゃん。誠はどこにいるか知ってる？」

「兄さん？ 兄さんなら、多分二階の自分の部屋だと思いますよ」

そこでついでにあのことも訊こうと思った。

「ねえ、明後日どこに行く予定ある？」

「明後日ですか？ いえ、どこにも」

そこで香は首をかしげた。

予定がない？ ということだろうか。湊の心を読むが嘘を言っていない。

とうことは……。

香は少し怒りを抑え、誠の部屋に向かった。

わざとらしく足音を轟かせて階段を上がる。

「誠！ どういうことよ！」

誠の部屋を勢いよく開け、香はドスドスと足音を立てて中に入
た。

「うわっ！　びっくりした。なんだ、帰ってたのか。ノックくらい
しろよ」

誠はベッドの上で雑誌を読んでいた。

香もベッドの上に乗っかると、誠の首をぎゅっと締めた。

「なんでデートに誘ってないのよ。ちゃんと言ったでしょうが」

香の表情は怒りで満ち溢れていた。

それが手にも現れ、誠は苦しそうだった。

「だ、だって、言おうとしたけど……緊張して……」

「妹にいつのに何で緊張するのよ！」

「だって、妹というか恋人と思っているほうが強いし……」

「あんたね」

そこで香は気づいた。

誠がさつきまで見ていた雑誌にはデートスポットの紹介をしていた。
これで勉強していたようだ。

香は誠の首を締めていた手を緩め、雑誌に手を伸ばした。

「なんだ、ちゃんと考えてるじゃない」

誠は首をさすって雑誌を覗き込んだ。

「ああ、いろいろ見たけど、どこがいいのかわかんなくて」

香はぱらぱらと捲って見ていく。

ここからじゃちょっと遠いところばかりだ。いいところは大抵そうだが。

「まずは誘わないと意味ないでしょ。ほら、今行つてきなさい」

「ええ？ そんな、まだ心の準備が……」

「大丈夫。さっき湊ちゃんの心読んだけど、湊ちゃんもどこか行きたがってたよ。今がチャンスだから、頑張つてきなさい」

「そ、そうか。よし！」

誠は気合いを入れて立ち上がると一階へと降りていった。

「まったく」

香はふつと息を吐き、再び雑誌に目をやった。

どこも楽しそうな場所ばかりだった。恋人たちが幸せそうに笑い、楽しんでいる写真が載せてある。

自分もこんなふうに楽しめたかった。今度誠と一緒に行くのもいいかもしれない。

そこで香はふと思った。

どうして誠と行きたいと思ったのだろうか。

どこかに行きたい、誰かと楽しみたい、そう思えば誠を思い出してしまう。

もしかして、まだ自分は諦めていないのだろうか……。

香は首を振った。

いや、もう未練はない。

誠のことは振り切った。誠の好きな人は湊である。

自分は仲の良い友達。それ以上でも、それ以下でもない。それでいいのだ。

「さて、どこがいいか見つけるかな」

香は気合いを入れてページを捲っていく。

しかし、どこか寂しい感じは、薄々している自分がいた。

香編 part3：自身

誠は無事湊をデートに誘うことに成功したようだ。

うまく口に出せず、相当苦労したらしい。

自室に戻ってきた瞬間、誠は安堵の息を吐いた。

だが、これでスタートラインに立てた。

香は絶対に成功させようと思った。

香が来て二日目の日も泊まり、次の日は誠の部屋で作戦を練っていた。

二人でベッドの上に座り、雑誌を見ていく。

「いろいろ見て考えたんだけど、ここなんてどうかな？」

香はチェックしたところを誠に見せた。

「へえ〜。けっこういいところだな」

そこは旅館だった。

ここからバスで三十分移動しなければいけないが、値段もお手ごろで、良さそうなところだった。

露天風呂から見える景色は最高で、多くのカップルが訪れているら

しい。

その近くには公園もあり、そこもベストスポットで、夜景や天気がいい日は満面の星が見えるようだ。

「ここならいいんじゃないかな。けっこう楽しそうだし。明日はここにしないさい」

「うん。ここ気に入ったぜ。よし、さっそく予約しよう」

誠は携帯を取り出す。すると、電話をかけようとしたところで誠の手が止まった。

「香も同じ部屋でいいよな？ 三人分頼むぞ」

そこで香は誠の頭をパコンと叩いた。

「あんたバカ？ 二人のためのデートなのに、私が一緒じゃ邪魔してるじゃない」

誠は叩かれた頭を擦って香を見た。

「じゃあ、お前はどつするんだよ」

「もちろん行くわよ。ここ本当に良さそうだし。ばれないように、後ろからこっそり来るわ。部屋も別々。あんたはしっかり湊ちゃんをエスコートするのよ」

「あ、ああ、わかった」

誠は再び雑誌に目を通し、携帯で予約を入れる。

隣で香はふつと息を吐いて口元を緩ませた。

本当に誠は世話が焼ける。

誠はいざというときは頼りになる。行動力や優しさをかね揃え、相手のことばかりを考えている。

そんな誠に自分も助けられた。

だが、自分のことになるとほんとダメだった。

こうやって手伝わなければ、デートすら満足にできない。いつしか立場が逆になっていた。

香はクスクス笑った。

今思えば、こんな誠を見るのは初めてかもしれない。つい笑ってしまう。

「なに笑ってんだ？」

誠が疑問の表情で訊いてくる。

「なんでもない。それより、予約は取れたの？」

「ああ。部屋二人分。ギリギリ取れたぜ。一泊二日。ご飯もついてるって」

「そう。良かった。それじゃ、作戦を立てるわよ。絶対成功させるんだから」

二人は雑誌を見て作戦を練っていく。

そこで香はふと思った。

本当に楽しそうだった。

この旅館に行つて、自分も好きな人と楽しみたい。

一緒に行つて、話して、ご飯食べて。

お風呂に入ったら景色を眺めて、部屋で遊んで、公園に行つて星を見ながら過ごして。

香はちらつと誠を見た。

誠と行けたら、一番楽しいだろうな。

思い返せば、誠といるときが一番楽しかった。

学校から下校する時間、休みにどこか行つて遊んだり、散歩にいたり。

それだけで満足するほど幸せだった。

ならば、この旅行にだって行けば、あのととき以上の楽しさが自分を包んでくれるはず。

行きたい。楽しみたい。幸せになりたい。誠と、一緒に過ごしたい。

「ねえ、誠」

「ん？　なんだ？」

誠は香を見る。そこで香は気づいた。

誠の心は湊のことばかりでいっぱいだった。

湊とこの旅館でどう楽しく過ごすかということしか考えていない。

自分が入り込む隙など、微塵もなかった。

香は笑みを浮かべると手を振った。

「あ、ううん。なんでもない。楽しんできなさいよ」

「ああ、もちろん」

誠は笑みを返すと、再び雑誌に目を通していった。

香はそつとうつむいた。

そつだ。自分は手伝う。サポートするだけだ。それだけでいいはずだ。

もう、誠は自分のことなんて、考えていないのだから。

そう思うと、少し寂しい感じがした。

あの時のように、自分だけを見て欲しい。

そんなわがママを、つい抱いてしまった。

「それじゃ、明日は楽しみなさいね」

三人で夕食を食べたあと、香は自分の家に帰ることにした。

玄関で香は靴を履き、誠と湊は見送っている。

「でも、香さん。せっかく帰ってきたのに、私たちだけ旅行に行っているの？　今からキャンセルして、この休日中は」

そこで香は湊の口を人差し指で抑えた。

「私に気を使わないの。私も勉強で忙しいからね。帰ったら宿題やら何やらたくさんやることがあるの。だからいいのよ」

香は優しく微笑む。

そんな香見て、湊は同情したように悲しげな目になっていた。

「そうですか……。兄さん、家まで香さんを送ってあげてよ」

「え？　ああ、そうだな。送ってやるよ」

「ふふ。ありがとう」

香はニコツと笑みを浮かべた。

綺麗な星が瞬く中、二人は夜道を歩いていた。

閑とした静寂に包まれ、自分たちの砂利を踏む足音だけが耳に響く。

誠と香は夜空を見上げながら、ゆっくりとした足取りで歩いていた。

「明日は頑張りなさいよ。最低でも、キスくらいはしなさい」

「き、キスって……できるかな？」

「できなくてもするの。男がそんな臆病でどうするのよ」

そこで香は誠の背中をバチンと叩いた。

誠は呻き声を上げると、痛そうにうずくまり、背中を擦る。

「お、お前、なんか乱暴になってないか……？」

「そう？ 気のせいよ」

香は可笑しそうに笑い歩いていく。

誠も笑みを浮かべて着いて行っった。

「あ、そうだ。誠。あそこに行こうよ」

「あそこ?」

香の要望で、二人はある場所を訪れた。

本来夜は立ち入り禁止だが、静かに忍び込み、少し薄気味悪い雰囲気の中を通り、階段を登って上へと目指して行く。

そしてドアを開け、ようやく目的地へと辿り着いた。

「わあ。ここも久しぶりだな」

香は両腕をいっぱいに広げ中に入った。

二人は屋上に來たのだ。

夜空の中明るく照らす月が浮かび、星が輝いている。

目の前の景色は、商店街や住宅街から漏れる光で眩しく、イルミネーションのような見事な夜景だった。

「すごいね。綺麗だよ」

香はフェンスまで近づき、じっと夜景を見ていた。

そして静かに思い出した。

この場所で起こった、誠との思い出を。

出会ったのもここだった。

一人ぼっちだった自分の心を癒してくれる場所に向かい、ここで転校するかしないか考えようと思い、重い鉄格子の扉を開けた。

そこには一人の生徒がいた。

空を見上げ、寂しそうな表情で立っていた。

香はその生徒が同じクラスの清水誠だとわかった。

そしてそつと心を読んだ。

誰か死んだようだ。

誠の心は暗闇に取り込まれ、抜け出せないように濁っていた。

最後に、この人の心を自分の力で助け出そうと思い、手伝うことにした。

それから誠と一緒にいる時間が多くなった。

妹の湊やその親友の瞳と昼食を食べ、久しぶりに学校が楽しいと思えてきた。

そして、あの噂のせいでまた地獄の苦しみを味わった。

誠は信じてくれると思った。

あんな噂、嘘だって。

でも、誠は迷った。否定してくれなかった。

また、一人になるのだと思った。

もうあんな苦しみを味わいたくないのに。

でも、誠は最後には信じてくれた。

わざわざ家に来て、信じてくれるといった。

そのときどんなに嬉しかったか。やっと、自分にもこんな友達が出来たと思った。

そして誠のおかげで親友だった一河岬とも仲直りし、全て元に戻った。

でも、最後に自分は転校することを選んだ。

ずっといたかった。誠のそばにいて、楽しい時間を過ごしたかった。

でも、それではダメなのだ。

それではいつまでも誠を頼りにし、一人では生きていけなくなってしまう。

だから、転校することを選んだ。

でも、やっぱりつらかった。

そこで最後に恋人としてデートして欲しく、誠に頼んだ。

うまくいった。最高の思い出ができ、思い残すことはなかった。

だが、未練は残ってしまった。

自分は、誠のことが好きだ。

こんなにも人を好きになったのは初めてだった。

どうしようもなくこの感情が溢れ、抑えることができなかった。

別れたくない。会えなくなるなんて寂しすぎる。

だから、私はこの想いを伝えた。

その想いは届かなかった。

でも、もうよかった。伝えることができただけで、十分だった。

我に帰った香は、そつと誠を見た。

隣に立ち、同じように夜景を見ている。

そんな姿を見て、香の心はドキツとした。

頬が熱くなり、体が熱を帯びたようだった。

香の視線に気づき、誠がこつちを向いた。

「ん？　どうかしたか？」

「う、ううん。なんでもないよ。なんでも……」

香はうつむき、誠から視線を外した。

もう、自分は振り切ったはずだ……。

屋上を後にし、二人は香の家に着いた。

香は家の前で誠に振り返った。

「ありがと、誠。送ってくれて」

「これくらい、お安い御用だよ」

「さすが誠。優しいね」

香は誠に近づくと、ポンと肩に手を置いた。

そして優しく笑みを浮かべて言った。

「誠。あんたの一番のいいところはその優しさだよ。湊ちゃんを、その優しさで幸せにしてくね」

「ああ。わかってるよ」

香はうなずく。

「またね。明日、頑張りなさいよ」

そういつて香は家の中に入っていった。

誠は軽く笑みを浮かべ、家に帰っていった。

玄関で、香はその場に立ち尽くし、自分の胸を抑えた。

「なんだろう。この気持ち……」

香はぎゅっと拳に力を込め、静かに自分の部屋に向かった。

香編 part 4：決行

今日は誠と湊のデートの日。

二人は仕度をして、出かけようとしていた。

「ほら、兄さん。早くしてよ」

湊はすでに準備ができ居間で待っている。なのに、誠はまだできていなかった。

「わ、悪い。もうすぐ終わるから」

誠はバッグに服やら何やらを詰め込んでいる。

「もう。昨日のうちにしておけばよかったのに」

湊はソファに座り、終わるのを待った。そしてそっと思った。

そういえば、二人だけで旅行に行くのは初めてだった。

まさか、誠のほうから誘われるとは思わなかった。いつか自分から言わないと叶わないと。

少し予想外だったが、嬉しかった。やっと恋人らしくなってきた。

そう思うと、ついにやけてしまう。

「よし、終わったぞ。いくか」

「うん」

湊は元気よくうなずき立ち上がると、家を出た。

二人は家からバス亭に向かう。そこから三十分くらい乗り、旅館に着くのだ。

その後ろを、香はばれないようにこそこそ着いていつていた。

「おっ、ちゃんと向かってるわね。感心、感心」

と思っただが、香は少し愕然した。

今右に誠、その左に湊が歩いている。なのに、誠は左手に荷物を持っていた。湊はちゃんと左手に荷物を持っている。

内側の手をフリーにしなければ、手を繋ぐことはできない。

恋人同士なら当たり前のことだ。

昨日あれほど言っておいたのに、誠は綺麗に忘れている。

心を読んでも、誠は緊張しているのか、バス亭の道のりを忘れないようにしているだけだ。

湊のほうは、やはり手を繋ぎたいと思っている。

香はため息を吐くと、ばれないように帽子とサングラスをかけ、二人のあとを追った。

二人が歩いているとき、誠の携帯が鳴った。

「ん？ 誰だ？」

誠はポケットから携帯を取り出す。

着信相手が香だとわかり、誠は湊に見られないようにして携帯を開いた。

メールが届いており、内容は、荷物の手を逆にしろ、だった。

そこで誠は気づいた。内側に荷物を持っていたのだ。

誠は昨日香が言ったことを思い出すと、携帯を閉じ、荷物の手を逆にした。

「誰からだったの？」

「ああ。友達からだった」

誠はチラッと後ろを見た。

そこには確かに香がいた。香は手を繋げとジェスチャーしているのか、両手を握っていた。

誠はコクツとうなずくと、そっと湊の手を掴んだ。

すると、湊の顔が恥ずかしそうに赤くなっていたが、嬉しそうでもあり、ぎゅっと握り返した。

香はふつと息を吐き、一安心した。

二人はバスに乗り、そこから旅館へと向かう。

一応香は、バスの乗り方も教えていた。

これは人それぞれ好みによるのだが、女の人を窓側、男の人は内側に座るのだ。

そうすると、重い荷物などは男性が上の棚に上げたりできるので女性側は楽。

緊急停車しても、女性が内側に出て倒れないよう、男性は守ることができる。

誠はそのことは覚えていたらしく、その通りにしていた。

「ありがとう、兄さん」

荷物を上の棚に上げている誠に湊はお礼を言った。

「これくらいなんともないよ」

二人は楽しそうに笑っていた。

香は三つ後ろの席に座っている。

二人のそんな姿を見て、少しは役に立って良かったと思った。

だが、なんだろうか。少しもやややした感じがする。

これはいったい、なんだろうか……。

バスから降り、そこから少し歩いてようやく旅館に着いた。

「ああ。やっと着いたか」

「けっこう良いところだね」

二人はロビーで手続きを済ませ、部屋に向かった。

香もあとで手続きを済ませ、誠たちの隣の部屋に入った。

湊は荷物を置くと、縁側から外を見渡した。

「わあ。綺麗」

そこからは綺麗な自然が見渡せた。遠くには街も見える。なかなかの絶景だった。

「良いところだね。ありがと、兄さん」

「湊が喜んでくれるなら、俺も嬉しいよ」

二人はクスクスと笑った。

「ね、まだ時間あるし、ちょっと散歩しない？」

「ああ。いいぜ。さっそく行こう」

二人は出かける準備を始め散歩に出かけた。

香は隣の部屋で荷物を置くと床に寝転がった。

「ああ、疲れた。移動だけでけっこう大変だわ」

すると、ポケットにある携帯が震えた。メールが着ていて、着信相手は誠だった。

「『今から散歩に行く』」

香はあきれてため息を吐いた。

「よくそんな体力があるわね。ま、恋人と一緒にならそれも当然か」

香は立ち上がると出かける準備を始めた。

誠と湊は周りを見渡して歩いていく。

涼しい風が吹き、天気が良いので清々しい気分だった。

「いいところだね。なんだか落ち着く」

湊が楽しそうに笑いながらいった。

「住むとしたら、やっぱりこんな自然に囲まれた場所はいいな。静かで落ち着くし」

誠も同じように笑顔を見せた。

やっぱり旅行に来て良かった。

湊の楽しそうな表情をみるだけでも満足だが、一緒にこうして過ごす楽しい。

香には悪いが、手伝ってくれてありがたかった。

すると、湊がそっと誠の腕を掴んだ。少し恥ずかしそうに頬を赤く染めるが、嬉しそうでもあった。

誠もそっと笑みを浮かべると、そのまま一緒に歩いていった。

その後ろを、香は見つからないように尾行していた。

「へえ」。けっこうやるじゃない。でも、湊ちゃんが頑張ってるって感じね。誠はもっとエスコートしなくちゃ」

誠と湊は本当に楽しそうにしていた。

そんな姿を見て、香は少し戸惑った。

なんでだろう。自分はサポートするために着いてきた。こうして何かあっても迅速に対応できるように尾行している。

でも、なぜか自分が虚しく思った。そして二人のあんな姿を見るのが嫌になってきた。

誠が湊と一緒にいる姿を見ると、苦痛に思えてしまった。

誠と湊は旅館に戻り、夕食を食べることにした。

部屋に運び込まれ、おいしそうな湯気と香りを漂わせていた。

鍋料理をメインにしており、しゃぶしゃぶや茶碗蒸、御吸い物や刺身まであった。

「おいしそうだね。さっそく食べよ」

「おう。冷めないうちに食ってしまおうぜ」

二人は向かいあって座った。目の前のごちそうが食欲を増してくる。

「はい。兄さん。ちゃんと冷ましたから熱くないよ」

湊はしゃぶしゃぶの肉を誠のもとに持ってきた。ちゃんと口で息を吹きかけ熱くないようにしている。

「ここでもそんなことするのかよ」

「いいでしょ。私たちは恋人同士なんだから。はい、兄さん」

誠は少し戸惑ったが、最後は嬉しそうに湊からもらった。

「おお。おいしい。湊がくれたからよりおいしく感じるぜ」

「へへ。そう」

湊は嬉しそうに笑みを浮かべた。

「ほら。次は俺がしてやるよ」

誠は同じように湊にも持っていった。

「わ、私も？ ……あゝん」

湊も誠からもらう。ぱくつと口に含んだ。

「うん。おいしい」

「そっか。よかった」

2人は楽しそうに食事をしていた。

隣では、香りが一人食事を摂っていた。

「ああゝあ。料理はおいしいけど、一人は寂しいわね」

香りはそつと耳をそば立てた。隣から楽しそうな笑い声が聞こえる。

「いいなゝ。私も誠と食べたいな」

そこで香ははつと口を抑えた。

「今、私……」

今確かに誠のことを考えていた。

誠と一緒に食事を摂りたい。誠と一緒に過ごしたいと。

でも、今誠は湊と過ごしている。

二人は付き合っている。邪魔することはおろか、自分がそこに入り込むこともできない。

そう思うと、胸が苦しくなってきた。ぎゅっと締め付けられ、体が震える。

「なに、この気持ち……」

香は胸を抑えると、その場に横になり、うずくまってしまった。

香編 part 5：混浴

食事を終えた誠と湊は、今では部屋の中でのんびりと過ごしていた。テレビを点け、ぼーと見ている。

すでに二人は浴衣に着替えていた。白に青いラインが入った浴衣に黒い帯びを腰に巻いていた。

そのとき、湊がいった。

「ねえ、兄さん。そろそろお風呂入らない？」

「ん？ そうだな。それじゃいくか」

誠は立ち上がると温泉に行く準備を始めた。

すると、湊はなぜか顔をうつむき、頬を赤くしていた。そしてそつと口を開いた。

「あ、あの、兄さん……」

「ん？ なんだ？」

「え、えとね、さっき、温泉のことを旅館の人に聞いたんだけど……」

「ああ。それで？」

「それでね。その……こ、混浴があるんだけど」

「…………え？」

そこで誠はなかなか理解できなかった。思考が止まってしまっている。

「だ、だから、ね、その…………こ、混浴があるから、い、一緒に入らない？」

湊は顔を真っ赤にして視線をきよろしながらいった。

誠は呆然としており、湊がいったことをうまく理解できなかった。

「ど、どうかな…………」

湊がもじもじしながら訊いてくる。

誠はすぐに携帯を取り出すと急いでメールを送った。

隣で香はすでに布団を敷き、その上でうつぶせになって寝ていた。

もやもやした気持ちが治まらない。なんだろうか、これは…………。

そのとき、携帯が鳴った。香は手を伸ばし、携帯を開く。

誠からのメールで、その内容を見たとき香はつい驚嘆な声を上げてしまった。

「『湊が混浴に入りたいという。どうしたらいい？』」

香は焦った。それよりもそんなことを送らずに自分で判断しろと
いいなくなる。

香はボタンに手を添えた。しかし、指が動かなかった。

なんでだろうか。アドバイスしなければならない。そのために自分
は一緒に来たのだ。

でも、今は何もしたくなかった。これ以上何もしたくなかった。

だって、手伝えば二人の仲は深まっていく。

それが嫌だと心がはつきりいつていた。

香は目を固く瞑ると、ぐっと手に力を入れた。

「バカよね、あたし……」

誠は焦っていた。

はやく返事をくれ。待っている時間が何時間にも感じる。

湊はすでに準備を終えていた。あとは誠の返事を待つだけとなっ
ている。

誠は目を閉じて祈った。

そして携帯が鳴った。誠はすぐに開くと内容を見た。

「『バカ。さっさと一緒に入ってきてなさい』」

誠は携帯を閉じると湊にいった。

「い、いいぞ、湊……」

誠の言葉を聞くと、湊は恥ずかしそうに、でも嬉しそうにうなずいた。

「うん」

二人は一階にある温泉に向かった。その間お互い一言も口を開かなかった。

嫌に緊張し、二人とも動きがぎこちなかった。

混浴と書かれた暖簾をくぐり、二人は中に入ってしまった。

中は誰もおらず二人だけだった。脱衣所の向こう側に温泉があり、空が見える露天風呂だった。

「じゃ、私あつちで脱いでくるね」

「あ、ああ……」

湊は右側の端っこに向かった。誠はその逆の左の端っこに向かった。

誠の心臓は激しく脈打っていた。体が火照り、緊張が収まらない。後ろでは湊が服を脱いでいる。そう思うだけでうまく力が入らなか

った。

手が振るえ、うまく服が脱げない。

誠は急いでガバツ服を脱ぎ、籠の中に放り込むと、先に温泉に入りに行った。

ドアを開け、体に軽くお湯をかけると湯船に入った。

露天風呂は気持ちよく、程よい熱さで体を温めた。ふっと息を吐く。

そのとき、後ろからドアが開く音がした。

誠の緊張は一瞬でピークに達した。

誠は振り返らず前を向いたまま微動だにしない。耳だけを傾け、湊を待った。

どうやら湊もお湯を被ったようだ。水が零れる音が聞こえる。そして水の上を歩く音が聞こえ、その音が近づくのがわかった。

「兄さん……」

湊は誠の隣にそっと入ってきた。脚から入り、湯船に浸かる。

その間も、誠はじっとしており前だけを見ていた。湊が息を吐く音が聞こえる。

とうとう二人は一緒の湯船に入ったようだ。

誠はチラツと目だけを動かし湊を見た。

湊は全身をタオルで包んでいた。頬を赤く染め、うつむいている。

誠は再び前を向いた。

やばい。やばすぎる。何もできない。ここから動くことも、しゃべることもできない。ずっとこのままの気がする。

すると、湊がそつと誠に寄り添ってきた。肩を着け、体重をかけてくる。

「み、湊？」

「兄さん、緊張してる？」

「え？ い、いや、別に」

「ふふ。すつこい緊張してるね」

「そ、そりゃ、ふ、普通そうだろ」

「そうだね」

湊は微笑むと、そつと誠の肩に頭を乗せた。

「星、綺麗だね」

「ああ」

露天風呂から見える星は綺麗だった。見上げれば幾千もの星が輝いている。

「兄さん。香さんからデートに誘えっていわれたの？」

「え？」

「だって、兄さんが自分から言えるはずないじゃない。旅行いこうなんて、今まで一回いつてないもんね」

「そ、そうだっけ？」

「でも、嬉しかったよ。兄さんと一緒にこんな楽しい時間を過ごせて。香さんには悪いけど、来てよかった」

誠はそつとうつむいた。

「あ、あのさ、湊。俺、こんなさ、だらしなくて、デートも満足に誘えなくて、自分勝手に、わがままなやつだけど、それでも……好きでいてくれるか？」

湊はそつと笑みを浮かべた。

「当たり前じゃない。私、ずっと兄さんのこと好きだよ」

「……そっか」

誠はそこでようやく緊張が解けた。

ふっと息を吐き、温泉のお湯に浸る。心が休まり、ようやく疲れが

取れてきた感じだ。

すると、湊が口を開いた。

「ねえ、兄さん。背中流してあげようか」

その言葉で誠の緊張はまた振り出しに戻った。

「え？ い、いいよ。別に」

「そんな遠慮なくていいのに。ほら」

湊が湯船から上がり、誠の腕を引っ張る。

そのときつい湊の体を見てしまった。タオルで全身を包んでいるが、胸の膨らみに目がいつてしまう。

誠はすぐに顔を背けた。

「い、いや、いいよ。体くらい自分で洗える」

「そっか。じゃ、いいんだね」

湊は誠の手を離れた。すると、なんだか寂しい感じがしてしまっ
た。

「あ、でも、たまには……」

「ふふ。もうどっちなの」

「……お、お願いします」

「了解」

誠は湊に背中を向け、湊はタオルに石鹸を擦り、誠の背中を洗った。

柔らかい手つきで体中が包まれる。ほっと吐息が漏れてしまった。

湊は誠の背中を洗いながらそつと思った。

やっぱり大きな背中をしている。誠も立派な男である。

普段だらしないが、いざというときは頼りになる。本当に、たくましい存在だった。

湊は軽く口元を緩ませ、ごしごしと洗っていった。

そのあと二人は風呂から上がり、浴衣に着替えた。

「ね、兄さん」

後ろで着替えている湊がいった。

「ん？ なに？」

「私の裸、見たい？」

「え？ えええ？」

「冗談だよ。もう、兄さんたら」

「は、はは。じょ、冗談か」

誠は苦笑して仕度を終わらせた。

すると、湊が後ろから抱きつき、耳元にそつと囁いた。

「いつかするときがきたら見せてあげる」

そこで誠は興奮してしまい、つい鼻血を出してしまった。

「ちょ、ちょっと兄さん、大丈夫？」

「わ、悪い」

「もう何考えてたの」

脱衣所からは二人の笑い声が響いていた。楽しそうな、愉快的な笑い声が聞こえる。

そのころ、香は部屋の中で布団の上に仰向けになり、ぼーと携帯を見つめていた。

「私、何してるんだろ……」

本当なら、一緒に入って来い、なんていいたくなかった。

それは二人の仲を深めることに繋がる。そして、自分の心を裏切ったことになる。

胸が苦しかった。ぎゅっと締め付けられ、満足に息もできない。

香は携帯を降ろすと、自分の胸を抑えた。

「誠……」

香は小さくまるまりうずくまった。

ふと思えば、誠のことを考えてしまう。脳裏に浮かぶ、誠の優しい笑顔。想像するだけで、胸が張り裂けそうだった。

逢いたくて、一緒にいたくて、楽しく笑いあいたくて……。

でも、その願いは叶わない。

誠の好きな人は湊だ。自分ではない。それは前からしっていたはず。

でも、自分の気持ちに、嘘はつけなかった。

「私、どうしたらいいの……」

すると、携帯に着信がきた。誠からのメールだった。

「『今からベストスポットの公園に行く』」

これを見て香は立ち上がった。

自分の気持ちを確かめにいくために。

香編 part 6：正直

誠と湊は温泉に入り終わったあと、そのままベストスポットの一つである公園に向かっていた。

ここからの夜景と夜空は綺麗で、一番の眺めだという噂だ。

旅館から少し歩き、ようやく辿り着く。

「うわあゝ。綺麗」

ここから見える夜景に、湊は感激を受けていた。

色とりどりに光る夜景は、心を躍らせるほどで、確かに眺めのいい場所だった。

「兄さんも見てよ。綺麗だよ」

「ああ。本当に綺麗だな」

誠も湊の隣に立って夜景を見る。感傷に浸り、じっと眺めていた。

その後ろ姿を香は木陰に隠れて静かに見ていた。そして悲しげな瞳を向ける。

自分もああやって誠と見たかった。楽しくこの旅行を過ごしたかった。

その想いが強くなってくる。そして確実に心がそうだと叫んでいる。

香は重くため息を吐いた。

自分はまだ諦めていないのだろうか。振り切っていなかったのだろうか。

でも、今誠には湊がいる。この気持ちは、どうすることもできない。道は一つ。諦めるしかない。

誠と湊はベンチに座った。

火照った体に程よい涼しい風が運び込まれる。そして二人の髪を静かなびかせていた。

「明日には帰るんだね。もっと居たかったな」

「俺も、もっと湊と一緒に楽しみたかったな」

「また来ようね、兄さん」

「ああ」

湊はそつと誠を見つめた。その視線に気づき、誠も湊を見つめる。

湊の頬を朱を帯びていた。その表情が一段と可愛く見える。

「兄さん……」

「湊……」

二人はそつと顔を近づけた。その距離が少しずつ縮まっていく。

湊はそつと目を閉じた。誠はごくつと唾を飲み込むと、意を決し目を閉じた。

二人の唇の距離はあと数センチだった。もう少しだ。差がうまうまていく。

そのときだ。

「ダメー！」

後ろから叫び声が聞こえた。

二人は目を開けると振り返った。そこには香の姿があった。

「香……」

「香さん……」

香は息を荒げ、じっと見ている。

そしてハッと気づくと、自分のおかれている状況に気づいた。

「わ、私……ご、ごめん！」

香はその場から逃げ出すように走っていった。

「か、香！」

誠が立ち上がって声をかけるが香はいつてしまった。

香は部屋に戻ってくると、電気も着けず、勢いよく布団の上に座り込んだ。

「私……何てことしたんだろ。二人の邪魔をするなんて、最低だよ……」

香は布団のシーツをぎゅっと握った。その上に雫が何粒も落ちていく。

本当に自分が最低だと思った。協力するなんていっておいて、一番良いところで邪魔して……。

絶対に嫌われた。誠や湊は怒っているはず。

自分がしたことは、それほど二人にとっては最悪なことだ。

そのとき、部屋がノックされる音が聞こえた。

「香？ いるのか？」

「誠……」

「香、いるんだろ？ 開けるぞ」

誠がドアのノブを捻ったときだった。

「待って！」

香が叫ぶと、誠は開けるのを止めた。

「香……」

「誠……ごめんね。本当にごめんね。私のせいで……私のせいで……」

「香……？」

誠はドアを開けるとそつと中に入った。

香は布団の上に座り、誠に背を胃向けていた。

誠は香に近づき、隣に腰を降ろした。

香は掛け布団をぎゅっと掴み、その中に顔をうずくまらせていた。体は小刻みに震えていた。

「ごめん……ごめんね、誠……。私、諦められなかった。私、誠が好きっていう気持ち、忘れることができなかった。だから……だから……あんな邪魔して……。せ、せっかく湊ちやんと……キスできたのに、それを邪魔して……。でもね、私嫌だったの。誠が、私の好きな誠が、他の人とキスするのが……嫌だったの」

「香……」

誠はそつと香の肩に手を回した。

すると、香は誠に抱きつき、胸の中で泣いた。

「ごめん、ごめん、誠。最低だよな。怒ってるよね。……サポートするとか言っておいて、邪魔するなんて最低だよな。……ごめん、誠。本当に……ごめん。本当にごめん……」

「もういい!」

誠は声を上げた。それを聞いて香は黙り込んだ。

「誠……」

「もういい。もういいから」

誠はそつと香を抱いた。優しく、温かく、頭を撫で、慰めた。

「香。お前の気持ちはよくわかった。別に俺は怒ってないよ。湊だつて、ちゃんとわかってくれた。もう泣かなくていいから」

「でも……でも、私、あんなこと……」

「もういいって。香、もう気にしなくていい。……ごめんな、香」

「……なんで、誠が謝るの?」

「俺がそうさせたんだろ? 香が俺のこと好きっていったのは覚えてる。なのに、俺は湊と付き合つて、しかもお前のサポートを受けた。俺が頼りないからこうなったんだ。全て俺が悪いんだよ。ごめんな、香。こんな思いさせて」

「誠……」

香は声を上げて泣いた。この気持ちを晴らすため、おもいつきり、誠の胸の中で泣いた。

その間、誠はずっと香を慰めていた。

次の日、香は目を覚ますと、誠の姿が目に入った。

自分は布団で寝ている。でも、誠は畳の上で寝ていた。

時間を確認するとすでに午前十時を回っていた。

そこで誠も目を覚ました。

「あ、起きたか」

「誠、どうしてここに？」

「どうしてって、ここは俺の部屋だぞ」

「え？　じゃあ、湊ちゃんは？」

「先に帰った。香によろしくって」

「え？　そ、そんな、私……」

そこで誠はぽんと香の頭に手を置いた。

「それ以上何もいうな。いったら本気で嫌いになるからな」

誠はニコツと笑みを浮かべた。

香はその笑顔を見て、力を抜くとコクツとうなずいた。

二人は朝食を食べた。

今わかった。つまり、湊と香が入れ替わり、湊は香の部屋を使って朝食を食べ、部屋をチェックアウトし帰ったようだ。

「誠……。その、ありがとう……」

「礼を言うのはこっちだよ。いろいろ手伝ってくれてありがとうな」

「……ううん。そんな……」

「さつき、旅館の人にいつて、一泊多くとらせてもらった。だから帰るのは明日。お前が東京に帰るのは明後日だから、ギリギリだけどいいだろ？」

「う、うん。なんか悪いね」

「いいよ。香がせっかく帰ってきたんだ。楽しまないとな」

香はそつと笑みを浮かべた。

やっぱり誠は優しい。そんなところが、一番好きだった。

その後は、一緒に散歩したり、近くのお土産屋で買い物したり

と、楽しく過ごした。

香はずっと楽しそうに笑っていた。

夜になると、二人は夕食を済ませ、部屋でくつろいでいた。

そのとき、香がいった。

「ね、誠。お風呂入らない？」

「ん？ そうだな。そろそろ入るか」

「それで、その……よかつたら混浴で入らない？」

「はあ？ じよ、冗談だろ？」

香は首を振った。

「もちろん、本気。ね、一緒に入る」

「ま、マジかよ……」

二人は脱衣所で浴衣を脱ぎ、露天風呂に使った。

誠の隣には香がいる。この前の湊と香が入れ替わったような感じだ。

「本当にありがとう。いろいろ迷惑かけたね」

「あ、ああ。気にすんな。何とも思っていないから」

誠の震える声に、香はつい噴出した。

「なに、誠。そんなに緊張してるの」

「だ、だって、お前な！」

すると、香が誠に近づき腕を掴んだ。そして自分の胸に押し付ける。

「ね、私の裸……見たい？」

そこで誠の顔を真っ赤になり、鼻血を出してしまった。

「な、なにやってんのよ、誠！」

「ま、また出やがった」

誠は鼻を抑えて急いであがった。後ろで香は可笑しそうに笑っていた。

そのあと、二人は月の光が差し込まれ中、布団の中に入っていた。お互い天井を向いている。

「ねえ、誠。もし、私が今誠に告白したら、どうする？」

「……ごめん」

「ふふ。わかってるよ。誠は湊ちゃんが好きだもんね」

香はふつと息を吐き、体の力を抜いた。

「ねえ、誠。……また、会い来てもいいかな？」

「ああ。いつでも来いよ。待ってるぜ」

誠はそつと口元を緩ませて答えた。

「うん。また、絶対会いに来るからね」

香も同じように笑みを浮かべ、二人は眠りに着いた。

誠と香は空港にいた。あと数十分で香が乗る飛行機が出る。

「それじゃ、楽しかったよ、誠。本当にありがと。湊ちゃんによろしくね。あとごめんって謝っておいて」

「それは次こっちに戻ってきたときに自分でいうんだな」

そこで香はクスツと小さく笑った。

「うん。そうする」

二人は笑みを浮かべながら見つめ合った。

思い出していたのだ。一年前のあのときのことを。

「ここで香は俺に告白したんだよな」

「うん。誠は見事に振ったけどな。こんな可愛い美少女の想いを」

「美少女かはわかんないけどな」

「なんですって」

「い、いや、嘘、嘘だよ！でも、嬉しかったよ、本当に……」

香はふつと笑みを浮かべた。

もう大丈夫だった。誠のことは振り切っている。もう思い残すことはない。

「ね、誠。覚えてる？私、一年前に屋上で言ったよね。キスしてって」

誠は照れたように笑みを浮かべるとそつとうなずいた。

「ああ、覚えてるよ。結局できなかったけど」

「あれ、今、してくれる？」

「え？」

香の表情は真剣だった、じつと誠を見つめ待っていた。

「誠……」

香はそつと目を閉じ、少し顎を上げた。

「香……」

誠は意を決すと、香の両腕を掴んだ。そしてそっと顔を近づけた。誠も目を閉じ、唇を近づけていく。あと少して二つの唇が重なる。あと数センチ。

そこで香が誠の頭を掴んだ。

「はい、ストップ」

「え？」

「あんたバカ？　なんで恋人いるのにキスしようとするのよ。それは湊ちゃんにあげなさい」

誠は状況が読めず困っていた。

「いい、誠。湊ちゃんを悲しませないでよ。あんな良い子はそうそういないよ。絶対に幸せにしてね。できるのは誠だけなんだから」

その言葉に誠は力強くうなずいた。

「ああ。絶対に幸せにする」

香はそんな誠を見ると小さく笑みを浮かべてうなずいた。

「うん。それでよろしい。それじゃあね、誠」

香は誠に近づくと、頬に軽くキスした。

そしてキャリーバックを掴むと大きく手を振って行ってしまった。

誠は突然の出来事で呆然としていた。そしてそつと頬に手を触れる。

「あいつ……」

誠はクスクス笑った。

「いつでも帰ってこいよ、香」

誠は振り返ると元来た道を引き返した。

香は飛行機に乗り指定座席に着いた。そして飛行機は離陸し、島を離れ飛び立っていく。

香は窓から外を眺め、小さくなっていく青空島を見ながらそつと呟いた。

「ありがとう、誠」

茜編 part 1：来訪

季節は夏。

暑い日差しが降り注ぎ、毎日気温30度を越える猛暑となった。

休むことをしらない太陽は容赦ない。見るだけでうつとうしかった。

蝉の鳴き声は聞こえ、夏という感じが嫌というほどする。

誠たちは夏休みに入った。三年生である誠は、学生生活最後の長期休業である。

受験生なら頑張って勉強するだろう。だが、誠は学力的に無理なので、すでに進学は諦めている。どこかに就職する予定だ。進学するにも金がない。

なので、この夏休みは派手に遊びまわろうと思っている。

今でも湊とどこかに旅行に行こうという計画を練っているのだ。

クーラーの効いた涼しい部屋の中で、二人はテーブルを囲み、旅行の資料を見ていた。

「さて、湊はどこか行きたいところはあるか？ 時間はいっぱいあるからな」

「うーん。私はバカンスに行きたいかな。でも、兄さんと一緒にいければどこでもいいよ」

湊はニコツと微笑む。誠は少し照れ笑いを浮かべた。

「そ、そうか。ま、一緒に楽しもうぜ」

「うん」

そのとき、玄関のインターフォンの音が聞こえた。誰か来たようだ。

「ん？ 誰だ？」

誠は立ち上がると玄関に足を運び、ドアを開けた。

「はい、どちらさま？」

「誠お兄ちゃん！」

ドアを開けた瞬間、いきなり小さな女の子が飛びついてきた。その勢いのまま、誠は後ろに倒れた。

そのとき大きな音がしたので、中から湊が駆け寄って来た。

「ど、どうしたの、兄さん。大きな音がしたけど……茜ちゃん？」

「え？」

誠は痛がりながらも体を起こし、抱きついている人物を見た。

誠の上に乗っかっているのは紛れもなく、たしかに秋野茜だった。

「会いたかったよ、誠お兄ちゃん。湊お姉ちゃんも久しぶりだね」

茜は嬉しそうに笑みを浮かべた。

誠は何がなんだかわからず戸惑っていた。

そのとき、後ろから一人の女性が顔を覗かせた。それは茜の母親である時雨さんだった。

「お久しぶりです。誠さん。湊さん。ご無沙汰しておりました」

時雨さんは丁寧な頭を下げた。

とりあえず、二人を中に招き入れ、居間に案内した。

秋野茜は、島の中では有名なアイドルなのだ。

出会ったのは去年の夏。

茜の本当の年齢は誠と同じ十七歳。

しかし、見た目はどう見ても、小さな女の子で小学生。

その理由はスカイを使ったからだ。

茜の母親である時雨さんは元人気アイドル。今では茜のマネージヤーだ。

時雨さんは娘の茜も同じようにアイドルにするために、幼いころか

ら毎日レッスンに明け暮れていた。

そのせいで、茜は学校に行っても友達はずれず、楽しい学校生活も送れず、それらしい思い出もない。

だから、スカイを使ってもう一度子供になリたく小さくなつた。そんなときに、誠と出会ったのだ。

最後には、時雨さんと再会し、二人は仲直りした。そして茜の思ひ出作りをし、茜は帰って行つた。

誠は台所から冷たいお茶を持ってきた。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

時雨さんはぺこりと頭を下げた。

その間に、湊と茜は楽しそうに話している。

「本当に久しぶりだね。テレビ見てるよ。もうすごいね。茜ちゃんかわいい」

「ありがと、湊お姉ちゃん。私も嬉しいよ」

二人は話で盛り上がっており、湊は密かにサインまで貰っていた。

「それで、今日は遊びに来たんですか？」

誠は時雨さんに問い掛けた。

「はい。近くで映画の撮影が今度から始まりまして、近くを通ったものですから挨拶に来ました。突然ですみません」

「いえ、それは構いませんよ。俺も、茜と会えて嬉しいです」

「それで、ちょっとお願いがあるのですが」

「お願い？」

「ほら、茜。説明しなさい」

時雨さんに言われ、茜は湊と話すのを止めると誠に向き直った。

「ええとね、私と映画に出て欲しいの」

「は？」

いきなりそんなことを言われて戸惑ってしまった。理解できず、頭の中は混雑している。

仕方なく、詳しい説明を時雨さんがした。

「今度の映画の撮影なんですけど、茜がどうしても誠さんと共演したいと言いついて……」

どうやら茜は、今度の映画で主演なのだが、誠と共演しないと出たくないと言いついたそうだ。

「ちょ、ちょっと待ってください。俺演技なんてできませんよ？
映画の撮影なんて」

「大丈夫だよ。誠お兄ちゃんならできるよ」

茜は無邪気に笑っていつてくる。

「簡単に言っな。俺のせいで撮影の時間が遅れたら申し訳ないだろ」

「本当にすみません、わがまま言って。ほら、茜。諦めなさい」

時雨さんが困った表情で茜を宥めるが効かなかった。

「えゝ。嫌だよ。誠お兄ちゃんじゃないと、演技できないよ」

「あ、あの、ちなみにどんな映画なんですか？」

湊が訊くと、時雨さんは映画の台本を取り出した。

「『さよならの前に』？」

「はい。両親が交通事故で亡くなり、そのショックで口が効けなくなった少女を、高校生の男の子が助ける話で、よくありそうな恋愛映画です」

「へゝ。その少女が茜で、高校生役が俺と」

「はい。でも、迷惑ですよ？ いきなりこんなこと」

時雨は申し訳無さそうに頭を下げる。

「そんなことないよ。誠お兄ちゃん、どうせ暇でしょ？ 映画に出てよ」

「人を暇人扱いかい。でも、俺が出て、他のスタッフとか監督と怒んないの？」

「大丈夫だよ」

茜は自信たっぷりにいう。

「だって、この作品を考えたの、私だもん」

「え？」

「ええ！」

湊は驚きながら、すぐに感心したように大きく拍手した。

「すごい、茜ちゃん。アイドルってこんなこともできるんだ」

「へへ。まあね。つまり、私が主役兼監督なわけ。私が許可したら全ていいの」

「だからってな、カメラマンとかスタッフとかはつくんだろ？ 俺なんていう素人が出たら絶対迷惑かかる」

「大丈夫だよ。決定権は私にあるんだから。……それに、この作品は、誠お兄ちゃんにしかできないの」

「え？」

茜の目はいつになく真剣だった。いつものように冗談交じりの目ではなかった。

「兄さん。別にいいんじゃない？ 至少くらい協力してあげようよ」

湊がいつてくる。

「でも、俺演技は本当に苦手で」

「私がカバーするから大丈夫だよ」

茜が迫りよつてお願いしてくる。時雨さんは申し訳無さそうに頭を下げていた。

「……わ、わかったよ。俺でよければ、協力するよ」

「ほんと？ やった！」

茜は嬉しそうに飛び跳ねていた。

「よかったね、茜ちゃん」

「うん」

「本当にありがとうございます。ホテル代や、宿泊費等は、全て出しますので」

「え？」

時雨さんは誠に宿泊費や今後の計画、撮影などの注意事項などを説明した。

そして台本を渡すので、全て読み、大まかな内容を頭に入れ、自分の台詞を覚えるとのことだ。多少の練習もするようにと。

「役者も大変だな……」

その夜は、湊の特製のカレーを四人で食べ、茜は帰って行った。

「ばいばい、誠お兄ちゃん、湊お姉ちゃん」

「明日、車でお迎えに上がります」

「わかりました」

「またね、茜ちゃん」

茜と時雨は一礼して行ってしまった。

誠はふつと息を吐いた。

「大変な夏休みになったな」

「うん。でも、茜ちゃん、嬉しそうだったね」

「ああ。俺も頑張らないとな」

そこで誠はあのことを思い出した。

「わ、悪いな、湊。せっかく旅行いこうってことにしてたのに」

誠は頭に手をやって謝った。

そんな誠を見て湊は手を振って許した。

「ううん。いいのよ。気にしないで。私もついていくんだし、旅行よりはちよつと楽しいかもね」

「そう思ってくれると助かる」

「ほら、明日は早いんだから、さっさと寝よう。その前に台本読んでね」

「ああ。わかってるよ」

二人は居間に足を向け、明日への準備を始めた。

そのころ、茜と時雨はホテルへと足を向けていた。そのとき、時雨はそつと語りかけた。

「これでよかったの？」

「うん。ありがと。……これで、誠お兄ちゃんにいえるんだから」

茜は軽く笑みを浮かべた。

茜はこの撮影で、ある作戦を立てていた。

やり残した、去年の夏にした忘れ物を取り返しに……。

茜編 part 2：撮影

誠の家の前には、大きな黒い車が停まっていた。

その前に、時雨さんが立って待っている。

玄関では茜が腕を組んで待っていた。

「ねえ、誠お兄ちゃん、まだ？」

「ごめんね、茜ちゃん。多分、もう少しだと思う。兄さん、早くしてよ」

湊が玄関から大きな声を上げた。

「も、もう少しで終わる」

居間から誠の声が響いた。

今日から茜と映画の撮影が始まる。

それにもかかわらず、誠はまだ出発の準備ができていなかった。いつものことだが、どうして改善されないのか、頭を抱えてしまう。

「よ、よし、お待たせ」

「もう、誠お兄ちゃんはいつも遅いんだから。時間にルーズな人は嫌われるんだよ。ね、湊お姉ちゃん」

茜は頬を膨らませて文句をいった。

「はは。私はもう慣れたよ。兄さんのぐうたらは直らないもん」

「悪かったな……」

一同は車に乗り込むと、撮影場所に向かっていった。

「今日はまず、現地に着いたら皆さんに挨拶をお願いします。それから宿泊場所と撮影場所を紹介します。それから午後一時から撮影開始です」

時雨の説明を聞き、誠はガクガクと足が震えていた。

しょうじき、責任が重大すぎる。もし失敗したら怒られるんだろう。迷惑かけたらどうしようか。そんなことを考えると、震えが止まらない。

そんな誠を見て、茜が話し掛けてきた。

「大丈夫だよ、誠お兄ちゃん。そんな心配しなくても、誰も迷惑に思わないよ」

茜が満面の笑顔でいつてくる。

そんな言葉が心に染みて、安心感が溢れてくる。でも、やっぱり緊張は解けなかった。

現地に着くと、まずは挨拶をしに行った。すでにみんなはホテルの広場に集まっており、各自話や食事を摂っていた。

「うわゝ、なんか場違いなところに来てないか？」

誠は出入り口で中を覗いていた。後ろには茜たちがいる。

「なにしてるの？ 早く入りなよ」

茜が後ろからいつてくる。

「で、でも、まだ心の準備が……」

「もう、男なら覚悟決めなさい！」

茜が誠の背中を押し、その勢いでドアを開けて中に入った。

「ちょ、ちょっと茜！」

その瞬間、周りの人たちがみんなが誠の方を見てきた。

「お、この人が」

「あの秋野茜が選んだ人ね」

みんなざわざわと誠の話をする。誠はどうしたらいいのかわからず、その場に固まっていた。

「なにしてるの？ 私は挨拶とかあるから行くけど、ゆっくりして
いてね」

茜は時雨と一緒に前の方へ歩いていった。

「兄さん、大丈夫？　なんか顔色悪いよ」

湊が誠の体を揺すって聞いてきた。

すでに誠は緊張がピークに達し、硬直状態のまま、湊の声はまったく聞こえていなかった。

その間に、茜はステージに登ると、マイクを持って中央に立った。

「みなさん、こんにちは。主演兼監督を務めさせていただきます、秋野茜です。この度、映画『さよならの前に』の撮影の開会式にご参加いただき、ありがとうございます。今日から一ヶ月、撮影時間も極端に短いので忙しいことになってと思いますが、皆様のご協力をよろしく願います」

茜の挨拶が終わり、スタッフや他の出演者たちは大きな拍手で応えてくれた。

それを確認し、茜が再びマイクを口に近づけた。

「えー、それと、一つ皆様にお知らせがあります。すでにご存じだとは思いますが、今回の撮影には、演技には素人ではありますが、私の知り合いが参加します。主役の、清水誠くんです」

名前を呼ばれた瞬間、スポットライトが誠に当てられた。

ようやく緊張が解き、お腹が空いたので、テーブルにある豪華な料理を食べていた誠は、スポットが当てられたことに気づくと、今どいう状況なのかわからなくなり、混乱してしまった。周りの人た

ちはみんな誠を見ている。

「清水誠くん、ステージに上がって、一言挨拶をお願いします」

「ほら、兄さん」

湊に背中を押され、誠は混乱状態の中、誠はステージに上った。

「はい」

誠は茜からマイクを受け取った。しかし、何をいつていいのかわからず、その場に立ち尽くしていた。

そんな誠を見て、茜は耳元に囁いた。

「ほら、自己紹介と挨拶して」

「あ、ああ……」

誠はよいよく理解すると、ステージの真ん中に立つて、スタッフのみんなに向き直った。

「え、ええと、清水誠です。秋野茜の友人です。演技とか、そういうのは、本当にド素人で、皆さんに迷惑をかけると思いますが、これからよろしく願います」

誠は丁寧な頭を下げた。それに応え、拍手が湧き起こる。

誠はほっと安心すると、マイクを茜に返し、ステージを降りていった。

「それでは、撮影は午後から入ります。それまで、皆様ご自由に寛ぎください」

茜も一礼し、ステージから降りていった。

開会式を終え、誠はホテルのベッドに座った。

「ああ、なんか開会式で疲れたよ」

誠は重いため息を吐いた。

「大丈夫、兄さん？　これから撮影だよ」

湊が隣でいつてくる。

「ははは。誠お兄ちゃん、緊張すぎだよ。そんなに固くなってちゃ、撮影のときはもっと緊張しちゃうよ」

茜は平気で笑っている。

「それでは、今から撮影場所に移ります」

時雨さんの一言で、誠たちは移動を始めた。

撮影場所は公園だった。ごく普通の公園で、他の人の姿は見えない。

それも不自然なので、それ役の人はちゃんという。周りは住宅街に囲まれ、桜の木が並んでいた。

「今から撮影を開始します。各自準備をお願いします」

茜が拡声器を使って指示を出す。それぞれ配置に着き、カメラや反射鏡などの調整を始める。

誠や茜などの役者は、スタイリストによってメイクされていた。

「誠お兄ちゃん、台詞覚えた？ 全部じゃなくていいけど、パート5までは覚えてるよね？」

「あ、ああ、まかせろ！ テスト前日の暗記なら得意だ！」

誠は台本を読みながら、自信なさそうに親指を立てる。

すでに緊張ガチガチで、顔が引きつっていた。

茜はクスクス笑っていた。

撮影開始である。

茜の両親が交通事故で亡くなるシーンから始まり、そのあと誠と茜の出会いのシーンだ。

さすがに役者として雇われている人たちはすごかった。ほぼNGなしで順調にスタートし、すぐに誠の出番が来た。

誠は通学途中で、ブランコに乗っている茜に気づき、話し掛けると

いうシーンだ。

「よいい、スタート！」

助監督の言葉で始まった。

「兄さん、いつてらっしゃい」

湊が家から誠を出迎えた。

密かに湊も出演していたのだ。これも茜の計画の一つ。

湊は誠の妹役だ。誠と違い、落ち着きがあり、しっかりとした口調と自然な演技でこなしていく。

「あ、ああ、いつてきます」

誠は湊と違い、少しぎこちなさがあった。

しょうじきいうと、普通の人よりも演技が下手である。そんな誠に助監督は頭を抱えていた。

それとは違い、茜は公園の中でクスクス笑っていた。

誠は少し緊張しているのか、ぎこちない足取りで歩いていく。家から公園へと歩いているのだ。

このまま歩き、公園で茜を見つけ、話し掛けるのだ。

それまでも自然とした演技が求められる。

公園で茜を見つけるには、さりげない感じが必要だ。最初からわかっているような感じでは、演技だとばれられる。

誠は普通に学校に通っているように振る舞い、公園の前を通ろうとしている。

誠の心臓は緊張で破裂しそうだった。

ここから本当の演技が試される。最初のシーンなので、うまく成功させたい。

茜はブランコに座りながら、遠くから見える誠を見ていた。

「来た、来た」

茜はふつと息を吐き、集中力を増した。

これから自分の演技が始まる。誠が下手なのはしょうがない。

それをわかっているのにもかかわらず、誠を選んだのだ。だからその分、自分の演技力で補うのだ。

茜が真剣な表情になると、役に入り込んだ。

今自分は、声の出せない子供だと。

茜は目に涙を溜め、流し始めた。

その間に、誠は公園の入り口の前を通り、茜に気づいた。

ここからだ。二人の出会いの場面。大切な場面だから、しっかりとこなしたい。

誠は茜がいるブランコに目を向けた。

「あの子……」

誠はできるだけ自然に立ち止まり、茜にそつと足を向けた。

誠は茜の前で立ち止まった。目の前では涙を流して泣いている小さな女の子がいる。

すごく上手だった。よく簡単に涙を流せるものだ。

わざとらしくなく、普通に泣いているように見える。さすがは人気アイドルだ。

誠はそつと台詞どおり、茜に話し掛けた。

「どうしたの？　こんなところで泣いて。どこか痛いのか？」

誠は優しく声をかける。その声に気づき、茜は顔を上げた。

その顔を見て、誠は驚いてしまった。

茜の目は赤く、頬には涙の跡があった。さすがは人気アイドル。その演技力は大人顔負けである。

その演技に負けないよう、誠も続けた。

「ほら、泣き止んで」

誠はポケットから白いハンカチを差し出した。優しく、満面の笑顔で渡す。

茜は鼻水をすすり、震える手でハンカチを受け取ると涙を拭いた。

誠は軽く笑みを浮かべた。

「元氣出しなよ。俺でよかったら、何でも相談に乗るよ」

誠は素人にしてはまあまあ演技でこなしていく。そして十分に気持ちが伝わってきた。

そんな誠を見て、茜はつい見とれてしまった。

これだ。この優しさだ。誠の一番の良いところ。温かく包んでくれる優しさ。

この優しさが、自分を以前包み込んでくれて、癒された。

その優しさに私は、感謝をしてもきれないほど、救われたのだ。

去年の夏の思い出が、自然と思い出され、次々に甦っていく。

茜は顔を引きしめた。

今日の前にいる、世界で一番好きな人。彼が、確かに自分の前でじっと見つけてくれている。

すでに始まっているのだ。自分の計画。自分のやり残したこと。
それを成し遂げるための道は、すでに出来上がっているのだ。

茜は決意した。

最後まで、そのときまで、歩いて行くと……。

茜編 part3：休暇

撮影が始まり、それからしばらく経った。

撮影は今のところ順調に進められている。

湊はちよくちよく出るだけで、演技にも問題ないのだが、誠はNGを連発し、スタッフや他の役者たちに迷惑をかけていた。茜だけは、可笑しそうに笑っている。

誠は何度も頭を下げ、また台詞も何度も復唱し、肉体的にも精神的にも、限界を感じ始めていた。

「ああ、もうダメ……」

今日の分の撮影が終わり、ホテルに戻ってくると、誠はすぐにベツドに倒れた。疲労も溜まり、このまま動けなかった。

「兄さん、大丈夫？」

湊は心配した表情で誠の隣に座ると、マッサージを始めた。

「おお、ありがと、湊」

「あまり無理しないでね」

湊にマッサージを受けながら、誠は思った。

なぜ自分が主演を演じなければならないのだろうか。こんなド素人よりも、もっと上手い人がこなせばいい。

わざわざ自分がしなければならない理由があるのだろうか。

それに、この映画の話しは、両親が亡くなった女の子を救う話で、今は女の子と住み始めたところまで進んでいる。

少し違うが、それはまるで、去年の夏と、同じような感覚だった。

茜はいつたい、何を考えているのだろうか。

すると、部屋のドアがノックされた。

「誠お兄ちゃん、湊お姉ちゃん、いる？」

入ってきたのは茜だ。茜はトコトコと奥に進み、二人を見つけた。

「あつ、マッサージ受けてたんだ。気持ち良さそうだね」

「ああ、最高だぜ。それで、どうかしたのか？」

誠は湊に礼をいい、起き上がった。

「うん。明日の撮影はお休みにしたの。だから、自由にしていいいからね」

茜がニコツと笑みを浮かべる。

「そうか。やっと休めるのか」

誠は嬉しそうに笑みを浮かべ、大きく背伸びをすると、またベッドに仰向けで倒れた。

そこで湊が忠告した。

「兄さん、この休みは兄さんのためだよ。時間は少ないのに、兄さんがそんなことだから、茜ちゃんが休みにしたんでしょ」

「え？ そうなのか？」

誠はガバツと起き上がって茜を見た。

茜は両手を振った。

「ううん。そんなことないよ。私もそろそろ休みが欲しかったし」

「だってよ」

誠が湊にいう。

湊はあきれたように軽く息を吐いた。

「ねえ、明日、一緒に海に行かない？」

茜が誠の隣に座って訊いた。

「海か。それもいいけど、俺はどちらかというと休みたいな」

「兄さん、茜ちゃんがかawaiiそうだよ」

湊が少し厳しい口調でいう。

「うつ。仕方ないな。じゃ、せめて午後からにしてくれ」

「うん。いいよ。それじゃ、明日ね」

茜は満面の笑顔で、手を振って部屋から出て行った。

茜は部屋から出ると、ドアに背をもたれ、胸に手を添えた。

「明日が楽しみだな」

茜はそつと口元を緩ませた。

約束通り、午後になると、時雨さんの車で海へと向かった。

誠たちのいるホテルから十分くらいで移動して着く。

少しして、青い大海原が見えてきた。

「うわー、綺麗だね」

湊がはしゃぎながらいう。

「うん。本当に綺麗だよ。ここも、撮影場所の一つにあるんだよ」

「へー、そうなのか」

誠はうなずいた。

車を浜辺で止め、誠たちは中から降りると海に向かって走った。

「ははっ、冷たい！」

湊は靴を脱ぎ、足を海水に浸す。茜も同じように入り、二人はかけあいを始めた。

誠は一人木陰に腰掛け、二人の様子を眺めていた。

潮の満ち引きの音がさえずり、心が自然と穏やかになってくる。

香りがただよってきて、涼しい風が吹く。ちょうどいい気温で、暑さを感じない。

「誠お兄ちゃん！」

茜が元気よく手を振っている。誠は笑みを浮かべて振り返した。

そのとき、隣に時雨さんが座り、同じように湊たちを眺めながら、そっと口を開いた。

「迷惑でしたよね？」

「え？」

「突然一緒に映画に出て欲しいだなんて」

誠は納得すると、浜辺の砂に触れた。

「まあ、少しの抵抗はありましたけど、今は楽しいと思ってますよ。茜とも、こうやって過ごせますし」

「それなら、いいのですが」

時雨さんはその場にあつた貝殻を掴むといった。

「今誠さんは、湊さんとお付き合いをしているのですか？」

誠は軽く口元を緩ませた。

「おかしいですか？ 兄と妹が付き合うのは」

時雨さんは小さく首を振った。

「いいえ。そんな愛もあると思いますよ」

誠は頭を掻いていった。

「実はですね、俺と湊は、血の繋がりも、何もないんですよ」

「え？」

誠は自分たちの秘密を時雨さんに話した。全てを知った時雨さんはうなずいた。

「そうだったんですか。そうとは知らず、すみません」

「いえ、気にしないでください」

時雨さんはそつと目を細めた。

「実は、誠さんにお問い合わせがあるんです」

誠は時雨さんの方を見た。時雨さんは一息置いて、口を開いた。

「どうか、あの子の気持ちを、答えないでいいので……受け止めてあげてください」

その言葉に、誠は俊敏に反応した。それから前に向き直り、茜を見ながら口を動かした。

「……俺が選ばれた理由は、それですか」

時雨さんは小さくうなずいた。

「あの子は私に相談しました。前のように自分で判断せず、親の私とどうすればいいかを。……そのときのあの子の目は、真剣そのものでした。これができなければ、先に進むことはできないと」

誠はそつと笑みを浮かべた。

「ま、愛する娘がそんなに真剣に相談したら、親ならどうにかして答えようと思いますよね」

時雨さんは目を閉じた。

「……はい」

誠は立ち上がった。

「俺はいいですよ。……茜の役に立つのなら」

誠はそつとポケットの中に手を入れた。

その中には、去年の夏、茜から貰った十字架のネックレスが入っている。それを握り締めながら思った。

茜が時雨さんに相談したことはなんだろうか。答えなくてもいい、しかし、受け止めて欲しい。

自分はいつたい、何を受け止めればいいのだろうか。

誠はそれを時雨さんに問いかけようとした。しかし、かぶりを振って止めた。

時期にわかる。いつか、茜が何かをするはず。

自分は、それを待つだけでいいはずだ。

誠はポケットからネックレスを取り出し、それを首にかけた。

太陽の光で反射し、キラキラと光っている。

「兄さん！」

海辺で二人が手を振っている。誠は足に力を込め、二人の元に走っていった。

海で遊んだあと、ホテルに戻ってきた。食事も入浴も終え、部屋で一段落していた。

中には、誠と湊、そして茜がいる。今三人でトランプをしているのだ。

「明日の撮影は、パート20からね。台詞覚えてる？」

茜が誠に問い掛けた。

「ああ。ちゃんと覚えてるよ。やっと半分くらい進んだのかな？」

「そうだね。これで半分かな。でも、後半はすぐに終わるから、順調だね」

茜は鼻歌まじりで嬉しそうに笑みを浮かべている。

「あつ、兄さん、それ着けているんだ」

湊が誠の首にかかっておるネックレスに気づいた。手にとって触れる。

「ああ。家から持って来たんだ。茜との思い出の品だからな」

誠は笑みを浮かべながら茜を見る。茜はなぜか、深刻そうな顔で

うつむいていた。

「どうしたの、茜ちゃん」

湊が声をかける。

我に返った茜は、無理に笑みを浮かべた。

「あ、ごめん、大丈夫だよ。私、明日の準備するね。それじゃ、おやすみなさい」

そういつて茜はそこから立ち去った。

茜は自分の部屋に戻った。そしてベッドに倒れた。

あのネックレス、持ってきてたんだ……。

去年の夏を思い出させる贈り物。楽しいことも、嬉しいことも、思い出させてくれる。

しかし、それだけでなく、あのことも……。

茜はぎゅっとシーツを掴んだ。

胸が締め付けられる。誠が愛しい。今、本気でそう思う。

こんな状態で、自分の目的は達成されるのだろうか。

そのとき、時雨さんが中に入ってきた。

「茜……」

「……なに？」

茜はそのままの状態で返事する。

時雨さんは茜に背を向けながらベッドに座った。そして重い口を開いた。

「茜は知ってるの？ 二人の関係を」

その言葉に茜は疑問の表情になり、耳を傾けた。

「二人って？」

時雨さんは全て話した。誠と湊の関係、そして重大な秘密も……。

それを知った茜は、絶望を味わった顔になった。

「そ、そうだったんだ……」

語尾が震えていた。それほど動揺しているのだろうか。

時雨さんはそつと問い掛けた。

「それでも、茜はまだ続ける？」

その質問は、茜に重く押し掛かってきた。

事実を知ってまで、続けることではないということかもしれない。

でも、今決断できるほど、自分は賢く、冷静ではなかった。

「ごめん、先にシャワー浴びるね」

茜は時雨さんと目を合わせることなく、シャワールームへ入った。

茜は服を脱ぎ、浴場へ入ると、シャワーの蛇口を捻った。上から熱いお湯が降り注ぐ。

茜はそのお湯を浴びながらうつむいていた。

「私、どうしたらいいの……？」

水で濡れた顔の中に、一滴の涙が頬を流れ、入り混じり落ちていった。

茜編 part 4：後悔

再び撮影が始まった。

残り少ない時間で進めなければならない。ノンストップで作業を急いだ。

それに伴い、誠をはじめ、他の出演者たちも気合いを入れ、演技に取り組んだ。

しかし、茜だけは違った。

簡単などころでミスをしたり、覚えていたはずの台詞を忘れたり、どこか様子がおかしかった。

そのせいで、茜は監督にも関わらず、助監督に厳しく叱られた。

休憩時間に、誠は椅子に座って落ち込んでいる茜に話し掛けた。

「大丈夫か、茜ちゃん」

誠はしゃがみこみ、茜の顔を覗く。

「……誠お兄ちゃん」

茜の瞳に活力が見えなかった。そうとう重症に見える。

「どうかしたか？ 具合悪そうだなぞ」

「ううん。大丈夫。ありがとう」

茜は無理に笑顔を作る。しかし、すぐにつつむき、元に戻った。

「茜ちゃん」

誠はそつと茜の頭に手を乗せ、優しく撫でた。

「元気出せよ。そんな落ち込んだら、俺まで悲しくなるぜ。いつもの、幸せそうな笑顔を、俺に見せてくれよ」

誠の言葉に、茜はうなずくとニコツと笑みを見せた。その笑顔は、いつもの茜の笑顔だった。

「その意気だ。じゃ、次も頑張ろうな」

誠は立ち上がると、軽く手を振って、湊の下に戻っていった。

茜はその後ろ姿を見届けると、そつと笑みを浮かべた。

やはり誠は優しい。どの言葉よりも心に染み、そして不思議と元気が沸いてくる。

それだけでなく、悩んでいたことがバカみたいに思える。

本当に、誠はすごかった。

でも、こればかりはどうしようもできない。あれからずっと迷っ

ている。

自分は、どうすればいいのだろうか……。

休憩が終わり、後半のシーンから始まる。

誠、湊、茜の三人は、家の中で楽しく食事をする。

茜は声が出せないのも、表情だけで表現しなければならない。伝達手段は紙に字を書くのだ。

それから少し進み、茜が初めて声を出すシーンが始まる。

茜は誠と一緒に遊園地で遊んでいたが、途中で迷子になる。そのとき、いかにも悪そうな男が茜をさらうのだ。

そのとき、咄嗟に助けを呼ばうと、茜は声を発するのだ。

「よし、始めるぞ！ スタート！」

助監督の合図で始まった。誠と茜は実際に遊園地をロケに、演技を始める。

最初は普通に楽しく過ごし、そのあと、自然と別れる。

茜は誠と離れると、不安そうな顔で辺りを見渡す。声が出ない分、演技でその人の心情を伝えなければならない。

茜は少し潤み始めた目で慌てる。キヨロキヨロと辺りを見渡し、誠を探す。

誠は少しして、茜がいないことに気づくと、慌てた様子で人ごみを掻き分け、茜を必死に探す。

その間に、茜は泣きそうになりながら、行き交う人の顔を見て探す。だんだんと不安が募り、恐怖心が芽生えてくる。

そのとき、茜を浚う役の人が茜に気づき、後ろからそつと近づく。

茜は肩を叩かれ、安堵したような表情で後ろを振り向いた。しかし、そこには誠ではなく知らない男。

その瞬間、茜は口を抑えられ、男に襲われてしまった。

パニック状態に陥った茜は暴れ出す。それを男は力づくで抑える。

その間に誠は走り回って探すが見つからない。

「クソ。どこだ、どこにいるんだ」

男は茜を連れて出口へと向かう。そのとき、茜は男が口を抑えている手を噛んだ。

「いて！」

男は咄嗟に茜の口から手を離す。口が自由になった瞬間、茜はおもいっきり叫んだ。

「助けて！ お兄ちゃん！」

その声を聞いた誠は不意に立ち止まった。

「今……」

そして誠は茜を見つけた。知らない男に捕まり、出口に向かって走っていく。

「助けて！ 助けて！」

誠は足に力を込め走り出した。誠に気づいた男も逃れようと懸命に走る。しかし、茜を抱えている分、誠の方が速い。

「お兄ちゃん！」

茜が手を伸ばして誠に助けを求める。

すぐに誠は男に近づくと、茜向かって手を伸ばした。そのとき、男は振り返り、誠の体をおもいきり蹴り飛ばした。

「うっ」

誠はその場に倒れると転げ回った。もちろん、本当に蹴ったわけではない。

「お兄ちゃん！」

誠は傷みに耐えながら起き上がる。そしてもう一度走り出そうとした。

だが、男は走っておらず、茜に向かってナイフをつき立てていた。

「動くな！ こいつが死んでもいいのか！」

男がナイフを茜の首に当てる。あと少しで切れるというところだ。

誠は何もできず、その場に立ったまま動かない。

男は少しずつ後ろに下がる。

周りの人たちも、何事かと思い、二人の光景を凝視する。そして状況がわかると、悲鳴を上げる者もいる。

そのとき、すぐに警察が来た。

「お前、その子を離せ！」

「うるさい！ 近づくんじゃねーぞ！」

誠は怖がる茜をじっと見る。

助けてやりたいが、どうしようもできない。拳を固く握り、悔しそ
うに歯を食いしばる。

このままでは、茜が死んでしまう……。

誠はいきなり叫び出すと、男向かって突進をした。

「うおっ！」

男が不意をつかれ、その場に倒れる。そのとき、男の持っていたナイフが襲ってきた。

誠は茜をかばうと、ナイフの軌道上に右腕を差し出す。その瞬間、おびたらしい血がアスファルトの上に飛び散った。

「お兄ちゃん！」

誠は傷みをこらえ、茜を抱えると男から離れようとする。その隙を狙い、警察が男を取り押さえた。

その様子を見た誠は、安堵するとその場に座り込んだ。

茜は誠の服を掴み、胸の中で泣いていた。誠はぎゅっと茜を抱きしめ、良かった、と呟く。

そこで助監督が声を上げた。

「オッケー！ 良かったぞ！」

その言葉で誠と茜は力を抜いた。

「けっこう疲れた」

「大丈夫？ 誠お兄ちゃん」

茜が心配そうに見る。

「ああ、大丈夫。まだまだいけるぞ」

誠は軽く笑みを浮かべる。そのとき、湊が近寄ってきた。

「二人ともお疲れ様。迫真の演技だったよ」

そういつて二人にタオルを渡す。

「ありがと。でも、ちょっと怖かったな。ナイフが本物に見えたし」

誠は腕についた血のりを拭く。

「ふふ。でも、兄さんかっこよかったよ」

「そ、そうか？」

誠は照れ笑いを浮かべる。

その間、茜は二人の様子を見てうつむいた。

「どうしたの？ 茜ちゃん」

湊が茜に声をかける。茜は顔を上げるといつものように笑顔を見せた。

「うつん。なんでもない。そうだ、次のシーンの台詞覚えなきゃ」

茜は立ち上がると、誠たちから離れた。そして休憩室で椅子に座ると、ふっと息を吐いた。

やはり二人は付き合っている。すぐにわかる。二人の間に恋人で

ある空間が生じ、誰も近づけさせない。

やっぱり、苦しい。切なく、悔しく、胸が締め付けられる。

この気持ちは変わらない。でも、なぜか二人を憎めない。自分の好きな人を取られているが、湊が嫌いだとか、いなくなればいいのに、などとは思えなかった。

茜は顔を上げた。目の前に大きな鏡がある。その中に映っているのは、小さく、小学生のかわいい女の子。

今初めて後悔したかもしれない。スカイを使い、こんな子供になつて……。

もし、元の姿で誠に出会っていれば、自分を選んでいたかもしれない。いや、きっとそうだ。自分はこんなにもかわいい。

でも、それは叶わない夢。スカイはもうない。元に戻ることはできない。

茜は肩を落とし、視線を下げる。

そのとき、休憩室に時雨さんが入ってきた。

「茜、さっきの演技良かったわよ」

茜はうつむきながらぼそと呟く。

「……ありがとう」

その様子を見て、時雨さんは茜の髪を直しながら口を開いた。

「あの二人の関係をじかに感じたのね」

「……私、どうしたらいい？」

茜の目が潤み始める。拳を握り、体が小刻みに震える。

時雨さんはふと笑みを浮かべる。

「それは自分で考えなさい。私は、いくらでも協力するから」

時雨さんは続けた。

「でもね、途中で諦めたら、この先ずっと後悔すると思うわよ。しないよりも、した方が、よっぽどいいからね」

自分の母親の言葉に、初めて深みを感じた。

たしかにそうだ。どうせ後悔するなら、して後悔した方がいい。

その先に待っている答えが、どのようなものであったとしても。

茜は目を閉じた。

「私、頑張ってみる」

その言葉に時雨さんはうなずいた。

「うん。その意気。さすが、我が娘」

「だって、私お母さんの娘だもん」

二人はクスクスと笑い合った。

茜編 part 5：覚悟

誠、湊、茜の三人は、家の中で演技をしていた。目の前には二人の老夫婦。

今しているシーンは、茜を引取る人が見つかったという場面だ。

目の前の老夫婦が、茜の母方の両親で、茜を引取ることだ。

誠と湊は困惑の表情をする。茜はつつむき、どうしようか悩んでいる。

老夫婦は頭を下げ、誠たちの元から去っていった。

茜がこの家から出て行くまで残り一週間。それが、残された時間だった。

そこで撮影が終了した。

次は、いろいろな思い出づくりとかで、あらゆる場所で遊ぶシーンがある。それが終われば、とうとうラストシーンが来る。

そのシーンをおわらせると、誠たちはホテルに戻り、くつろいでいた。

「映画ももう少して完成だな」

誠はベッドに座りながら口を開く。

「うん。なんだかんだ大変だったけど、ここまで来たんだね」

湊も誠の隣に座りながら答える。

「なあ、茜ちゃん。撮影終わったら、どこか遊びに行くか」

誠は椅子に座っている茜に問い掛ける。しかし、茜は何か考え事をしているのか、誠の声は届いていなかった。

「茜ちゃん？　おい、茜ちゃん」

「え？」

そこでようやく茜は気づいた。

「どうかしたのか？　ぼーとして」

「あ、ごめん。ちょっと撮影のことで。そうだ、ちょっと助監督と打ち合わせしてくるね」

そういつて茜は部屋から出ていった。

茜はドアの前で立ち止まると、背もたれにし、顔を下げた。

「次のシーンで、終わりなんだ……」

誠と過ごした夏、この撮影が、もう少しで終わる。楽しかった今年の夏が、過ぎ去ってしまう。

でも、去年と同じにはしない。今年は、去年とは違うのだから。

茜は自分の部屋に戻ってきた。部屋の中には雑誌を読んでいる時雨さんがいた。

「緊張してるの？」

茜に気づいた時雨さんが声をかける。

「……わかるの？」

時雨さんは軽く口元を緩める。

「自分の子供の表情くらいわかるわ」

「そっか」

茜は時雨さんの隣に座った。

「ねえ、お母さんは、どうしてお父さんを好きになったの？」

そこで時雨さんはつい噴出してしまった。

「どうしたの、急に」

「ちょっと気になって」

時雨さんは自分の指にはめている指輪を見ながら話した。

「そうね、何でだろう。気がついたら、好きになってた。恋ってそんなものじゃない」

「そうだね……」

「やっぱり、子は親に似るのね。実はね、私も昔はお父さんが好きで、追いかけたことがあるの」

「え？」

「一回は振られてるの。でも、諦め切れなかったから、わざわざあの人の家まで行って、もう一回気持ちを伝えた。そしたら、参った、君の気持ちは十分に伝わった、って。それから付き合い始めて、結婚したの」

「そうなんだ」

茜の父親は、誰もが知っているトップモデルなのだ。それだけでなく、歌手デビューや俳優としても活躍し、今ではハリウッドで撮影中でアメリカに行っている。

「さっき、お父さんから電話があってね、頑張れって」

茜はそつと笑みを浮かべた。

「そっか」

茜は立ち上がった。

「私、ちょっと打ち合わせしてくる。最後だもんね」

茜は胸を張って、部屋から出て行った。

撮影も順調に進み、残りわずかとなっていた。夏休みも残り少なくなってきた。

今思えば、映画の撮影も大変なところもあるが、どちらかというと楽しいものだった。

映画の製作方法や、裏での仕事、影ではこんなにも大勢の人たちが協力し、一つの作品を作り上げている。一人では決してできない仕事だと思った。

撮影もとうとう大詰めだ。皆ラストスパートだと思い、今まで異常に張り切っている。

皆はある場所に向かっていた。それは海である。

ここが最後の撮影場所だ。

このシーンが撮り終われば、映画は完成する。

誠たちは時雨さんの車に乗り、現場へと向かっていた。

その間、目の前に座っている茜はずっと口を閉ざし、何かを思いつめていた。

誠は声をかけようとした。しかし、すぐに止めた。

何か集中し、覚悟を決めているようにも見えた。このままそっとし

ておくのが一番かもしれない。

「見えてきたわよ」

時雨さんの声で、みな窓から外を覗いた。目の前には、この前休暇をもらったときにいった海が見える。場所も同じだ。

茜はその青く広がる海を見ながらぎゅっと胸を締め付けた。

いいいよだ。とうとう来てしまった。自分の、歩いてきた道の果てに。

一同は車から降りると、さっそく撮影の準備を始める。

太陽は沈みかけ、だんだんと茜色の空が広がってくる。夜になる前に終わらせるようだ。

誠と茜はメイクを終わらせると、浜辺に降り立ち、並んで海を眺める。

「とうとう、最後だな」

誠が口を開く。茜は無言でうなずいた。そして海を見ながら、そっと目を閉じると名前を呼ぶ。

「誠」

呼ばれた瞬間、ハッとして誠は茜を見た。

今茜は、誠、と呼んだ。お兄ちゃんをつけていない。つまり、これ

は茜が子供ではなく、元の姿、同年の十七歳として呼んだことになる。

茜は閉じていた目を開け、はつきりといった。

「私、伝えるから。……最後に、誠に」

茜は踵を返し、海に背を向け、歩いていく。その後ろ姿を見ながら、誠はさっきの言葉と、時雨さんがいった言葉を思い出していた。

この最後の撮影で、何があるのだろうか……。

誠の耳に、潮の満ち引きの音がやけに響いていた。

「よし、始めるぞ!」

助監督の声が上がる。みな配置に着き、撮影準備を完了する。

誠と茜は向かい合う。

茜の目は、いつもの目と違い、真剣さがビンビンと伝わってくる。

その様子を見て、時雨さんは湊と一緒に二人を見守る。

「茜……」

「ラストシーン、よい、スタート!」

助監督の言葉で始まった。

茜は集中力を増すと、演技を始めた。そして、自分の作戦を実行する。

それは、去年の夏の続きのような感じがした……。

茜編 part 6：伝心

最後の撮影が始まり、誠と茜は浜辺の上を歩いていた。

誠は前を、その後ろに数歩間が空きながら茜が着いて来ている。

潮の満ち引きの音が流れ、太陽は沈みかけて、空は茜色に染まる。
海に太陽の光が反射し、神々しく輝いていた。

撮影の設定では、明日茜は母方の祖父母に引取られ、最後に海を見に来たのだ。

誠はポケットに手を突っ込みながら歩き、そしてふと立ち止まると、後ろを振り返った。

目の前にはうつむき、困惑の瞳をしている茜がいた。

「……明日、いくんだよな」

誠が呟く。茜は気まずいそうにコクツとうなずく。

「そうか……」

誠は海に向き直った。茜色の反射光が全身に降り注がれる。

「……楽しかったぜ。お前と出会って、短い間だったけど、いい思い出だった」

誠はそこでふと思った。

この台詞……。台本通りだったが、まるで、去年の俺たちのようだ。

茜も海に向き直って口を開いた。

「私も、楽しかった。本当に……。すごく、楽しかった」

茜は目を閉じる。

誠は茜の台詞が演技でないように感じた。去年の夏のことを思い出
し、そのことをいつている感じがする。

すると、茜はしゃがみ込み、砂に指で絵を書いていく。

それを誠はそのまま見守った。これも台本通りだ。

茜は書き終わると、誠を見た。茜が書いた絵は、あいあい傘の中
に誠と茜の名前が書いてあるものだった。

「お兄ちゃん……」

茜は立ち上がって誠を見る。

誠はごくつと唾を飲み込んだ。

このあと、茜は涙を流し、誠に別れたくないと抱きつくのだ。

誠は心の準備をする。

二人の様子を、湊と時雨さんはじっと見ていた。

湊は小さく呟いた。

「まるで、去年のときみたい……」

湊の言葉に、時雨さんは反応した。

湊の言うとおりだ。このシーンは、場所は違うが、あのときのことを思い出し、茜が考えた。

そして、このあとのシーンは……。

「茜……」

時雨さんは自分の独身時代を思い出す。

今の茜の気持ちはわかる。自分もそうだった。だから、見守ることしかできないが、成功して欲しい。

「頑張つて、茜……」

茜はぎゅっと唇を噛む。

とうとうここまでできた。辿り着いてしまった。自分のゴールが……。あとはいうだけだ。気持ちを、伝えるだけだ。

でも、それができない。言葉が出てこない。緊張のせいか、恐怖のせいか……。あと少しなのに、その先に進めない。

「あ……、う……」

茜はぎゅっと胸を締め付けた。

息苦しさをを感じる。心が、胸がドキドキして、全身が熱く感じる。

この言葉を伝えることが、どれだけ難しいことか、どれだけ苦しく、そして勇気があることが、それを今初めて知った。

茜はそつと誠を見る。誠は堂々と立って、茜を待っていた。

目の前にいる。今、目の前に自分の好きな人が、自分のことを待っていてくれる。

去年とは違う。自分は決意したはずだ。伝えると、気持ちを好きな人に、全てを打ち明かすと。

茜はぎゅっと拳を握る。そして目を閉じ、大きく深呼吸して心を落ち着かせる。

大丈夫だ。きっと、上手くいく。成功するはず。しょうじきに、自分の想いを、伝えるだけでいいのだから。

茜はそつと目を開け、誠を見た。

「誠……」

茜が誠を呼ぶ。そこで誠は違和感を覚えた。

台本と、違う……。

「誠……あのね……」

茜は手を握り合わせ、胸にもって来ると、誠を見つめる。

「ずっと、言おうと思った。伝えようと思った。……ずっと、伝えなかった」

「茜……」

誠はつい呟いてしまった。

何か違う。演技ではない。茜は本気で何かをしようとしている。

「誠……聞いて。私の、気持ち……」

茜は息を吐き、心を落ち着かせる。そして、震えを抑え、誠にはっきりと伝えた。

「……好きです」

誠は言葉を失った。

今、なんて……。

茜の表情は恥ずかしそうにうつむき、顔は真っ赤になっていた。

「わ、私は……ま、誠のことが……好きです」

茜は顔を上げ、綺麗な瞳で誠を見つめる。

「茜、お前……」

誠は記憶の中で甦った。去年の茜との別れたときのことを。あの時の、続きのようだ。

誠は口を開き、必死に答えようとした。

「あ、茜……俺……」

すると、茜がそっと近づき、誠の胸の中につづくまった。

「いいよ、何もいわなくて……」

「茜……」

茜は腕を回し、ぎゅっと締め付けた。

「いいの。ただ、伝えたかっただけ。それだけで、十分だから……だから……」

茜は顔を上げた。その目は、少しずつ潤み始め、そして一滴の滴が頬を伝った。それは、茜色に輝き、流れていく。

「ずっと……忘れないでね」

誠は腕を伸ばし、優しく茜を抱きしめた。そして耳元に呟いた。

「俺、忘れない。この夏も、前の夏も……絶対……」

茜は嬉しそうに微笑むと、潤んだ目を閉じ、誠を抱き返した。

撮影が終わり、みんなホテルのホールで、完成披露宴を開いて盛り上がっていた。みんなお酒をあり、酔っ払っていた。時雨さんも飲んでいる。

誠は一人バルコニーに出て、輝く星と月を眺めていた。

そしてラストシーンでの、茜の言葉を何度も思い出していた。

あの言葉、そしてあのときの茜。全て伝わった。茜の気持ち、想い、全て自分は受け止めた。

でも、自分は何もしていない。これで、良かったのだろうか……。

「茜……」

誠はそつと呟く。そのときだ。

「なに？」

「え？」

隣には満面の笑みで誠を見ている茜がいた。

「お、お前、いたのかよ」

「へへ。こんなところで何してるの？ あっ、綺麗だね」

茜は身を乗り出して夜空を眺める。

「なあ、湊は？」

「ん？ さっきトイレにいくって」

「そっか」

誠は夜空に視線を戻す。

おそらく、湊は気を使ってどこかにいったのだろう。よく気が利くからな。

「ね、誠お兄ちゃん」

茜が誠の方を向く。誠は頬杖を着いた。

「お兄ちゃんってつけるのか？」

茜はクスクスと笑う。

「ふふ。忘れてないでしょ？ 本当の私の気持ちは。だからいいの」

茜は誠の首に下げられている十字架のネックレスに触れた。

「本当の私は誠のことが好き。でも、今の私は、誠とは仲の良い友達でいたい。だから、誠には忘れて欲しくない。本当の気持ちをね」

誠はうなずく。

「ああ。わかつてる」

茜はニコツと笑みを浮かべた。

「それでよろしい」

茜は誠の手を掴んだ。

「ほら、いこ」

茜は誠を引っ張り、中へと走り出した。そのときの笑顔は、今までの中で一番輝いていた。

誠と湊は家でテレビを見ていた。

テレビには茜をはじめとする映画のキャストたちがいる。今映画の試写会をしているのだ。

「茜さん。今回のこの映画はどんな映画なんですか？」

司会者に質問され、茜はマイクを握ると答えた。

「はい。この作品は、自分の想いを伝えることの重大さ、勇気を与える映画で、恋に歳の差も身分も関係ないという意味を込めています」

「それでは、最後に一言」

茜は目の前にいるファンに向かってはつきりといった。

「私は好きな人がいます。その人に想いを伝えました。残念ながら、その先は知りません。でも、想いを伝えることだけでも、十分にすばらしく、そして輝いていることだと思います。怖がらず、その一歩先を、皆さんも進んでください」

茜が頭を下げると、他のキャストも頭を下げた。そして幕が降りた。

「かつこいいね、茜ちゃん」

湊がパチパチと拍手する。

「ああ、本当にな」

誠は軽く口元を緩ませた。そしてリビングにある三人で撮った写真を見る。

誠、湊、茜の三人が映った、楽しそうに笑っている一枚の写真。

すると、一瞬茜が元の姿に見えてしまった。

「え？」

誠は目を擦り、もう一度よく見る。しかし、それはやはり小さな茜しか写っていないかった。

「どうしたの、兄さん？」

湊が問い掛ける。

「ああ、いや、なんでもない」

誠は笑って誤魔化した。

「さて、明日から学校だ。今のうちに準備するかな」

「珍しいね。でも、宿題は終わったの？」

そこで誠の動きが止まった。

「まさか、してないの？」

誠はゆっくりと湊に振り向く。

「撮影のことばっかで、一つもしてない……」

「ええ〜！ どうするの。もう明日だよ！」

「くっそ〜！」

そのころ、茜は時雨さんと共に空港に向かっていた。そのとき、時雨さんが問い掛けた。

「満足した？ 想いを伝えて」

「うん！ これで思い残すことはないよ」

茜はバックから一枚のチケットを取り出した。それはアメリカ行

きの航空券だった。

「お父さんが引越しの荷物は届いてるって言ってたわ。当分は日本に帰ってこれないわね」

「でも、私あつちでも頑張る。誠が応援してくれると思うし、それに」

茜は窓から青空を眺めていった。

「忘れないって、約束したもん」

時雨さんはそっと笑みを浮かべた。

「そうね」

茜はニコツと微笑む。そしてバッグから三人が映った写真を取り出した。

「ありがと、誠お兄ちゃん」

零編 part 1：帰宅

電車のホームで発車ベルの音が鳴り響いた。

駅員が笛を鳴らすと、電車はゆっくりと進んでいき、やがて姿が見えなくなってしまった。

そこには一人の少女が立っていた。

長い髪が風でなびき、それを手でそっと抑える。

少女は駅から出ると、そっと空を見上げた。そして軽く笑みを浮かべる。

「懐かしいな。帰ってきたんだな。……元気にしてるかな、誠くん」

その少女はそっと微笑むと、誠がいる街へと、歩き出した。

夏休みが終わり、数ヶ月が経ったとき、少し肌寒い日が続いた。

夏の残暑を残さず消し、新しい秋が訪れようとしている。木々に生っている紅葉は色を変え、地へと舞い落ちていく。

十月に入り、誠は生徒会室に訪れ、残り少ない仕事をこなしていく。

前生徒会長である汐風雫が転校し、代わりに雫の親友であり、書記

を勤めていた古池霞が就いた。

誠は前と変わらず、副会長として会長のサポートをしていく。

誠は副会長の席に着き、書類記入をしながら雫のことを思い出した。

雫は学園で全生徒から人気のある生徒だった。

容姿端麗、頭脳明晰、スポーツ万能、おまけにピアノが弾けて歌もうまい。密かにファンクラブもあり、生徒からの信頼は大きかった。

その圧倒的な支持から生徒会長に選ばれ、生徒会役員を集めるとき、副会長に誠を任命した。

それから雫の下で仕事をし、仲良くなった。

誠はそつと窓から空を見上げた。

あれから一年。雫は元気になっているだろうか。

「誠くん。早く仕事終わらせないと帰れないよ」

霞が意地悪そうに言い、誠は我に帰ると仕事を再開した。

今日も放課後は生徒会室に向かった。誠の生徒会役員としての仕事も残りわずかだ。最後の仕事を仕上げなければ。

生徒会室の中に入ったとき、誠は何か違和感に気づいた。

「ん？」

誠は会長の机に触れた。

さつき会長の席には書類のプリントの整理をするために引き出しから出していたのだが、机の上にはなく、すでに綺麗に整頓され、引き出しの中にしまっていた。

「あれ？　いつしたっけ？」

誠は後ろを振り返り、お茶を淹れている霞に問い掛けた。

「霞さん。机の上にあった書類、直してくれたんですか？」

霞は振り返った。

「え？　私は何もしてないけど」

「あれ？　おつかしいな」

誠は首をかしげながら、会長席を見ていた。

放課後、湊は先に帰ってしまい、誠は一人神社の方へと歩いていった。髪をなびかせる肌寒い風が吹きつけてくる。

実はいうと、今日は誠の誕生日である、十月十日なのだ。せつかなので、今日は散歩して帰ろうと思った。

というよりも、湊が誕生日の準備ができるまでふらついてるといったのだ。

「まだ時間あるな。久しぶりにあそこにいくか」

誠は目的地に歩いていくたびに、一年前を思い出していた。

頭の中は、雫との思い出が甦っていた。

去年の誠の誕生日、音楽室で華麗にピアノを奏でる雫と出会った。

そして生徒会長である雫は、誠を生徒会副会長に推薦し、一緒の時間が多くなった。

毎日が楽しく、仕事は大変だったが、充実した日々を送れていた。

だが、事件は突然起きた。

雫が幼いころ、雫と雫の母親に暴力を振るっていた雫の父親が、お金も行くところがないからと、突然雫の元を訪れ住み始めた。

一人暮らしの雫は、しょうじきいうと嫌だったが、自分の肉親であり、父親である人物を放っておくわけにはいかなかった。

だが、それが間違いだった。

雫は父親のせいで再び地獄のような生活が襲った。暴力と罵声を浴び、つらい日々を送っていく。

それに気づいた誠は、どうにかして雫を助けようとした。そのためにあらゆる策を練り、警察まで行って相談した。

しかし、最終的に、乗り越えなければならぬ壁は、高く、厚く、頑丈な物だった。

それは、雫の意志だった。

雫が自分は虐待を受けている、父親と過ごしたくない、助けて欲しい。そんな意志が、必要だった。

でも、雫はそれを望まなかった。なぜなら、雫は優しく、そして誰よりも幸せを願っているから。

自分の意志を見せれば、父親は寂しい思いをするはず。自分の父親にそんなことを思わせたくない。

雫は、最後まで首を縦に振ることはなかった。

だが、誠は諦めなかった。

そんなのはおかしかった。間違っているはずだ。親という者は、誰よりも自分の子供の幸せを願うはず。そう教えてくれたのは雫である。

なのに、雫の家庭状況の立場はまったくの逆だった。

そしてなにより、雫が幸せそうではなかった。

誠は意を決し、雫の父親に直接会い、説得することを選んだ。

しかし、それは逆効果で、誠は殴られ、ぼろぼろになった。

そこで雫が助けてくれた。雨の中、雫は誠を抱きしめた。そのとき、誠は雫に問い掛けた。

『お前の幸せって、なんだ？』

この言葉で、雫は初めて自分の幸せを考えた。そして、意志を見せた。

そしてようやく、雫の親は警察に捕まり、再び幸せな日々が戻った。

でも、それも束の間。

そのことを知った雫の母方の祖母が、雫を引取ることになった。

そして雫は、誠に最後に想いを伝え、電車に乗って行ってしまった。

誠は立ち止まった。目の前には神社へと続く階段が見える。そこでふっと息を吐き、にじみ出てきた涙を袖で拭き、ずっと顔を上げた。

もう会えないというわけではない。いつか会うと、二人は誓い合った。きっと、また会える。

誠は笑みを浮かべると、階段を一つ一つ登り始めた。

頂上に着くと、誠は大きく背伸びをした。目の前には大きな神社がそびえ立っている。その隣には母屋がある。以前雫が住んでいた家だ。

誠はお参りをして家に帰ろうと思い、本堂の方に顔を向けた。

そこで誠は足が止まり、目の前の状況に混乱してしまった。そして呟いた。

「……雫」

目の前には確かに雫がいた。

長くサラツとした髪、整った顔立ち、綺麗な瞳、間違いなく、元生徒会長だった、汐風雫だった。巫女の服を着、箒で本堂の前を掃いている。

誠は信じられない気持ちでいっぱいだった。まさか、こんなにも早く会えるとは思っていなかった。

「雫……」

誠は再び呟いた。

その声で、雫は誠に気づいた。同じように目を見開き、持っていた箒をつい落としてしまった。

「ま、誠、くん……」

雫はそつと歩いてきた。一步一步ゆっくりと近づいてくる。そのスピードが徐序に速くなり、最後は走ってきた。

「誠くん！」

雫は勢いよく誠を抱きついてきた。ぎゅっときつく、そして温かく、腕いっぱいに誠を包み込む。

誠はわけがわからず、未だに立ち尽くしていた。

「会いたかった。会いたかったよ。誠くん」

雫は顔を誠の胸に押し付けていう。

「し、雫。本当に雫か？ どうしてここに？ 母親の実家に帰ったんじゃない……」

「うん。帰ってきたんだよ。戻ってきたんだよ。といっても、一週間くらいだけだね」

雫はそつと誠から離れると見つめた。

「信じてたよ、また会えるって」

そこで誠はようやく笑みを浮かべた。

今受け止めた。夢じゃない。目の前にいる人物は、たしかに自分が知っている雫だ。

「ああ。俺も信じてたよ。絶対会えるって。……お帰り、雫」

雫は満面の笑顔になっていった。

「ただいま、誠くん」

雫編 part2：心情

雫と再会した誠は、雫に母屋の方に案内され、中に入った。

今は居間でくつろいでいる。雫は台所でお茶を淹れていた。

「はい」

雫が誠の前にお茶を置いた。そして誠の隣に座る。

「ありがとう」

誠は一口啜ると、口を開いた。

「それにしても、ほんと久しぶりだな。あっちにいても元気だったか？」

「うん。元気だよ。誠も元気だった？」

「ああ。今でも副会長として、頑張ってるよ。もうすぐ終わるけどな」

「そつか。でも、あまり頑張ってたみたいだけど。書類の整理も満足にできないんじゃない？」

「書類？ …… あつ、もしかして、お前！」

そこで雫はクスクスと笑った。

「久しぶりの学校は楽しかったな」

「あれ、お前だったのか」

誠は生徒会室でのことを思い出した。

覚えがないのに、すでに書類が整理されていたのだ。それをしたのは雫だったのだ。

「ふふ。でも、あれくらいならいいでしょ」

雫は意地悪そうに笑う。

「つーか、学校に来るんだったら話し掛けろよ」

そこで雫は少し戸惑った表情になった。

「ああ、ごめんね。やっぱり邪魔しちゃ悪いかなって思ってた」

誠はそこで一息吐いた。

「それにしてもさ、会えて良かったよ。少し心配してたんだぜ。あつちで困ってないかなって。でも、心配ないみたいだな」

その言葉に、雫は齒切れの悪い対応をした。

「う、うん。あつちでもうまくやってるよ。おばあちゃん優しいし、すぐに環境に慣れたよ」

「そっか。そりゃ良かった。それで、ここにはいつまでいるんだ？」

「うん。ここにいるのは一週間。来週の水曜にはまたあっちに行くの」

「それじゃ、それまではずっと一緒だな」

誠はお茶を手に取り、また口に含んだ。

そのとき、雫がそつと誠に寄り添ってきた。

「雫？」

「ちょっと、このままにさせて」

雫は目を瞑って体を誠に預けた。

誠は少し照れながら、そのままにしてあげた。

少しして、雫は口を開いた。

「ねえ、誠くんは、今誰かと付き合ってるの？」

「ん？ ああ、今湊と付き合ってる」

「ふん。……え？」

そこで雫は体を起こすと誠を見た。

「湊ちゃんって、誠の妹でしょ？」

「ああ。まあな」

「で、でも、兄妹って付き合えたっけ？ いや、法律では結婚はできないだけで、付き合えないとかはないけど、兄妹って……ええ？」

雫は顔を真っ赤にして慌てふためいていた。誠は軽く笑うと、事情を説明した。

誠は湊の秘密やこれまでの仮定を説明し、雫はようやく落ち着きを取り戻した。

「そうだったんだ。知らなかった。苦労したんだね」

「まあな。でも、最後は愛の力で勝利だ」

「っていつても、瞳ちゃんのおかげじゃない」

「まあ、そうだけど」

そこで雫は視線を落とした。そしてぎゅっと自分の胸を抑える。

「ん？ どうした？」

誠は顔を覗き込む。雫はすぐに顔を上げると笑顔を見せた。

「う、ううん。なんでもない」

「そっか。でも、何でもこっちに帰ってきたんだ？ まだ、学校だろ？ 冬休みとかならわかるけど」

「うん、ちょっとね。でも、学校にはちゃんと許可もらったっていうか、事情は説明したし、おばあちゃんも賛成してくれたから。…やりたいことがあってね」

誠は雫の最後の言葉が嫌に気になった。

やりたいことって何だろうか。わざわざ学校を休んでまですることって。

誠が考えているとき、雫はパンと手を叩いた。

「そうだ、今日誠くんの誕生日でしょ？ 何かお祝いしなくちゃ」

「え？ 覚えてたのか？」

雫は満面の笑顔でうなずいた。

「うん！ もちろん。だって……」

そこで雫は頬を赤く染めながらそつと呟いた。

「去年、私たちが初めて会った日だし……」

「あつ……」

そこで誠も頬を染めた。去年のことがはっきりと頭の中で思い描かされる。

雫は顔を上げると、可愛い笑顔で誠を見た。

「だからさ、ご飯一緒に食べよ。私作ってあげるよ」

「ありがと。でも、湊も家で準備してるんだよね」

誠は少し困った表情で頭を掻いた。

「あつ、そうだよな。恋人同士なんだから、祝うのは当たり前だよ
ね……」

雫は声のトーンを落としながら、それと一緒にうつむいてしまった。誠は慌ててどうしたらいいか考えた。

「でも、時間をずらせばいい。そうだ、八時までここにいるよ。その後は家に帰る。これでいいだろ？」

その案に、雫は顔を上げて喜んだ。

「うん！　じゃ、すぐに準備するね」

雫は立ち上がると、キッチンに向かい、料理の仕度を始めた。

その後ろ姿を、誠は居間で眺めていた。

今思う。本当に良かった。雫は何一つ変わっていない。去年のま
ま、あの雫が目の前にいる。

それが認識できるだけで、安心が生まれる。心から安堵の息が漏
れる。

しょうじきいうと、別れたあの時から、何かしらの不安があった。

あの告白、そして事件、この二つを抱え、雫は上手くやっているのだろうか。少なからず、責任を感じていた。

でも、今日の雫を見て全てが救われた感じがした。いつもの雫にまた巡り会えたことを、今幸せに思う。

誠はつい嬉しくなって、口元を緩ませた。

「なに笑ってるの？」

雫が後ろを振り向き、誠の顔を覗き込んだ。

「あ、いや、なんでもない。一緒に楽しもうな」

雫は最高の笑顔で元気良くうなずいた。

「うん！」

そのあと、二人で楽しく過ごし、また明日もここに来るといい、誠は家に帰っていった。

雫は手を振って、誠を見送った。

そのあと、食べた食器を片付け、お風呂に入り、ベッドの上に座った。そこから夜空浮かぶ月を眺めた。

本当は、自分から会いに行きたかった。会って、驚かせたかった。でも、できなかった。

しょうじきいうと、その勇気が出なかった。体が震え、誠に会えなかった。

だから、仕方なく今日は諦め、本堂の周りを掃除した。

まさか、ここで会えるとは思わなかった。逆にこっちが驚かされた。

でも、震えは起こらなかった。すぐに歓喜で溢れ、いつのまにか抱きついていた。

自分は、誠のことが好きだ。

この気持ちはずっと変わらなかった。

もちろん、今でも好きだ。それは絶対にいえる。

なのに、誠が湊と付き合っていると聞いたとき、怒りが芽生えなかった。嫉妬すら起こらなかった。

自分の好きな人をとられた。なのに、嫉妬心はおろか、がっかりとした気持ちも起きない。

それよりも、祝福したい気持ちの方が、どちらかというと強かった。

なぜだろうか。自分は誠のことが好きなのに。自然と、感情が抑えられた感じだった。

雫は窓を開け、外を眺めた。涼しい風が、部屋いっぱい流れ込んでくる。それが雫の髪をなびかせた。

「誠くん……好きだよ」

そつと呟く。

やはり嘘ではない。誰に対してもいつてなく、呟いただけで自分の胸はいつぱいだった。

ドキドキと鼓動し、きゅつと締め付けてくる。

この感情に嘘はない。でも、嫉妬心は起こらない。

それよりも……。

雫はふつと息を吐いた。

「ごめん。誠くん。やっぱり、私、我慢できないや……」

雫の瞳から、一滴の涙が頬を伝い、月の光に輝きながら、暗闇の中へと消えていった。

雫編 part3：願球

雫が来て二日目。この日は金曜日である。

今ごろ誠は学校で授業を受けている。どうせ聞いてもおらず、ぐうたら寝ているだろうと思われる。

その間に、雫は本堂の掃除や、母屋の整理などをしていた。

一年間だけ住んでいなかっただけで、中は埃だらけだった。一日かけ綺麗にし、気づけば時刻は夕方近く。

雫は掃除を終わらせると、キッチンに向かい、軽食を作ることにした。

もちろん、これは誠に食べさせるのだ。昨日約束して、学校が終わったら来るといったのだ。

雫は綺麗な三角のおにぎりを作っていく。

鼻歌まじりで楽しそうに握り、誠が来るのを待った。

秋の暮れ、陽が暮れ出したとき、誠は姿を現した。

「わ、悪い、生徒会の仕事で遅れた」

「もう、遅い！　ずっと待ってたんだよ！」

雫は居間で座りながら、頬をぷくつと膨らませた。

「だからごめんって。生徒会の仕事もあと少しなんだ。そんな怒るなよ」

誠は手を合わせて謝る。

しかし、雫が怒るのも無理ない。

誠が来ると約束した時間から二時間以上経っているのだ。待つのは疲れる。

「だったら、条件がある」

「な、なんだよ」

誠は顔を上げて問い掛ける。すると、雫は誠に近づき、耳元に囁いた。

「私と……キス、して」

「え？」

誠はいきなりの言葉を混乱した。雫は誠から離れた。

「だから、私と、キスして。そしたら、許してあげる」

「いや、俺、湊がいるし……」

誠は頭を掻きながら申し訳無さそうに謝る。

「それじゃ、一生許してあげない」

雫は腕を組むと、誠に背を向けてしまった。

「ええ？　ちょ、ちよつと雫！」

「なに？　キス、してくれるの？」

「いや、だから、それは……」

誠にどうしたらいいのかわからず困り果てる。

そんな誠を見て、雫はつい噴出して笑ってしまった。

「ははは。いいよ、誠。許してあげる。忙しいのはわかるし」

「な、なんだよ。まったく、からかいやがって」

誠に少し怒ったが、内心安堵していた。

「ほら、おにぎり作っただよ。良かったら食べて」

雫はテーブルに置いてるおにぎりを誠に持っていった。

「おっ、ありがと。ちょうど腹減ってたんだ」

誠におにぎりの一つを掴むとおいしそうに口に入れていく。

「どう？　おいしい？」

「うん！ めっちゃうまい！」

誠は二個目と、どんどん食べていく。

そんな様子を、雫はテーブルに頬杖をつき、微笑みながら眺めていた。

さつきは少しからかったが、正直キスはして欲しかった。

自分は想いを伝えた。それを誠はわかっているはず。

自分は、誠が好きである。いつまでも変わらない想い。

この気持ちはこの先変わらない。いや、変えたくない。

こんなにも人を好きになり、離れていても愛しく考え、そしていつまでも同じ空間で過ごしたいとさえ思った。

誠が望むことなら、自分はなんでもしてあげる。それほど好きだ。

いや、好きというよりも、愛しているといったほうが適切かもしれない。

この気持ちは、それほど重く、重大なのだ。

「ん？ なに見てんだ？」

誠が雫の視線に気づいた。雫はニコツと微笑んだ。

「お米、ついてるよ」

「あらら」

誠は頬についたお米をとる。雫はずっとニコニコしていた。

今日は土曜日である。学校は休みで、誠は昼過ぎに雫の家に来た。本当はランチをご馳走するはずだったのだが、誠はまた寝坊したらしい。

今、二人は商店街から帰っているところだ。雫の買い物に付き合っている。

「まったく。その寝坊癖はまだ治ってないんだね」

「だからごめんっていつてるだろ。本当に悪かった」

誠はさっきからずっと謝っている。でも、雫はなかなか許してくれない。

今でも、さっき買った食材やらを入れた袋を全て誠が持っている。

「本当に悪いと思ってるならなにかお詫びをしなさい」

「お詫びって……じゃあ、キス？」

そこで雫の顔が一瞬で真っ赤になった。

「な、何いつてるのよ！ キ、キスで許すわけないでしょ！」

雫の怒声が響き、息を荒げながら誠を睨む。

その声に、周りの人たちは何事かと思い、誠と雫を見ていた。

「し、雫、声が大きい」

ようやく我に返った雫は、また恥ずかしそうに顔を赤らめ、そそくさとその場から去っていった。

母屋に戻ると、雫は居間に座り込み、まだ怒っていた。

「もうう、誠のせいだよ！ あんな恥かいて。もうお嫁にいけない！」

「大丈夫だって。雫なら誰でも結婚できるよ」

誠は買ってきた食材を冷蔵庫の中に入れながら、少し笑って答える。

「……じゃあ、誠は結婚してくれる？」

「え？ 俺？ いや、俺、湊がいるし」

「でも、兄妹で結婚はできないよ」

「でも、俺ら、別に兄妹っていうか、血は繋がっていないし」

「でも、そういう関係ではいるよね」

「でも、俺ら普通に付き合ってるし」

「でも、世間はそうはいってないよね」

「でも、瞳のおかげで誰も批判しないし」

そこで沈黙が流れる。そして二人はお互いに声を上げて笑い出した。

「ははは。もう、いいよ。別に怒ってないよ」

「ははは。でも、なにかお詫びはするよ。何かない？」

「そうね」

雫は天井を向きながら考える。そして思いつくと、手をパンと鳴らした。

「だったらさ、明日デートしてよ」

「デート？　なんだ、そんなことでいいのか？」

「うん！　日曜だし。久しぶりに遊びにいこ。明日はぜったい寝坊しないだよ」

「わかったよ。じゃ、約束な」

「うん！」

二人は小指を出し合い、そして約束をした。

誠が帰ったあと、雫は明日何を着てくかなど、デートプランを考えた。

一番お気に入りの服を選び、どこに行くかなどを決め、準備を整える。

そのあとお風呂に入り、誠とどう楽しく過ごすかを考えた。

「明日はデート。楽しみだな」

雫は湯船に浸かり、嬉しそうな笑顔を見せる。

「ふふ。デートなんて久しぶり。ああ、明日が早く来ないかな」

雫は手を大きく上げ、背伸びをした。そして目の前にある鏡を見る。

「明日、もしかしたら……」

雫は自分の胸に手を触れる。そして大きさを確かめた。

「うん、ある方だと思うけど、誠はどう思うかな」

そこで顔が真っ赤になる。

「いや、まだするって決まったわけじゃないし。それに、誠は湊ち

やんがいるからするはずないし」

雫は勝手に暴走し、頭がクラクラし始めた。どうやらのぼせたようだ。

雫は頭を抑えながら、湯船から上がった。

寝間着に着替え、雫は髪をタオルで拭きながらベッドに座った。

何気なく携帯を掴むと、メールが届いていた。誠からだった。

『明日、一応時間前にメールして』

雫はクスクス笑って返信した。

「了解、っと」

雫は携帯を閉じると、ベッドに横になった。

明日は誠とデート。今日は眠れるだろうか。少なからず、興奮して寝つけそうにない。

好きな人と一緒にいられ、そして楽しい時間を共有できる。

それがどんなに楽しく、そしてどんなに嬉しいことか。

つい口元が緩み、ほくそえんでしまう。

「誠……」

雫はそつと呟く。

名前を呼ぶだけで、自分の胸はきゅつと締め付けられる。

もっと一緒にいたい。もっと楽しんで、もっと多くの思い出を作りたい。

なぜなら、自分は誠が好きだから……。

そこで雫は体を起こした。

「ダメだ……」

雫は額に手を当て、がくつとうずくまる。

自分はそんなことのためにここに戻ってきたんじゃない。

自分には、やるべきことがある。やらなければならない使命がある。

それを果たすために、ここまで来たんだ。

それをしなければ、自分は帰ることはできない。元に戻る事はできない。

また、あの苦痛を抱えながら過ごすしかなくなる。

それが嫌だから、わざわざここまで来たんだ。

猶予は一週間。すでに三日過ぎている。残り四日間。

この期間中に、あれをしなければ……。

栗はぎゅっと胸元で拳を握る。そしてそっと手を前に出し、手の平を開いた。

そこには、青白く光る小さな球があった。

「さよなら、誠くん……」

雫編 part 4：最後

雫は商店街に近くにある、大きな広場の噴水にところに立っていた。

今日は日曜で、誠とデートをする日だ。

約束した時刻は十時だが、早く来すぎて、今はまだ九時半。

「早く着すぎたかな。でも、待ってるのも悪くないな」

誠とデートができると思うと、嬉しさを抑えることができない。つい口元を緩めてしまう。

それに、今から楽しい時間が待っていると思うと、苦にはならなかった。

でも、雫はすぐに悲しげな表情になってしまった。

最初は楽しむことができる。でも、最後には……。

そのとき、雫の目にカップルが映った。女性は男性の腕を掴み、楽しそうに笑顔を見せている。

その光景を見て、雫も笑みを浮かべた。

最初しか楽しむことができないなら、その時間を命一杯楽しめばいい。それで十分だ。

「おゝい、雫〜！」

遠くから誠の声がした。目の前に誠の姿がある。大きく手を振ってこっちに向かっていた。

まだ時刻は十時十分まえだが、誠にしては上出来だった。

「お待たせ。それじゃ、いこうか」

「うん！」

雫は満面の笑顔でうなずくと、ぎゅっと誠の腕を組んだ。

二人は水族館に向かっていった。雫が要望し、さまざまな海の動物を楽しんだ。

入ってすぐに大きなトンネルの中に入り、上下左右はさまざまな種類の魚で溢れ、中にはサメやエイなどもおり、まるで自分が海の中に入ったようだった。

それから少し進み、次は大型の動物の水槽に来た。

「はは。かわいい。ね、誠くん。このアザラシかわいいね」

黒いアザラシが水中で優雅に泳いでいる。気持ち良さそうで、時には回転したりしていた。

「アザラシって海の豹って書くんだよな。けっこう凶暴なんだぜ」

「へー、そうなの？　こんなかわいいのに。誠くん良く知ってるね。物知り」

「いや、ごめん。うそ。漢字は看板に書いてあって、ただそう思っただけ」

そこで雫はがくつとなった。

「もう、感心して損した」

でも、雫は無邪気に笑っていた。

次はラッコを見にきた。水中に浮かび、腹の上にある貝を石で叩いている。

「かわいいー！　やっぱりラッコはかわいいね」

雫はガラスの手についてラッコを眺める。

「まるで雫みたいだな」

「え？　どこが？」

「ほら、貝を叩く音を聞いてたら、まるでリズムに乗って叩いてるみたいに聞こえるだろ。雫がピアノを弾いているときと同じだぜ」

「そうかな？」

雫は苦笑いを浮かべていた。誠はよくわからないことをいうな…

…。

そして次はイルカショーである。四匹のイルカが飼育員の笛の合図で飛び跳ねたり、空中で回転したりと、驚きの演技を披露していた。

「すっごくいい！ イルカってすごいね。頭もいいし、誠くんよりもすごいね」

そこで誠がムツとなった。

「俺だって、イルカよりすごいところはあるさ」

「へっ、どこが？」

誠は堂々と胸を張っていった。

「イルカより悪知恵はある！」

雫は重いため息を吐いた。

「それ何の自慢にもならないよ……」

二人は十分に楽しむと、水族館を出た。

「んっ、楽しかった。誠くんはどうだった？」

「ああ、楽しかったよ。これからどこいく？ まだ時間あるし」

今の時刻はまだ三時くらいだ。時間は十分にあった。

すると、雫は表情を変え、悲しげな瞳をしたままうつむき、そして呟いた。

「ねえ、誠くん。……あそこにいこ」

「あそこ？」

雫の要望で、二人はバスに乗り、ある場所へと向かう。

数十分移動し、商店街から離れた場所に歩き、少ししてたくさんのお墓が見えてきた。

その一つに、雫はバッグに入れてあった線香をあげた。そしてそつと手を合わせ、目を閉じた。

誠はその様子を後ろで見守っていた。目の前には、汐風家の墓と書かれてある。

おそらく、これは雫のお母さんの墓だろう。

雫は目を開けると、誠の方に振り返った。

「ごめんね、付き合わせちゃって」

「いいや、かまわないよ」

誠は優しく笑みを浮かべる。雫も笑みを返すと、墓に向き直った。

「別に、今日が命日というわけじゃないんだけど、ちょっとお母さんとお話したくて」

雫は誠に近づくと、誠の手を握り、お母さんにいった。

「お母さん。前から紹介したい人がいるっていったでしょ。この人のことだよ。清水誠って言ってね、私の……」

雫はごくつと唾を飲み込んだ。そしてはつきりといった。

「世界で、一番好きな人」

その言葉で誠は少なからず動揺を抑えられなかった。

「雫……」

「初めて人を好きになったんだよ。初恋ってやつかな。とても優しく、頼りになって、少しだらしないところもあるけど、でも、そこがかわいいんだよ。それに、お父さんから私を救ってくれたの。すごく嬉しかった。お父さんを嫌いつてわけじゃないけど、安心はした。やっぱり苦しかったし」

雫は誠の手をぎゅっと握り締めた。

「誠くんは今他の人と付き合ってるけど、私はかまわないよ。仕方がないもん。それはわかってる。ただ、これから良いことは絶対あるはずだから、未来に向かって、私頑張るね」

そこで雫はそっと誠の手を離れた。

「雫……」

雫は誠の顔を見ると、ニコツと笑った。

「へへ。変なこといつてごめんね。でも、誠くんに湊ちゃんと別れるっていわないよ。むしろ祝福してるんだから」

「あ、ああ、ありがと……」

雫はうなずくと、悲しげな瞳になった。そして震える声でいった。

「誠くん…… 忘れないでね。私という人がいたこと。私が一番好きな人は、誠くんただ一人ってことを」

「え？」

雫は顔を上げた。真剣な瞳で誠を見つめ、微動だにしない。

「な、何言ってたんだよ。忘れるわけないだろ」

その言葉を聞いて、雫は優しく笑みを浮かべた。

「そっか。良かった」

そして雫はそっと誠に近づいた。

一步一步ゆっくりと歩き、そして誠との距離が縮まると、そっと誠の胸元に手を添えた。

そのまま視線を下げたまま、口を開いた。

「誠くん、私は三日後には帰る。また、会えなくなるね」

「ああ、そうだな。でも、いつでも遊びに来いよ。待ってるからさ」

「うん。……できたらね」

最後に言葉に、誠は違和感を覚えた。

「ね、誠くん。しばらく会えないから、私の願いごと、叶えてくれない？」

「願いごと？　なんだよそれ」

雫は顔を上げ、誠を見つめた。

「その前に約束して。絶対に、私の約束を叶えるって」

「え？　いや、でも」

「お願い、約束して」

雫がじつと見つめ、瞳でキツと威圧感を与える。それほど真剣で、本気らしい。

誠はうなずいた。

「わ、わかった。でも、お願いってなんだよ」

雫はそつと笑みを浮かべた。そして右手を自分の胸元に持つて来る。

ぎゅつと拳を握り、目を閉じた。すると、手が青白く光り始めた。

それだけで、誠はすぐに雫が出した物がわかった。

「願い球……」

雫の手の平の上には、願い球が浮いていた。

雫の力。雫がスカイで叶えた力。

自分の願いは叶えられないが、相手はどんな願いでも叶えることができる。

つまり、スカイの力を与えるということだ。

雫は願い球をそつと誠の胸元に当て、奥へと入れた。

「雫、お前……」

雫は満面の笑顔を浮かべると、誠から数歩離れた。

「今日は楽しかったよ。ありがと、誠くん。最高の一日だった」

雫は手を後ろに回し、空を見上げた。

「今誠くんはスカイを手に入れた。つまり、どんな願いごとでも叶えることができる。そうだよな？」

「あ、ああ。そういうことになるよな」

雫は誠に可愛い笑みを見せる。

そのとき、雫の目から涙が溢れ出した。目元から一滴が頬を流れる。

「し、雫、どうしたんだ？」

雫は涙を拭く。それでも、笑顔は絶やさなかった。

「ごめんね。ちょっと悲しくて」

「悲しい？」

「誠くん。約束したよね？ 私の願いを、絶対に叶えるって。だから、私があげたスカイで叶えて」

「叶えるって、何をだよ」

誠は少しずつ焦りを覚え出した。

雫は何か変だった。何かおかしい。雫は何を考えているんだろうか。

「それじゃ、いうね。私の……願い」

誠はごくつと唾を飲み込んだ。手の平が汗ばむのがわかる。

さっきから胸が締め付けられ、嫌な考えしか思い浮かばない。

雫はぎゅっと拳を握った。

これで、さよならだ……。

雫は満面の笑顔のまま、はつきりと口を開いていった。

その言葉は、誠が想像もしていなかった言葉だった。

そして、雫の声を聞いた瞬間、地獄に落ちたように、辺りが真っ暗になった。

「記憶を、消して……」

栗編 part 5：忘却

栗の言葉を聞いて、誠は立ちすくんでいた。

さっきの言葉が、何度も頭の中で繰り返し、響いてくる。

『記憶を、消して……』

これはどういう意味なんだ。なんで、こんなことをいうんだ。

「し、栗、それ、どういう意味なんだよ」

出た言葉がこれだった。まずは、その理由を知りたかった。

栗はすつと笑みを消し、表情を曇らせた。

「そうだよね……。いきなり言われても、納得できないよね……」

栗はそつと目を閉じ、思い出しながら、重い口を開いた。

「私、この街を去って、お婆ちゃんの家に行ったけど……全然楽しくなかった」

「え？」

栗は自分の過去を、一年間の思い出を、話し始めた。

両親不在が心配され、雫は母方の祖母の家に行くことになった。

田舎にある祖母の家は、自然に囲まれ、元いた場所とは環境ががらりと変わってしまった。

でも、雫はここで新しい生活を見つけ出そうと、努力した——つもりだった。

新しい高校でも、雫は初めからたくさんのクラスメイトから慕われ、すぐに友達も親しい友人もできた。

雫は可愛らしい笑顔で振る舞い、親しみ安そうにする。

しかし、内心多くの友達と一緒にいても、楽しいとは少しも思えなかった。

愛想笑いを浮かべているが、心の奥では、ある人物のこといっぱいだった。

前と同様、怠ることのない人気は、ここでも健在だった。

あっという間に学校一美少女として、毎日のように男子から話かけられるのももちろん、告白も何度もあった。

やはり雫はそれを全て断った。誰が告白してきても、自分の答えは初めから決まっている。

確かに、学校生活は大して変わらず、周りの雰囲気が変わったくらいで、以前と変わりようはどこにもないように感じられる。

しかし、変わったところは、すぐ傍にあり、確実にあった。

雫は毎日携帯を開き、誠の携帯にかけようとした。しかし、すぐに指を離し、ポケットの中へと納める。

ここに来て、ずっと誠の声が聞けず、何度も電話をしようと思った。でも、その勇気が出なかった。

自分は、振られている……。

曖昧に終わったかもしれないが、誠は答えてくれなかった。好きだと、言ってくれなかった。

雫は夜になると、毎日涙を流した。

声を上げず、ただベッドの上で、仰向けに横たわり、涙を流す。

その涙が、心を潤し、洗い流してくれるように癒しを与える。

「誠……くん……」

自分の心は、こんなにも変わり、何をしても手がつけられなくなった。

自分の傍に、好きな人がいない――。

それだけで、雫の心は、永遠に閉ざされ、開くことはなく、ただ蝕まれていくのを待つだけだった……。

そのせいか、雫はいつしか精神が不安定になり、学校を欠席する

日数が増えつつあった。

祖母や祖父が心配するが、放つといってほしい、と伝え、全てにやる気が起きない日々が続いた。

そしてとうとう、雫は不登校になった。

自分の好きな人——誠のいない人生はつまらない。何をしても活気が湧いてこない。

自分は生きる意味があるのだろうか……。

ある夜、雫は湯船に入りながら、ぼーっとしていた。

体育座りをして、ただ目の前の鏡に映っている自分を見つめる。

鏡の中の自分は、こんなにも窶れ、頬がげっそりと痩せこけていた。

雫はふと笑みを浮かべた。

こんな顔じゃ、誠くんは喜んでくれない。笑ってくれない。会ってもくれないだろう。

ならば、死んだ方がマシだ……。

雫は事前に持っていたカッターを握った。先から刃を数センチ出し、自分の手首に当てる。

蛍光から光が反射するカッターは、普段何気なく見ているおもちゃ

が凶器に思えた。

これで、お母さんに、会えるかな……。

数時間し、雫がお風呂から出るのが遅いので、様子を見に行つた祖母が、湯船が赤く染まり、その中でぐったりと倒れている雫を見つけた。

大量出血で、体中が青くなり、すぐに病院に運んだ。

何とか一命を取り戻し、雫はしばらくの入院と心理カウンセラーに通うことになった。

ベッドの中で、雫は白い天井を見つめながら、そつと呟いた。

誠くん、と。

退院した雫は、カッターなどの刃物は持たされなくなり、そして、毎日駅に来ては、誠のいる街を見つめるようになった。

すぐに行きたい。会いに行きたい。自分の好きな人——誠に会いに行きたい。

でも、行く事はできない。自分はこの街から抜け出すことはできない。自分は縛られ、身動き一つできない状況だ。

なぜなら、——またここに戻るしかないのならば、別れが辛くなり、より心が病んでしまうからだ。

雫は何度も駅に通い、いつしか駅員に覚えられ、何度か口を交わ

す真柄になった。

雫は駅員に話した。

この先に私の好きな人がいる。でも、会いに行くことはできない。

私は彼が大好きである。でも、一回会いに行き、また別れる。

また会う日まで、私は耐えることができるだろうか。いや、できないだろう。

それほど、私は本気の愛をしているのだから。

それならば、会わない方がいい。会わない方法が、一番の解決方法だ。

雫はそう思い込み、毎日ただ我慢との対決をしてきた。

そしてある日、雫の祖母が駅にやってきた。雫は力のない瞳を向ける。

祖母は雫を見つめ、口を開いた。

行っ てきなさい。おもいつきり楽しんで、彼との思い出を作りなさい。

そして、——彼との記憶を消しなさい。

雫は最後の言葉に大きく心を動揺させられた。

前から思っていた。忘れることはできないのだろうか、と。

雫は自分のスカイを思い出す。これで、自分の記憶を消そうと。

しかし、誠には覚えていて欲しい。

自分という存在を、自分の想い、愛情、全てを、頭の中に刻んで欲しい。

雫は決心した。

これからの自分の将来や未来のために、好きな人との記憶を消し、先へ進もうと……。

話を聞き終え、誠は震える体を必死に抑えていた。

雫がそこまで病んでいるとは知らなかった。てっきり、あつちでも楽しくやっていると思っていた。

しかし、それは大きな誤算だった。

雫は悲しげな瞳を向けながら、小さく口を動かした。

「誠くん……。私のために、私の未来のために……記憶を消して。……このままじゃ、私……死んじゃう」

誠の心臓は強く掴まれた感じがした。

死ぬ？ 雫が、死んでしまおう？ いやだ、そんなの、いやだ……。

「雫……。し、死ぬなんて、冗談やめろよ。べ、別に、記憶を消さなくても、雫なら上手くやれるだろ？」

誠の語尾は震えていた。震えが止まらない。こんなにも恐怖に包まれたのは初めてだった。

雫はそつと笑みを浮かべながら、ゆつくりと首を振った。

「いったでしょ？ 私は、誠くんのことを忘れないと、生きていけないの。このままだと死んじゃうの。誠くんも、私が死ぬのは嫌でしょ？ だったら……記憶を消して」

雫はゆつくりと近づいてきた。そして誠の顔に触れ、下から覗き込む。

「ねえ、簡単なことでしょ？ ただ一言、雫の記憶を消してっていえばいいんだから」

誠はじつと立ったまま、震えが収まらない声でいった。

「し、雫はそれでいいのか？ お、俺との、思い出がすべて消えて……いいのか？」

雫は軽く笑ってうなずいた。

「仕方ないよ。そうじゃなきゃ、私……生きていく気力が湧かないもん。だから、ね？ お願い」

雫は誠に抱きつき、そして胸の中に顔をうずめた。

「お願い、誠くん」

「……お、俺は」

誠はぎゅっと目を瞑った。歯を食いしばり、拳を握る。

そのとき、雫がそっと誠から離れた。

「そうだね。誠くんも困るよね。ごめんね、自分のことばかりで」

「雫……」

雫はニコツと笑みを浮かべた。

「一日だけ時間をあげる。明日、午後六時に神社の本堂に来て。……待ってるから」

誠は最後の、待ってる、でとてつもない恐怖を感じた。

雫の声が、地獄からのさまよう亡霊のような声に聞こえたのだ。

来なければ、おそらく雫は死んでしまう。

一日で、答えを見つけないければ……。

「それじゃ、期待通りの答え、待ってるよ」

そういつて、雫は誠と目を合わせることもなく、その場から去っ

ていった。

誠はしばらく、その場から動けずに、立ち尽くしていた。

雫の過去を知り、ここに来た理由。そして自分の想いを全て伝えた。

自分は、これからどうするべきだろうか……。

いつのまにか、辺りは真っ暗な闇に囲まれていた。

その闇は、雫の心のように、どす黒く濁ったもののように感じた……。

雫編 part 6：回答

誠は学校をサボり、一日中屋上に居た。

少し肌寒いが、日の照っている今日はいくらか温かい。

今日は月曜日。明日、雫は母方の実家に帰る。

それまでに、あの答えをださなければならない。

雫の記憶を消すか、否か……。

普通に考えれば、そんなことはしたくない。でも、ならばそれ相応の返事をしなければならない。

もし、雫が納得する回答ができなければ……。

雫は死ぬ――。

誠はその場にうずくまり、頭を抱えた。

こんな窮地に陥り、過酷な選択をしなければならないとは思わなかった。

「どうすればいいんだ……」

誠はふるふると震える拳を握る。満足に呼吸もできない。息苦しさを感じる。

陽は傾き始め、約束の時間へと刻一刻と近づいてくる。もう、時間が残されていない。

そのとき、屋上の扉が開き、湊が入ってきた。

「兄さん……」

後ろから弱々しい言葉が耳に入ってくる。誠はそっと振り向いた。

「湊……」

湊は雫の事情を知っている。昨日、帰ったあと、全て話したのだ。

「兄さん、大丈夫？ 顔色悪いよ」

「ああ……」

湊は隣に座ると、誠の肩に触れ、顔を覗き込む。誠は顔に手を当てた。

「湊……。俺、どうしたらいいんだ……。わからないんだ」

誠は目を閉じ、苦しみに耐える。

「兄さん……」

湊は空を見上げながら、そっと呟いた。

「兄さん。兄さんは、今までどうしてたの？」

「え？」

湊は誠に向かって微笑んだ。

「今まで、兄さんは自分のしたい通りにしてきた。どんな苦難も、どんな困難も、自分の思ったこと、自分の力で、いつも乗り越えてきた。だったら、今回も、自分の力を信じればいいんじゃないかな？」

「湊……」

誠はうなずいた。

そうだ。いつもそうしてきた。今まで、自分はそうやって、どんなことでも乗り越えてきたはずだ。

ならば、今回だって……。

誠は立ち上がった。

「ありがと、湊。俺、やっぱりこの答えしかない」

湊は満面の笑みでうなずいた。

「頑張つて、兄さん。それでこそ、私の彼氏だよ」

誠はグッと拳を見せ、勢いよく屋上を飛び出した。

雫は本堂の前に座っていた。約束の時間はまだだが、すでに一時間くらい前から待っていた。

これがデート前の待ち時間なら、心が躍り、わくわくもするのだが、今はそんな気分ではなく、どこか複雑な気分になっていた。

誠は、自分の記憶を消してくれるだろうか。消さなければ、自分は死ぬのだろうか……。

雫は自分の左手首を見た。そこには頸動脈を切った痕がある。

綺麗に一本の線が入っており、痛々しさを物語っている。

雫はふと笑みを浮かべた。

誠が記憶を消さないのなら、自分は死んでもかまわない。

自分の願いを叶えないというのなら、それは自分をふったということに等しい。

誠が自分を捨てるなら、死んだほうがマシである。

雫はポケットの中にあるカッターを握った。

これで、サヨナラかもしれない……。

そして約束の時間になり、誠は本堂の前に立った。目の前には雫がいる。

雫はニコツと笑みを浮かべると、誠の前に立った。

「来てくれたんだね、誠くん。それで……返事は？」

誠は真剣な面持ちで口を閉ざし、雫を見つめる。

「ほら、逃げないでよ。ちゃんと返事して。誠くんが私の願い叶えないと、私死んじゃうんだから——」

そのとき、雫の顔は横を向いていた。乾いた音が辺りに響き渡る。

雫はそつと自分の頬に触れた。だんだんと傷みが滲み出てくる。

雫は誠に頬を叩かれていた。

誠はぎゅつと目を閉じながら、雫から目を逸らしていた。

「誠くん……」

「……逃げるなよ……」

「え？」

誠は顔を上げると、雫を睨みながらはつきりといった。

「お前はいつまで逃げる気なんだ！」

誠の怒声に雫はたじろいだ。

「前のお前はそんなんじゃない！ 誰よりもしつかりして、みんなから慕われて、……一番俺が尊敬していたのはお前なんだ！
なのに……！」

誠はキッと睨みつけた。

「お前は、いつからそんなに弱くなったんだ！」

「誠……くん……」

雫の目から涙が零れた。その量が多くなり、頬を伝って落ちていく。

雫は顔を両手で抑えると、嗚咽を漏らしながらも口を開いた。

「誠くんには、この気持ちわかんないでしょ……。湊ちゃんと付き合っている誠くんには、私の気持ちなんて、わかるはずないじゃない！」

「わかる！ 俺だって、お前の気持ちはわかる！」

誠の反論に、雫は口を閉ざした。

「俺だって、お前の気持ちはわかる。お前は寂しいだけなんだろ……。一人が、孤独が苦しいんだろ！」

誠の目から涙が溢れた。それを無理矢理拭いながらも続けた。

「俺は、幼い頃、ずっと一人だった。孤独だった。毎日苦しかった。だから、今俺には湊がいるんだ！」

そこで雫は思い出した。以前、そんなことを誠から聞いたことがあった。

「覚えてるか、雫。一年前、俺はお前に、幸せになるようにと、お前のスカイで願った。その願いは、外敵からはお前を傷つけない。でも、今のお前は自分で自分を傷つけている。……お前は、そんな弱虫じゃなかったはずだ！」

誠は雫の襟を掴み、鋭い目つきで睨みつけた。

「そんなお前なら、俺は一生嫌いになる！ お前と同じ境遇のやつはたくさんいるんだ。一人だけいい格好して逃げんじゃね！」

雫の唇は震えていた。何か反論したいようだが、それもできず、ただ耐えるしかできない自分。

雫は齒を食いしばり、手で口を抑えると、その場に座り込んだ。

誠の言うとおりだ。確かに自分は逃げてきた。子供のように、駄々をこねて、勝手にいい訳を作り、人のせいにして逃避していた。

自分は、いつからこんなに弱くなったのだろうか……。

「雫……」

誠はそつと雫の肩に手を置いた。そして優しく微笑む。

「頑張れよ、雫。俺、絶対お前のこと忘れないし、湊と付き合っても、お前のことは好きだ。つつても、友達としてだけだな。その中

じゃ、めっちゃ上位なんだからな」

誠は照れ笑いを浮かべた。

「雫……。人生わかんねーよな。いろいろあつて、苦しいことだつて、たくさんある。でもさ、それを乗り越えるから、強くなるんだ。雫は、そんなところで妥協するやつじゃないだろ」

雫はゆつくりとうなずいた。誠はそつと雫の頭を撫でた。

「……寂しくなったら、いつでも遊びに來い。待ってるからさ。それで」

誠は雫の涙を拭いた。

「あつちの高校卒業したら、またこつちに戻ってくればいいだろ」

その言葉に、雫は希望が見出した気がした。

そうだ。高校を卒業すれば、こつちに來ればいい。一人暮らしをすれば、こつちに來てもいいのだ。

雫は顔を上げた。震えながらも、必死に口を開いた。

「私……。頑張る。……。頑張つて、またここに歸ってくる。また……。会えるよね?」

誠は一番の笑顔を見せながら、親指を立てた。

「もちろん!」

雫は安心した表情になると、ようやく心からといえる笑顔を見せた。

二人はそこで大声で笑い合った。

二人は駅前にいた。もう少しで雫は列車に乗って母方の祖母の家へと帰る。

雫は切符を買い、誠の元に戻ってきた。

「忘れ物はないな」

「うん。大丈夫だよ」

「それじゃ、元気でな」

「うん……。また、会いに来るからね」

「ああ。いつでも来い」

雫は少し頬を染めながら嬉しそうに微笑む。そしてそつと頬に触れた。

「あのビンタ、ちょっと痛かったな」

その言葉に、誠は少し戸惑いを感じた。確かに、女の子を叩くのはまずかったかも。

「いや、あれは、仕方なく……その、わ、悪かった。本当に、ごめん」

誠は雫の手を合わせて頭を下げる。雫は軽く笑った。

「別にいいよ。罰が下ったんだよ」

雫はそつと手首を見た。

「あんなことしたからね……」

雫は目を細め、悲しげな表情をする。誠はあるアイデアを思いついた。

「雫、お前から貰ったスカイ、今使っよ」

「え？」

誠は手を握り合わせ、お願い事を唱えた。

「雫のスカイの力が、無くなりますように」

その瞬間、雫の体が青白く光り始めた。そして少しずつ収まり、元に戻った。

「誠……」

誠はふと笑みを浮かべた。

「スカイなんて、あるからいけないんだ。簡単に叶うスカイがあるから頼って何もできなくなる。スカイに頼らず、自分の力で乗り越えるんだ」

雫はそつと胸元に手をやる。

「……嫌だったか？」

雫は首を振った。

「ううん。良いと思うよ。なんだか、誠くんらしい」

「そっか。よかった」

そのとき、列車が到着した音が響いた。これでお別れだ。

「それじゃ、いくね。またね、誠くん」

「ああ、またな。雫」

雫は手を振りながら、列車の中へと歩いていく。席に座ると、窓を開けた。

「誠くん！ 湊ちゃんを幸せにするんだよ！ 頑張つて！」

「お前も頑張れよ！ きつと、雫なら大丈夫だから！」

「うん！」

列車は徐序に進んでいく。雫は大きく手を振り続けていた。誠も

それに応える。

そして列車はとうとう見えなくなり、消えてしまった。

誠は上げていた手を下ろすと、ふっと息を吐いた。

「頑張れ、雫……」

列車の中で、雫は椅子に座り、外の景色を眺めながら、一週間にあったことを思い出していた。

誠にはいろいろ迷惑をかけた。それは悪いと思っている。

でも、そのおかげで、自分は目指すべきこと、やるべきことを見つけた。

思えば、これがベストの答えだ。

それを教えてくれたのは誠だ。

雫は軽く口元を緩ませ、気合いを入れ直した。

「これから頑張らなくちゃね」

雫は晴れ渡る空を見上げながらそっと呟いた。

「ありがとう、誠くん」

湊編 part 1：記念

時刻は夜零時を回っていた。

日付が変わってしまった。辺りは静寂に包まれ、物音一つしない。

自分の呼吸、心臓の音が耳に響くくらいだ。

それほど自分は落ち着いているということだろうか。

湊は寝間着に身をまとい、机の前に座っていた。部屋の電気は点けず、机の照明だけが照らしていた。

背中まで伸びた長い髪をリボンで束ね、邪魔にならないように一つにまとめてある。

そして、目の前にある額に飾られた一枚の写真をそつと手に取った。

誠の卒業式の日、二人で校門の前に並び撮った写真である。嬉しそうに笑みを浮かべ、カメラに向かってピースをしている。

そのときのことか、今でも自然と思い出される。鮮やかな桃と白の桜が舞い散り、卒業という雰囲気にとびつたりだった。

湊は立ち上がると暖房の設定温度を上げた。さすがに今の季節は寝間着一枚では寒い。

そこで気づいた。窓の外では雪が降っていたのだ。ふわふわとした白い塊が空から舞い降りてくる。

その純白の色は、幸福の白さのように感じた。一面銀世界へと街が包まれたとき、子供たちは外に出てはしゃぎ回るだろう。

なにより、明日はクリスマスである。ホワイトクリスマスとなれば、その嬉しさはさらに込み上げてくる。

それは、湊も同じだった。明日がクリスマスならば、両親の命日でもあり、自分の誕生日でもある。

そして、もう一つ記念日が増えることになるのだ。

「あれから一年……」

湊は窓からの景色をそらし、そっと部屋を出た。

廊下に出ると急に冷気が体を包み込んだ。足先が痛み、ぶるっと震える。

湊は両手で体を擦っているとき、ふと誠の部屋が目に入った。電気が消えているようなので、すでに寝ているようだ。

湊は物音を立てないように、静かに階段を降りていった。

一階に降りると、湊は居間の電気を点けた。さっきまでクリスマスイブのパーティーをして、その片付けをしていないのでテーブルの上は汚い。

湊はやれやれといった感じにため息を吐き、隣の部屋に向かった。

居間の隣の部屋は客間でもあるが、そこには仏壇があり、誠の両親の写真が飾られてある。

自分の両親でもあるのだが、それは世間の中であり、実際はそうではない。

でも、そう思わなくてもよくなる。少し複雑な関係だ。

湊は電気を点けず、居間から注がれる光だけを頼りにし、両親の写真の前に正座をして座った。そしてそつとその横にあるものを見た。

そこにはウエディングドレスがあった。綺麗な純白で作られた清楚なドレス。薄暗い中でも、その輝きは失われていなかった。女の子の憧れ。それが今家にある。

子供たちが雪に包まれて幸せなら、自分はこの白いウエディングドレスに身を包まれ幸せだ。

湊は仏壇に向き直った。目の前の両親を見つめる。そして、そつと手を前に差し出し、深くゆっくりと頭を下げた。

本当なら、直接言いたかった。

「お父さん、お母さん。明日私は……」

湊はふつと息を吐く。そしてはつきりと言った。

「……結婚します」

始まりは、ちょうど一年前だった。

冬休みが始まり、今年も早いものであわずかとなった。

顔が痛くなるような風が吹き、冬の厳しさを嫌というほど実感してしまう。

クリスマスの日。震えるような寒気の中、誠と湊は出かける準備をしていた。

綺麗な花や線香、掃除道具などを持ち、墓参りへと向かった。

すっかり葉が落ち、枝だけとなった木々の並木道を歩く。息を吐くだけで白い空気が空へと登っていった。

「寒いね、兄さん」

湊はぎゅっと誠の腕を組んだ。密着することで温もりを感じる。なにより、誠は心が温かいと思った。

去年まではずっと恐怖心ばかりの日だった。誠には誰にも言えない秘密があった。

それは、スカイの力で湊を願ったことだ。

両親がクリスマスの日に交通事故で死に、一人ぼっちになった誠は苦しんだ。

孤独の苦しみを嫌というほど知り、その地獄に耐えることができなかった。

誠はその夜、一生に一度使える魔法の力、スカイで家族が欲しいと願った。

そのことがいつ湊にばれるか、それが恐ろしく怖かった。

だが、今はそんなことない。湊とはわかり合い、今では二人は付き合っている。家族でもあり、恋人でもある。

こんなに幸せなことはなかった。孤独を感じず、癒されるこの心は、かけがえのないものだった。

両親の墓の前に着くと、二人はさっそく掃除を始めた。一年もの蓄積された汚れを入念に落とし、綺麗になると花を添え、線香をあげた。そして手を合わせ、そっと目を閉じた。

誠は前とは違って、恐れることなく、二人の安らかな眠りを願った。小さく笑みを浮かべ、両親の墓を見た。

自分はもう寂しくない。大好きな湊がそばにいる。これから、ずっと。安らかに眠って、見守っていてくれ。

誠はそっと隣にいる湊を見た。湊は眼を開けると誠に向き直った。

「帰ろっか。兄さん」

湊はニコツと満面の笑みを見せた。その笑顔を守ると、誠は心から誓った。

家に帰り着くと、二人はさっそくクリスマスと湊の誕生日の準備に入った。

湊は食事の準備、誠は飲み物やその他のものを買いに行った。

誠は買い物を済ませるとすぐにあるものを探した。

それは湊の誕生日プレゼントとクリスマスプレゼントだ。

「さて、今年は何を渡すかな」

誠はいろいろなお店を訪れ見ていく。可愛いぬいぐるみ、バッグ、服、靴、帽子などクリスマスの影響か、限定商品が多く安売りしている。

こういうときはいいのだが、商品が多すぎてなかなか良い物が見つからない。

なにより、誠たちは兄妹でなく恋人同士なのだ。できればそれにふさわしいプレゼントをしたい。喜んでくれそうな、最高の贈り物をしたかった。

そのとき、一つのアクセサリー店が目に入った。

「エンゲージリング？」

文字通り結婚指輪である。

もちろん本物ではなく、若者がつけるような本物に似せた指輪だ。宝石などではなく、綺麗なガラスなどが取り付けられている。

「指輪か。ここでいいかな」

誠は中に入って見て回った。たくさんの指輪があり、種類も色の豊富だった。

まるで本物の宝石が取り付けられてあるように綺麗で、パツと見、本物と思ってしまうかもしれない。

赤、青、緑、黄色など色もさまざまで、形も丸型はもちろん、三角や四角、中にはオリジナルに加工もできるようだ。

値段も千円と安いものから一万円を越すような高いものまである。

「なにか良いものはないかな」

すると、一人の女性店員が誠に近づいた。営業スマイルで接客を始める。

「お気に入りの中は見つかりましたか？」

「いや、たくさんありすぎて」

「恋人に贈られるのですか？」

店員が明るい表情で訊いてくる。誠は少し照れ笑いを浮かべうなずいた。

「それでしたら、これなんていかがでしょう」

店員が紹介したのは青と赤の綺麗な石が取り付けられた指輪だ。二つセットになっており、値段も三千円とお得。

「これはですね。今人気のある指輪で、着ける前にお互いのお願いごとを言ってはめるとその願いが叶うといわれているのです。恋人同士にはぴったりですね」

誠はその指輪を手を取った。これなら湊も喜びそうだ。

「じゃ、これにします」

誠は会計を済ませ、大事にポケットにしまい、家へと戻っていった。

冷気に包まれた住宅街では、どこもクリスマスパーティーを行っていた。

外にまで漏れる楽しそうな声が聞こえる。寒さを吹っ飛ばすようなその温かい笑顔、絆、そして幸せ。

こういう時だからこそわかるのだろう。自分には家族がいる。友達、仲間、そして恋人がそばにいる。

そのことを実感するのは幸福に満たされたときだ。

同じように、ここでも幸せそうな雰囲気がいっぱい溢れていた。

「メリークリスマス！ それと、誕生日おめでとう、湊！」

「うん。ありがとう、兄さん」

誠と湊はグラスを持ち、軽く音を鳴らした。

こたつを囲み、向かい合って座っている。テーブルの上にはケーキやから揚げ、スープなどごちそうが乗せてあった。

「これで湊は１７歳か。大きくなったな」

「へへ。そりゃ成長するでしょ」

すると、湊は青い包み袋を差し出した。

「はい。クリスマスプレゼントだよ」

「おお！ ありがとう、湊」

誠はさっそく包みを開けた。中には靴が入っていた。メーカーもので、高そうなものだった。

「かっこいいな。ありがとう、湊」

「うん。大事にしてね」

そして、誠もプレゼントを差し出した。

「はい。俺から湊へプレゼント。これはクリスマスのな」

誠が湊に見せたのは赤いリボンだった。それを見て湊は首をかしげた。

「リボンがプレゼント？」

すると、誠はにやっと笑って、そのリボンを自分の首に巻きつけた。

「プレゼントは俺！　なんてどうだ？」

そこで湊は重いため息を吐いた。

「まったくおもしろくない……」

「そ、そうか……」

誠は少しガッカリした。しょうじき傷ついている。仕方なく、本物を出した。

「はい。こっちが本物」

それは帽子だ。温かそうなピンク色のニット帽で、上には丸いボールもついている。白い毛糸で作られ、なかなか高い。

「わあ、かわいい。ありがと、兄さん」

湊は嬉しそうに受け取りさっそく被った。

「どう？ 兄さん。かわいい？」

「おお、似合ってる。すごいかわいいぞ」

湊は少し頬を染めニコツと笑みを浮かべた。そして立ち上がると誠の隣に座り、肩を寄せた。

「これからずっと一緒にいようね、兄さん」

誠は肩に腕を回すとそっと抱きしめた。

本当に嬉しかった。大好きな人と一緒にいられる。それはこの上ない幸せだ。心が満たされ、寂しさを感じない。

湊がいれば何もいらぬ。そう思えるほど、湊が愛しかった。

「そうだ。まだプレゼントはあるぞ」

誠はポケットから例のものを取り出した。あのエンゲージリングだ。

「わあ、かわいい指輪だね」

「この指輪な、はめる前に願いごとを言つと叶うんだって。一緒につけようぜ」

誠は赤い石の着いた指輪を湊に渡した。

「願いは何にする？」

「そうね。やっぱりずっと一緒にいることかな」

「でもそれは叶いそうだな。もっと大きなものにするか」

「大きなもの？」

「例えば……結婚するとか」

そこで湊の顔が一瞬で真っ赤になった。

「け、結婚なんて、そ、そんな、ぷ、プロポーズは、ま、まだ早いよ」

湊はすごい動揺しており、慌てふためいていた。

「別にそんなつもりで言ったんじゃないけどな。まあ、嫌ならいいけど」

そこで湊は激しく首を振った。

「い、嫌じゃないよ。わ、私だって……兄さんと結婚できたら、それは……」

「それは？」

誠が訊く。湊はうつむき、誠と目を合わさないようにしていた。

「も、もついいじゃない。ほら、はめるよ」

二人は手を前に出し合い、片手にはエンゲージリングを掴んだ。

そして一緒にいった。

「いつか、最高の幸せを手に入れ、結婚できますように」

そしてお互いの左手の薬指に指輪をはめた。そしてお互い笑みを浮かべた。

「叶うといいな」

「へへ。そうだね」

二人は天井に向けて手を出し、キラキラ光る指輪を眺めた。

湊編 part 2：天敵

ある一人の少女が空港にいた。温かそうなマフラーを巻き、手を擦り合わせながら椅子に座っていた。

暖房は点いているが、さすがに寒い。時刻を確認し、そろそろだと思ひ、じっと待ち続ける。

そのとき、誰かに名前を呼ばれ、立ち上がった。

「あ、李！^{すもも} 久しぶり！」

少女は李の手を取って飛び跳ねるように嬉しがっていた。

「久しぶりだね。元気だった？」

李が訊いてくる。

「うん。元気してたよ」

「それで……あの話しは、実行するの？」

「……うん。これも、あの二人のためだから」

「そっか。わかった。協力してあげる。お世話になってるからね」

「へへ。何かお礼するね」

「でも、どうしてそこまでするの？」

「もちろん、あの二人には幸せになってもらいたいから。今も、そしてこれからもね」

その少女はニコツと笑みを浮かべ、李と共に空港を後にした。

冬休みが終わり、三学期が始まった。

大学の進学を希望する生徒たちは血眼になって勉学に励んでいる。

それとは違い、就職希望の誠はのんびりとしていた。運良く手ごろな仕事が見つかり、そこに働くことが決まったのだ。

残るは卒業のみとなった身には、早く面倒な授業をどうやって潰すかということしか考えることができなかった。

そんな時に、珍しく転校生が来た。皆手を走らせるのを休ませ、廊下に立っている生徒に注目していた。

先生に呼ばれた転校生は、ゆっくりとドアを開け、教室の中に入ってきた。

ドアが開いた瞬間、その生徒は肩まである少し長くサラサラとした髪をさつと払い、教卓の真ん中の位置に着いた。

転校生は先生からチョークを渡され、黒板に自分の名前を書いた。そしてみんなに向き直った。

「東京から着ました。明石李あかしすももです。よろしくね」

李はニコツと可愛らしい笑顔を見せた。すると、たちまち男子たちから満場の拍手が送られた。それに答え、李は軽く手を振った。

誠は別に何とも思えないし、自分には湊がいるので興味はなく、肘を着きながらその生徒は見ていた。

すると、周りをぐるっと見渡していた李は、誠の存在に気づいた。

二人は目が合った。李はふっと笑みを浮かべた。

その笑みが、誠にはただの笑みではないように感じた。

昼休みになり、誠はいつものように待っている湊と瞳のもとに行こうとした。

そのとき、誠の席にあの転校生が来た。

「私、明石李っていうの。よろしくね、誠くん」

「え？ あ、ああ、よろしく……」

誠は少し戸惑いながら挨拶した。

そのとき気づいたのだが、李の後ろにいる男子たちは睨むようにしてこっちを見ていた。

「あ、俺用事あるから、ごめんね」

誠は席を立って教室から出ようとした。そのとき、李が誠の手を掴んだ。

「待つて。私、誠くんに用があるの」

「俺に？」

誠は疑問の表情になりながら李を見た。

二人は李の要望で校舎裏に来た。人気の無いここは、静寂に包まれ、木の茂った匂いだけが鼻についた。

「おい、俺に用ってなんだよ。早くしないと、飯食う時間なくなるぞ」

誠の数歩前を歩いている李に言う。李は立ち止まると振り返った。

「ふふ。昼ごはんならあとで奢ってあげるから我慢してよ。清水誠くん」

李はまた可愛い笑みを浮かべて見てくる。

大抵の男子なら一ころで虜になるだろう。誠は鈍いし湊がいるからそんなことはなかったが。

「悪いけど、俺弁当あるから。だから早くしてくれ」

そこで李はまた笑った。

「妹の湊ちゃんの弁当がそんなにいいの？　ま、恋人の手作りだもんね。そりゃ、彼氏なら食べたいか」

そこで誠は疑問を浮かべた。

なぜそんなことを知っているのだろうか。転校してきたばかりなのに、そんなこと知るはずない。

「お前、何でそんなこと知ってたよ」

李は手を後ろに回して可笑しそうに笑った。

「さて、何ででしょうね。当ててみてよ。誠くんならわかるでしょう？」

誠はじつと考えた。

まさか、香と同じように心が読めるのだろうか。でも、さっきまで湊のことはまったく考えていなかった。それならわかるはずない。では、なぜ。

「わからない？　ま、無理ないか。難しすぎるよね」

李はその場でくるくる回りながら言う。

何を企んでいるのだろうか、何も読めないやつだった。

「おい、答えろ。なんでお前がそんなこと知ってたんだ」

誠は我慢できず、少し荒っぽい口調で言う。李は立ち止まって誠を見た。

「答えが知りたいなら、放課後、体育倉庫に来て。そこで、私の秘密教えて、あ・げ・る」

李は最後にウィンクしてその場から立ち去っていった。

「放課後、体育倉庫……」

誠はさっきから嫌な予感しかなかった。あの李という生徒に、全てを持っていかれそうで……。

李は誠から離れると、鼻歌まじりで歩き、にやつと笑みを浮かべた。

「作戦成功。これで、誠くんは私のものだよ」

放課後。誠は約束通り体育倉庫に向かおうとした。

すでに李の姿はない。先に行ったのだろうか。

教室で帰る準備をしているとき、湊が来た。

「兄さん。私ちょっと用事あるから。先に帰ってる?」

「ああ。俺も用事あるんだ。なら、校門の前で待ってるよ」

「うん。わかった」

「でも、用事ってなんだ？」

「うん。さっき先生から、体育で使った道具の片付けを手伝ってくれって言われて。瞳もんだけど、どこか行っちゃって」

「そっか。なら仕方ないな。それにしても、瞳のやつ逃げたんじゃないだろうな」

「ふふ。まあ、何か用事があるんだよ。それじゃ、いくね」

誠と湊は鞆を持つと、教室から出て行った。

湊は先生から言われた通り、体育で使った道具の片付けをしてくれと頼まれた。

なぜか先生はすごく感心し、評価を上げるぞ、と言っていた。先生が頼んだのに、大げさだなと思った。

誠は体育倉庫に着いた。ドアを開けると、すでに中には李がいた。床にマットを敷き、その上に座っていた。

「あ、来てくれたんだね。嬉しいな」

李は可愛い笑みを浮かべている。

「それで、お前はいつたい何なんだ。なぜ俺のことを知ってる」

「ふふ。だって、ここに来る前から知ってたもん。ある人から聞いた」

てね」

「ある人？ ある人って誰だよ」

李は、暑い暑い、と言いながら、制服の上着を脱ぐと、その場に投げ捨てた。

「誠くんのことをよく知ってる人だよ。一番近くにいてね」

すると、李は誠に近づき、上目遣いで見ながら肩に手を置いた。

「ねえ、誠くんは、エッチ、したことある？」

「え？」

「だ〜から、エッチ、したことある？」

李の甘い声が耳元で囁かれ、吐息がわかるほど近かった。

誠は視線を逸らし、声を震わせながら答えた。

「いや。な、ない……」

「ふふ。嘘だ〜。彼女がいるのに一回もないなんておかしいよ。それなら……」

李は誠の制服のボタンを外し、上着を脱がした。

「私が教えてあげる。練習と思ってね。一から教えるから安心して」

「は？　ちょ、ちょっと待てよ。誰がそんなこと」

「あれ？　嫌なの？　目の前にこんな可愛い子がやろって言うてるのに断るんだ」

「ふ、ふざけんな！　誰が好きでも何でもないお前なんかと」

「ふゝん。けっこう純粹なんだね。でも」

李はマットの上に座ると、シャツの上のボタンを外し、胸の谷間を見せ付けた。そして、チラッと短いスカートの裾を上げた。

「これなら、どうかな？」

李は笑みを浮かべ誠を見てくる。誠はその姿を見てごくつと唾を飲み込んだ。顔が赤くなるのがわかる。

「はは。やっぱりこんな姿見たら興奮するよね」

「バ、バカにすんな！　そんなことのために来たんじゃない！　教えないなら俺は帰る！」

誠は振り返って帰ろうとした。すると、後ろから李が抱きついてきた。

「どうしてそんなこというの？　こんなに……誠くんのが好きなのに」

「え？」

そのとき、李が誠の体を引っ張り、二人はマットの上に倒れた。

「いてて、な、何すんだよ」

誠は頭を擦りながら固く閉じていた目を開けた。

すると、目の前に李の顔があった。自分の上に李が乗っかり、誠を見つめてくる。

李は再び笑みを浮かべて甘い声で言った。

「誠くん。女の子がこんなに積極的なのに無視するなんて酷いよ。それに、私の秘密ならもう気づいてるでしょ？ 誠くんには彼女いること知ってるのに、普通こんなことする？」

そこで誠はあることに気づいた。ありえないことが今自分に起きているのだとわかった。

なぜ今自分はこんな状況に陥り、李は告白したのか。

「お、お前……」

李はふつと不気味に笑みを浮かべて誠の顔を両手で触れた。

「気づいた？ 私の秘密。少しは気づいたよね。それと……何を考えているのかも」

そのとき、ガラッとドアが開かれた。眩しい光が注がれる。

二人はそのドアの前に立っている人物を見た。視界がはつきりし、

その姿が映し出される。

その人物が誰かわかると、誠は目を大きく見開き、思わず口を開いた。

「み、湊……」

そこには湊がいた。体育の道具を抱え、呆然とした表情で誠と李を見ていた。

「に、兄さん、何をして……」

すると、李がニヤツと笑い、誠の顔を自分に向かせた。

そして李は目を閉じると顔を近づけキスをした。

誠はあまりに突然で驚いていた。

「に、兄さん……」

湊はその光景を見て持っていた道具をその場に落とした。

湊編 part3：破局

湊は目の前の状況に理解できなかった。

いるとは思わなかった誠、そして知らない女子生徒が誠の上に乗っている。

なぜか、その姿は薄着で、それもシャツの上の部分からは胸の谷間が覗いていた。

そして、その女子生徒は自分の彼氏である誠にキスをした。

「おいしかったよ。……誠くんの唇」

李が不気味に微笑み、誠を見つめる。

誠はあまりに驚いて硬直状態となりじっと李を見ていた。

湊は震えている体を押さえ、口に手を当てて呟いた。

「兄さん……」

その言葉に誠は我に帰った。ハッと湊のほうを向く。

「み、湊……。ち、違うんだ……。違うんだ、湊！」

湊は目に涙を浮かべた。溢れ出し、頬に伝っていく。

目を閉じると、何も言わず、全力でその場から走り去ってしまった。

「湊！」

誠は追いかけようと立ち上がろうとした。しかし、李が誠の体を押さえ、再びマットの上に寝転んだ。

「ダメだよ、誠くん。もう……二人の人生は終わったんだから」

誠は少しずつ怒りが込み上げてきて、ぎゅっと拳を握った。そして鋭い目つきになって李を睨みつけた。

「てめえ、ふざけんなよ……。自分が何やったかわかってんのか！」

誠は腕を上げて叩こうとした。

「いいの？」

李が口を開き、誠の手が止まった。

李はいつもの可愛らしい表情ではなく、ぞっとするような冷たい目を向けていた。

「ここで私を殴ったら、すぐに叫んで誰かに来てもらうよ？ そしたら、誠くんが私を襲ったことになるよ。今私こんな格好だし」

そこで誠はぎゅっと拳を握り、怒りを抑えた。そして悔しそうに腕を降ろした。

李はふっと笑みを浮かべた。

「いい子ね。さすが誠くん。優しい、物分りがある」

誠は無理矢理起き、李をどかすと湊を追いかけた。

その場に残された李は、上着を着ると笑みを浮かべた。

「大成功かな。これで、完璧……」

湊は走っていた。全力で、ただがむしゃらにかけていた。頭の中ではさっきの姿が映し出される。

「なんで、なんでなの……兄さん……なんで」

湊は溢れる涙を流し、息が切れようと走っていった。

誠は湊のあとを追うが見つからない。どこにいったのだろうか。このままでは誤解を解くにも何もできない。

「くそ。湊、どこにいったんだ……」

誠は再び湊が行きそうなところを手当たり次第に向かった。

日が暮れ、静寂な夜が訪れた。

湊は自分の部屋で、電気も着けず暗い中、ベッドに顔をうずめながら泣いていた。

「うつ……うつ……兄さん……」

湊はシーツをぎゅっと掴んだ。

誠が浮気をしているなんて思わなかった。ずっと、これからもずっと、誠は自分のそばにいてくれると思った。それなのに……。

信じてた。誠はそんなことせず、自分だけを見つめ、愛してくれるって。

だから、自分も負けなくらいの愛情を注いでいたのに。誠の愛に、必死に応えようと努力をしてきたのに。

「兄さん……。……兄さん……」

湊はそつと手にはめてある指輪を見た。

誠から誕生日に貰ったエンゲージリング。将来は結婚しようと誓ってはめたのに。

湊は指から外すとおもいつきり投げ捨てた。壁に当たった音がし、どこかに消えてしまった。

これで、もう誓いも、誠との絆も、全て無くなった――。

「うわあああああああ――！」

誠は湊の部屋の前で戸惑っていた。

誤解を解きたい。だけど、中に入りたくても入れない。さっきから泣いている声が聞こえる。それが心に重く押し掛かっている。

この涙は、自分が作ってしまったのだろうか……。

すぐにでも慰めたい。いつもなら慰めて、仲直りした。

でも、できなかった。あんな醜態を見せ、なんて言えがいいのだろうか。何をいっても無駄な気がする。

今自分にできることは、なに一つなかった……。

誠は指にあるエンゲージリングを見つめた。

「なんで……なんでこうなったんだ？　俺がいつたい、何したんだよ……」

誠はその場に崩れ落ちた。そして悔し涙を静かに流し、拳を強く握った。

次の日から二人は一言も口を開かなくなった。

湊はいつもよりずっと早く起き、誠が起きる時間よりも早くに家を出る。居間には朝食は作ってある。その隣に弁当箱が置いてある。

誠はその朝食を静かに食べていく。いつもなら、目の前には湊の元気な笑顔があるのに、今はない。

今自分は一人だった。広い空間の中に、一人残され、孤独を感じた。

「また、俺は一人か……」

学校に着くと、誠は屋上に向かった。こんな状態で授業なんて受けたくなかった。風にでも当たってゆっくりしたかった。

誠は床に仰向けに寝転がると、空を眺めた。

青い空だった。気持ちの良い風が吹き、雲が泳いでいた。自分もあんな風に自由になりたかった。

すると、自分の頭の上に誰かが立っているのに気づいた。その生徒はしゃがみ込み誠の顔を覗いた。

「授業をサボる不良は誰かな？」

そこには李がいた。憎たらしいような可愛いらしい笑みを浮かべて見てくる。

誠は起き上がると睨みつけた。

「今授業中だろ。何でお前がいるんだよ」

「へへ。抜け出してきたの。誠くんに会いたかったから」

李が無邪気に笑顔を見せる。

「……なんでここだとわかった」

「言ったでしょ。私は誠くんのことなら何でもわかるよ」

李は満面の笑みを浮かべる。誠は相変わらず睨みつけるのを止めない。

「お前、なんで瞳のスカイが効かないんだ？」

誠は単刀直入に訊く。

瞳はスカイで、誠と湊の幸せのために使った。誰からも批判も悪事もされず、一生幸せでいられるようにと。

つまり、誠と湊の邪魔も何もできないはず。

スカイの力は絶対。なのに、李はまったく効いていなかった。だからあんなことができたのだ。

李は立ち上がると、大きく腕を伸ばし、そっと空を見ながら答えた。

「スカイか……。……私はね、スカイを使って全てのスカイの力を無効化してほしって願ったの。だから、私にスカイは通用しない」

「でも、お前は東京から来たって言ったよな。この島で生まれないと、スカイは使えないぞ」

「元はここに住んでたんだよ。でも、親の都合で東京に転勤したの。それで、またここに帰ってきたの」

「それで、お前の狙いはなんだ。なんで邪魔するんだよ」

李はふっと笑みを浮かべた。

「今それは言えないわね。たとえこの口が裂けても」

誠は舌打ちをすると李から視線を外した。李は再びしゃがみ込むと、誠の顔を覗き込んだ。

「ねえ、湊ちゃんはどうなったの？ 泣いちゃった？」

「……ああ。お前のせいだな」

誠は怒りを込めて言った。

「それで、仲直りしたの？」

その質問に誠は黙った。

「なんだ、仲直りしてないんだ。それじゃ、二人はここまでなんだね。ご愁傷様」

そこで誠は起き上がると、李の前襟を掴み、鋭い目つきで睨みつけた。

「お前のせいだろ！ お前のせいでこうなったんだ！ ずっとうまくいったのに、お前のせいで、全てめちゃくちゃに崩れたんだ！」

誠の怒声に李は動じなかった。そして口を動かし、冷たい口調でいった。

「でも、その程度の仲なんでしょ？」

「……え？」

「ちよつと彼氏が浮気したくらいで泣いてすぐに別れるなんて、まあ、ちよつとかわいいけど、訳も聞かずに決め付けて、勝手に泣いて破局。彼氏は助けてもやらず、慰めもしない。こんなんじゃ、いつか別れるのが落ちだね。早く別れることができてよかったじゃん」

「てめえ！」

「だってそうでしょ！ 付き合ってるなら、お互いのこと信じなさいよ！ 恋愛ってそんなものの？ そんな簡単なことなの？ ただ一緒にいるだけで付き合ってることになるの？ そんなのただの友達じゃない！ 人を好きになるってことはね、この何百億という世界の中からその人と出会い選んだってことなんだよ。その人が好きでたまらないから選んだんでしょ。だったら、その人のことを最後まで信じるのが本当の恋人でしょ！ そんなんで付き合ってるっていうなら、別れたほうがいいに決まってるじゃない！」

李が睨みつけてくる。誠は反論できず、そつと手を離れた。

「お前、いったい何を考えてるんだ」

李はニコツと笑みを浮かべた。

「さあ〜ね。自分で考えなさい。それと、私はまだ誠くんの邪魔をするからね」

そういつて李は手を振りながら行ってしまった。

誠は悔しそうに歯を食いしばり、拳をアスファルトの上に振り落

とした。

「くっ……」

拳から傷みが湧き上がってくる。でも、それよりも心の方がよっぽど痛かった。

自分が情けない。こんなにも、自分は弱い人間だったのだろうか。

誠は頭を抱え、ぎゅっと目を瞑った。

もう、方法はないのだろうか……。

湊編 part 4：信頼

学校が終わったあとの放課後。

湊は瞳と一緒に帰り、近くにあった喫茶店に入った。

今日はサービスデーらしくて入ったのだが、ここはコスプレ喫茶のよう、ちょっと入る場所を間違えた感じがした。しかも店長が異様に怖い……。

それでも入ったので仕方なく、二人は奥の席に着いた。

「それで、話って何？ 湊、顔色悪いよ」

瞳が湊の顔を覗いてくる。湊は深刻そうに顔をうつむきながら、重い口を開いた。

「……実はね、兄さんが……浮気してたの」

「……ええ——！」

瞳の大声に、周りのお客たちは一斉にこっちを見る。

瞳は場の雰囲気が悪くなり、苦笑しながら謝ると、身を乗り出して湊に問い掛けた。

「そ、それ本当なの？」

湊は小さくうなずいた。

「……体育倉庫で、知らない女の人と一緒にいて……キスした」

「あ、あの、お兄さんが……」

瞳は落胆しながら椅子に座り直す。

「そ、それで、どうするの？ 別れるの？」

その質問に、湊は困惑した表情でさつきよりもうつむく。

「……わからない。私、どうしたらいいのかわかんないよ……。兄さんのことは好きだよ。でも、兄さん、他の人と付き合ってるみたいだし、私、兄さんのこと信じられない……」

そういつて湊の目から涙が零れる。瞳は困った表情で何とかしようとする。

「み、湊。元気出してよ。大丈夫だよ。きっと何かの間違いだよ。あのお兄さんが、浮気なんて……」

「でも……」

「ね、もう一回信じてみよ。恋人なら、信じてみようよ」

「……うん」

湊は少し不安で、信じるにもその心意気がないが、瞳のいうことを聞くことにした。

そのとき、携帯のメロディーが鳴り響いた。瞳の携帯だ。

「あつ、ごめん。電話だ。ちょっと出るね」

瞳は立ち上がると、急いで喫茶店を出る。

湊は注文したレモンティーを飲んで待つ。意外にもおいしかった。

少しして、瞳が帰ってきた。謝りながら席に着くと注文したミルクティーを口に含んだ。

「ごめんね、友達からだった。それで、話戻すけど、その浮気現場を見た後から、お兄さんと話し合った？」

湊は少し悔みながらも首を振った。

「それなら、もしかしたら何かの間違いかもよ。一回話し合ってみようよ。私、協力するから」

湊は曖昧にうなずく。

確かに、瞳のいうとおりだ。もしかしたら勘違いかもしれない。もう一度話し合って、信じてみるのがいいのかもしれない。

瞳の提案で、二人は喫茶店から出て行き、湊の家へと向かった。

誠は一人で自宅へと向かっていた。手をポケットに突っ込みながらトボトボ歩いていく。

そして何度も後ろを振り向き、怒りの籠もった目で一人の生徒を睨みつける。

「なんで着いて来るんだよ」

誠の後ろには李がいた。さっきからニコニコと笑みを浮かべ、ちょこちょこ後ろを着いてくる。

「へへ。誠くんと一緒に帰りたいなって」

誠は李を無視すると歩き出す。その歩幅に合わせ、李も着いて来る。

「ねえ」

李が後ろから声をかけるが、誠は無視する。

「私、この前キスしたよね？ だから、私たちもう恋人同士でしょ？一緒に帰ろうよ。あつ、私、誠くんの家にいきたいな」

「うるさい。黙ってる」

「もう、冷たいな。でも、クールっぽくてかっこいいかも。ね、誠くんの家に行つていい？」

「ダメ」

「でも、着いて行くもん」

李は楽しそうに笑いながら着いて行く。誠は怒りを抑えながら、黙って歩き続けた。

誠は自宅へと着いた。家の前で立ち止まる。

中は静かなようなので、湊はまだ帰ってないようだ。

誠はもう一度後ろを振り向く。

李は誠の家の表札を見、そこが誠の家だとわかると大げさに仰け反るようにして眺めた。

「おつきい家だね」。高校生二人にしては贅沢だね」

そこで誠はまた違和感を覚えた。ごくわずかの人にしか知らない情報を李は知っていた。

「……お前、なんでそんなことまで……」

李はニコツと微笑む。

「へへ。言ったでしょ。誠くんのことは何でも知ってるよ」

そのとき、李の表情が変わった。一瞬だが、ぞくつとするような冷たい目つきに変わり、気づけば元に戻っていた。

そのとき、後ろから足音が聞こえた。誠はそつと振り向く。

誰かわかると、誠は圧迫されそうな心臓を抑え、つい呟いた。

「み、湊……」

そこには湊がいた。隣には瞳がいる。湊もじっと誠を見ていた。

「兄さん……」

誠は意を決すと湊に弁解しようと口を開いた。

「あ、あのさ、みな——」

「あ、この前いた子だよね？ ええと、二年生の湊ちゃん」

後ろから李が前に出てきて誠の言葉を遮る。湊は少し怯えた表情になっていた。

「湊ちゃんかわいいね。誠くんの妹にするのはもったいないよ。私が貰いたいな」

「あ、ありがとう……」ざいます」

湊は困惑した顔で言う。李は湊の前にしゃがみ込むとじっと見つめた。

「ふーん、その顔は、彼氏と仲直りしたいって顔だね。でも、ごめんね」

「え？」

李は立ち上がると、誠の隣に来て、ぎゅっと右腕を抱きしめた。

「私たち、付き合ってるの。だから、邪魔しないでね」

その言葉に、湊はこれ以上ないショックを受けた。体が震え、息が苦しく、目眩がする。

誠は乱暴に李の手をどかした。

「なに勝手なことやってんだよ！ ふざけるのもいい加減にしろ！ 湊、違うんだ。これは全部こいつのでまかせだ。俺はこいつなんかと付き合ってない。本当だ！ 信じてくれ！」

湊はぎゅっと拳を握った。

信じたい。信じてやりたい。でも、恐怖心のせいか、信じることができない。

傷つくことが、苦しむことが、少しでも自分を守ろうと自己防衛反応が起き、思ったようにいかない。

信じたくても、信じられない……。

「湊……。頼む、俺を信じてくれ！ 俺はお前を裏切らない！ 絶対、裏切らない！ 信じて、これから、お前を傷つけたりしない。だから……。だから！」

誠が目につつすらと涙を浮かべながら必死に告げる。でも、湊の心は動かなかった。

「湊……」

隣にいる瞳が呟く。

湊はさつき瞳がいった言葉を思い出した。

信じてみよう。一度の失敗くらいなら、自分は大丈夫のはずだ。

信じられる。自分なら、きっと信じて上げられる。また、あのような幸せが帰ってくるなら……。

「あ、あの、兄さん……私……」

そのときだ。

李が誠に抱きつき、そして再びキスをした。

その光景が目には焼きつき、時が一瞬止まったのか、スローモーションのようにゆっくりと流れていく。

李はそつと唇を離すと、ニヤツと笑みを浮かべて湊を見た。

「ごめんね。こうでもしないと、私たちの関係信じてくれないでしょ？ 誠くん、ちょっと欲張りっていうか、ま、優しいからかな。だから、湊ちゃんを傷つけないようにあんな嘘言っただよ。だいたい、二人は兄妹でしょ？ 兄妹は付き合うことも結婚することも本来は禁じられているんだよ。それくらい知ってるでしょ？ ま、湊ちゃんだって、もう高校生で子供じゃないんだから……わかるよね？ 自分がするべきことは」

李の言葉が重く響いてくる。

もう、終わったのだ。誠との、自分の兄との幸せは終わった。

そもそも間違いだったのかもしれない。兄と妹という関係で付き合うことが……。将来は結婚？ その言葉が今では笑えてくる。

今日が覚めたのかもしれない。自分はバカだった。愚かな人だった。

確かに私は自分の兄が好きで、恋愛的感情が芽生えていた。

でも、しょせん二人は兄妹というどうしようもない繋がりがあり、壊したくても壊れない絆があった。

スカイで生まれた自分でも、世間が認めたこの繋がりには、断ち切る事はできない。

今まで過ごしてきた、儚い夢は、もう覚めたのだ……。

「兄さん……」

湊がそつと口を開く。

誠は震えを抑えながら、そつと湊の方を振り向く。自分の唇を抑え、驚愕な表情をしていた。

「み、湊……」

「……兄さん。これまでありがとう。私、本当に楽しかったよ。本当

に……夢のような、幸せな時間だった……」

「な、何を言ってるんだよ。やめろよ、湊……」

誠が一步足を出した。

「来ないで！」

湊の怒声で立ち止まる。誠は信じられない気持ちでいっぱいだった。だんだんと恐怖に蝕まれていく。

やめろ……。やめてくれ……。そんな、そんなこと……言わないでくれ……。

「兄さん、もう私のことは忘れて。私たち、兄妹なんだから、おかしかったんだよね。うん、最初から、おかしかったんだ……」

湊は顔を手で抑え、嗚咽を漏らしながらも続けた。

「……もう、終わりなんだよね。長い夢は、覚めたんだよね……」

「ば、バカなこというなよ！ 俺たちのあの時間を、夢で終わらせる気かよ！」

湊はそつと顔を上げた。そして最後に、涙を流しながらも満面の笑みを見せた。

「兄さんと過ごした時間は、幸せだったよ。……さようなら」

湊は振り返ると全力で走り出した。

「湊！」

誠は湊を追いかけようと走り出す。しかし、目の前に瞳が大きく手を広げて立ちはだかった。

「瞳……。な、何すんだよ！ 早く退け！」

「いいえ、退きません。どうしてもここを通りたいなら、お兄さんの覚悟を見せてください」

「覚悟……？」

「お兄さんは、湊とは兄妹ということはわかってますよね？」

「当たり前だ。俺は家族が欲しいと思ってスカイを使ったんだ」

「それじゃ、実際にお兄さんと湊は血が繋がってるんですか？」

「え？ い、いや、それは……」

「繋がってませんよね？ これがどういうことを意味するかわかりますか？」

「……どういうことだ？」

瞳は誠を睨みつけながら言った。

「お兄さんは、自分で湊を苦しめて縛り付けているんです」

「……え？　そ、そんなわけあるかよ。俺は湊を縛ったことなんか――」

「あります。いえ、湊は生まれたときから、縛られ続けているんです」

瞳は続けた。

「湊は優しいからお兄さんには話ませんが、私と二人のときはいつも言っていました。『家族だけど、家族じゃない。兄妹だけど、血は繋がっていない。恋人だけど、みんなは兄妹だと思われる。二人の絶対的な繋がりがあって、何なんだろうね』って。お兄さんと湊ってどういう関係なんですか？　本当の家族でも、兄妹でもない。でも、世間では兄妹ということになっていて、それでも二人は付き合い、おかしなことになっている。お兄さんは、湊を助けてあげないんですか？」

「あいつ、そんなことを……」

「お兄さんは、覚悟がありますか？　湊を、いえ、妹を、恋人を、いろんな関係があっても、助け出して、本当の繋がりを作る覚悟がありますか？」

「俺は……」

誠は拳を握り締めた。

自分に覚悟はあるのだろうか。湊があんなことを思っていたのは初耳だった。

そんな苦しんでいる湊を、救ってやれる覚悟が、今の自分にあるのだろうか。

「お兄さん」

瞳が問い掛けてくる。誠はぎゅっと目を瞑ると、震える声で言った。

「俺は、湊が好きだ……」

湊編 part 5：結婚

誠は湊の部屋に入り、そつと辺りを見渡した。

そして考え、導き出した答えを振り返る。

この答えは、正解なのかどうかはわからない。自分はバカだから。

でも、バカなりに考え、ベストだと思った答えを見つけ出した。

「これで、いいんだよね……」

誠は湊の机の上にある写真立てを手に取った。二人で並んで撮った写真。

嬉しそうに、楽しそうに、そして幸せそうな笑顔で、輝かしく映っていた。

「湊……これで、もう苦しまなくて済むから……」

誠は写真立てを置き、湊を探しに行こうと決意する。

そのとき、あるものが目に入った。

「これ……」

誠はそつと笑みを浮かべる。

それを拾い、ポケットに入れると部屋を飛び出した。

誠は湊を探すために走っていた。すでに辺りは暗くなり、外灯だけが灯っている。

思い当たる場所を探し回るが、なかなか見つからず焦りが募っていく。

「くそ、どこにいるんだ……」

誠は暗闇の中を、闇雲に走り回った。

湊は放心状態となりながらふらついていった。

重い足を引きずるように歩き、とぼとぼと当ても無く彷徨い続ける。

「にい、さん……」

力のない声が耳に届く。

もう、あそこには帰れないのかもしれない。今になってスカイのことが原因で不幸になるとは思わなかった。

繋がっているようで繋がっていない。見えるようで見えない、まるで頑丈で透明な鎖。

それに自分と誠は苦しみ、私はその呪縛から逃れるために、地獄の門をくぐってしまった。

湊はふと笑みを浮かべた。

「楽しかったな……。兄さんとの時間は……」

毎日が楽しすぎて、いつも誠と一緒にだった。

覚えている小学三年のころから、現在に至るまでさまざまな思い出が溢れる。

学校行事はもちろん、休日や長期休業は旅行やイベントにも参加した。

親がいなくて、ほとんど二人で過ごしてきた。大変だったけど、二人で頑張つて、支えあつて、励ましあつて、ここまで生きてきた。

そして、二人は愛し合った。そのときが、人生の中で一番嬉しかった。

今、透明な鎖に色が着いた。

恋人になることにより、二人はようやく絆ができたのだ。明るく、愛情に包まれた、ピンク色の鎖に。

でも、最後にはどす黒い漆黒の色に染まってしまった。そして、それはもろく砕け散ってしまった。

呆気なく、そして簡単に、二人は離れていった……。

気づけば、湊はいつのまにかあの場所に来ていた。

誠のお気に入り場所で、そこから見える夜景がいつも以上に輝いて見えた。

「綺麗……」

湊は芝生の上に座った。

ここで、誠から全てを聞かされた。スカイによって、苦しんできた四人の女子生徒の話。

その中で、自分は誠に選ばれた。そのはずだった……。

湊はぎゅっと自分の胸を締め付けた。そして溢れる大粒の涙が頬を何度も伝った。

止めることができない、悲しみの涙。

「なんで、私、スカイで生まれたのかな……。なんで、普通に生まれてこなかったのかな……」

湊は袖で涙を拭った。

「普通に生まれれば、兄さんと付き合うこともできた……。兄妹になることもできた……。生まれることは、とても大切でかけがえないことだけど……。こんなに苦しむなら、スカイなんかで、生まれなきゃ良かった……」

湊は何度も涙を拭いた。そして夜空を見上げる。

「もう、終わりでいいんだよね？ 休んで、いいんだよね……？」

湊はそつと目を閉じ、死の覚悟を決めた。

そのときだ。

「湊……」

ハッとした湊は振り返った。そして呟いた。

「兄さん……」

そこには誠が立っていた。息を荒げ、暗闇の中でもじっと見つめてくるのがわかる。

「……湊……」

誠は湊に近づこうと歩き出す。しかし、

「来ないで！」

湊が立ち上がって声を上げる。

「来ないで、兄さん……。私のことはほつといて！」

「湊……」

湊は涙を拭いて訴えた。

「もう、終わりなんだよ……。夢は、覚めたんだよ……。私たちの時間が、もう終わったんだよ……」

湊は顔を下げ、涙が地面へと零れていく。誠は首を振った。

「終わってない……。俺たちの時間は、まだ終わってない……。これから、また始まるんだ……。俺たちの道は、まだ続いてるんだ！」

「違う！ もう行き止まりだよ！ もう、全て終わったんだよ！これ以上……。私を苦しめないでよ……」

湊は涙をこらえながら続けた。

「兄さん、教えてよ……。私たちって、どんな関係なの？ みんなが納得する関係ってなんなの？ 兄妹でもない、家族でもない、正式な恋人でもない。だったら、残ってるものは何なの……？」

誠は少しうつむきながら言った。

「湊、確かに俺たちに、みんなが納得する絆がない。でも、ないなら作ればいい！」

「そんなことできるはずないじゃない！ 兄妹でも、家族でもないのに、血は繋がっていない……。恋人同士になっても、批判はされないけど、世間は認めない……。私がスカイで生まれたときから、こうなることは決まってたんだよ！ こんなことになるなら……生まれなきゃよかった！」

「ふざけんな！」

誠が怒りを爆発させた。

「今、何て言った？　なんて言ったんだ、湊！　お前、本気でそんなこと言ったのか？　本気でそんなこと思ってるのかよ！」

誠は湊を今までにないくらいに睨みつけた。

「お前以外に、苦しんでるやつは大勢いるんだ！　自分だけが不幸みたいに言ってるんじゃないね！　家族の幸せが欲しいやつ、友達の話が欲しいやつ、友達との触れ合いがほしいやつ、幸せを見つけたやつ、他にだっていろんな人が苦しんでるんだ！　俺だって、ずっと一人で、孤独で、寂しくて……だから、俺は湊を願ったんだ！」

誠は湊に近づいた。一歩いっば歩き、距離を縮めていく。

お互いが触れ合えるくらいまで近づくと、誠は言った。

「湊、人は、一生幸せだけで過ごすことは絶対ない。苦しみは、誰でも味わうことなんだ。それを乗り越えて、強くなれるんだ」

誠はそつと湊に触れた。優しく、指で涙を拭き、頬に触れた。

「弱気になったら、助けを求めればいい。泣きそうになったら、おもいっきり泣けばいい。お前は、一人じゃないんだ」

「兄さん……」

湊の目に再び涙が流れた。どんどん溢れ出し、再び嗚咽が響く。

「ごめん、なさい……。兄さん、本当に、ごめんなさい……。私、怖くて……。兄さんが、どこかにいっちゃったら……。私、一人になるのが……。怖くて……。でも、兄さんを私のせいで縛りたくないから

……わからなくて、もう、どうしたらいいのか、わかんなくて……。
ごめん、兄さん……」

湊は声を上げて泣き出すと誠の胸の中に顔をうずめた。誠は湊を受け止め、優しく抱きしめる。

「大丈夫。大丈夫だから。俺は、どこにもいかないから」

「……うん……うん……」

湊は泣き止むと、ニコツと笑みを浮かべ、誠に安心感を与えた。
それに答え、誠も笑みを浮かべる。

「あ、そうだ。これ持って来たんだ」

「え？……あつ」

誠がポケットから取り出したのはあの指輪だった。部屋の中で投げ捨て、どこかにいつてしまったのだ。

「それ、どうして……」

「ま、たまたま見つけたんだ。……湊」

誠は少し湊と離れると、軽く咳払いをした。そして少し頬を紅潮させながら、恥ずかしそうに告げた。

「湊……。俺、み、湊のことが……好きです」

「え？ あ、その、う、うん……ありがとう」

湊も頬を染めながらうつみき、もしもしする。

「そ、その、それで、あの……」

誠は上手く言葉にできずに戸惑う。そして目をぎゅっと瞑り、少し投げやりに言った。

「お、俺と……け、結婚、してください！」

「……。……えええ——！」

あまりに唐突なプロポーズなので、湊はつい大声をあげてしまった。

「ちょ、ちょっと待って、え、あ、その、え、ど、どうということ……？」

湊の顔がさつきよりも真っ赤になり、動揺で慌てふためいている。

誠も顔を赤くしながら説明しようとする。

「あ、その、だからな、俺は本気で湊のことが好きで、だから、ええと、結婚したいって、思ってた、だから、結婚すれば、ええと……」

誠はまた投げやりに言った。

「つ、つまり、結婚すれば、俺たちは夫婦だ。これで、俺たちの繋がりができるだろ」

「あつ……」

そこで湊は理解した。結婚すれば、二人は夫婦という繋がりができる。

婚姻届を出せば、正式に世間が認める形になる。

確かに二人は兄妹という関係だ。兄妹なら結婚はできない。

しかし、瞳のスカイの力で批判されない。特例で認められる。

実際に血は繋がっていないので、支障はない。

「兄さん……」

「あつ、勘違いすんなよ。別に繋がりが欲しいから結婚するんじゃないよ。純粋に、俺は湊のことが好きで……その……」

そこで湊はクスツと笑った。

「ありがと、兄さん。私、嬉しいよ」

「そ、そっか。それじゃ」

湊は恥ずかしそうに微笑みながら、そっと口を開いた。

「喜んで、その言葉を受け取ります。よろしく願います」

湊はすつと左手を差し出した。

「兄さん……指輪、頂戴」

誠は微笑みながらうなずくと、湊の手を取り、そつと薬指にはめた。

「これで、良いんだよね」

「ああ。これで、良かったんだ」

二人は見つめ合うと、嬉しそうに、そしておかしそうに笑い合った。

これで、再び二人の鎖は息を吹き返し、鮮やかな赤色へと染まり、頑丈に結ばれた。

そのとき、パチパチと拍手の音が聞こえた。誠と湊は音がする方へ見る。

その正体がわかると、二人は呆気に取られた表情になり、誠はつい呟いた。

「李……瞳……」

湊編 part 6：完結

物陰から出てきた人物を見て、誠と湊は立ち尽くす。

それはあまりに不釣り合いな組み合わせで、なによりなぜここにいるのか、不思議でいらなかった。

「なんでお前らがいるんだよ。……瞳、李」

目の前にいたのは瞳与李である。一緒におり、どこか親近感があるように感じた。

すると、李は満面の笑みを浮かべてパチパチと拍手をした。

「おめでとう。二人は結婚するんだね。良かった良かった。これで大丈夫だね」

「どういうことなんだ？ また何か企んでるのか？」

誠が警戒しながら李を睨みつける。李は軽く前で両手を振った。

「もう何もしないよ。演技にも疲れたし。それに、そこまで誠くんのこと奪おうなんて思わないよ」

「演技？ 演技って、いったいどういうことなんだよ」

李は「うーん」と困りながら考える。

「これは、私の口から言うより、瞳ちゃんから言ったほうがいいか

な」

「瞳が？」

湊が呟き、二人は瞳を見る。

瞳は少し申し訳無さそうにうつむきながら、コクツとうなずいた。

四人は誠の家に帰ってきた。居間のソファに腰掛、誠と湊の前に、瞳と李が座る。

「それで、どういうことだ」

まず最初に、誠が少し怒りを込めて問い掛けた。

「そんなに怒らないでよ。これも二人のためにやったんだよ」

「話しの内容次第だけだな」

誠の言葉に李は苦笑する。そして嘆息すると、事情を話し始めた。

「ま、簡単に言えば、二人の絆が深まるようにするためのお芝居をしたの。そのために、私は瞳ちゃんの協力をしたの」

「だから、それはどういう——」

「全部、私が考えたの」

唐突に瞳が口を開いた。うつむいた顔を上げると、誠と湊を見て話し始める。

「湊は私に言ったよね。『家族だけど、家族じゃない。兄妹だけど、血は繋がっていない。恋人だけど、みんなは兄妹だと思われる。二人の絶対的な繋がりがあって、何なんだろうね』って。これを聞いたときから、私はどうにかしないといけないと思った。確かに、私のスカイで批判や悪事はされない。でも、少なからず、違和感を覚えたり、心の中ではそうは思っていない人はいる。それに、二人の心の問題もできるかもって」

「心の問題？」

瞳はコクツとうなずく。

「絆って、思ってるより重くて、深くて、重要なものなんですよ。これがなければ、付き合うことも、結婚だってできない。愛し合えるから絆ができ、絆があるからお互いを大切に思える。でも、二人にはそれがない」

「そんなことないぜ。俺たちは恋人として、大切にしてるし、それが絆になってる」

「そうだよ」

誠と湊が反論する。でも、瞳は首を振った。

「でも、二人は世間からは兄妹とされている。それが、絆を解く鍵になってるのです」

「……どういうことだよ」

「つまり、今のお兄さんと湊の状況は、南京錠の鍵の開いた状態のまま繋がっているって感じですね。ちゃんと鍵をかけないと、すぐに解いてしまうということですよ。だから、その開いた鍵を閉めるために、このような芝居を考えました。兄妹という不可能で禁断的な恋をしている二人は、いつかこう思うはず。……なぜ、兄妹なのに付き合っているのかと」

その言葉に誠は立ち上がった。

「そんなことあるはずない！俺は純粹に湊が好きなんだ！」

李はビクツと体を硬直させた。瞳は動じず誠に目を向ける。

「それならいいです。でも、それがこの先いつまでもつか」

瞳は話し続ける。

「いつか、絶対に思うはずですよ。兄妹なのに、何で付き合っているのかって。恋愛は、いつか少なからず冷めるのです。まだもつという人と出会う可能性があるんじゃないかと暗示がかかり。そしてその暗示が大きくなることにより、浮気や不倫を起こし、最悪離婚という結果になる。どんなに愛し合っていても、それは仕方ないこと。そのときに、そう思うはずですよ。そうなった瞬間、二人は混乱し、別れる可能性があります。だから、そうなる前に、このことを言いたかったのです」

「なんで、そんなことがわかるんだよ。別にないかもしれないじゃないか」

「ないならそれでいいです。ただ、二人の絆を深めて、そして、いつまでも幸せであってほしいからしたのです」

「……なんで、そこまで？」

誠の質問に、瞳は優しく微笑んだ。

「それは、二人には幸せになってほしいからです。この世界中の、誰よりも。私の、最高の親友だから」

「瞳……」

湊が少し潤んだ目で見ると、瞳はスッと頭を下げた。

「ごねんね、湊。苦しめちゃったね。でも、本当に、私は二人がこれからずっと恋人同士で、いつか結婚してほしいと思ってる。誰が反対しようと、誰が邪魔しようと、私だけは味方だから」

「うん……うん……」

湊は嬉しそうに微笑みながら目じりを拭く。瞳も安堵し、ようやく笑顔を見せる。

瞳の孝作がわかり、一段落して誠は質問をあげた。

「それで、瞳と李はどういう関係なんだ？」

「ああ、私と瞳ちゃんは従姉妹だよ。お互いの母親が姉妹なの。だから知り合いなんだ」

「へー。そうなのか。でも、お前、よく嘘でもキスできるな」

「へへ、瞳ちゃんから頼まれたからね。でも、おいしかったな、誠くんのキス。ね、もう一回していい？」

「だ、ダメに決まってるだろ！」

「冗談だよ」

李がおかしそうに声を上げて笑う。こいつはどこか腹が立つやつだ。

李は笑い終わると、一息吐いて問い掛けた。

「それで、二人はいつ結婚するの？」

「え？」

「だって、誠くんはプロポーズしたし、それを湊ちゃんは受け入れたんでしょ？ ね、いつするの？」

「そ、そんなの知るか！ いつかだよ、いつか」

「いつかっていつ？ 私も参加したい。早く決めてよ」

「なんでそんな早く決めるんだよ！ つか、俺らまだ学生だろうが！」

「でも、誠くんはもうすぐ卒業だし、湊ちゃんはもう十五歳過ぎて

るから大丈夫だよ」

「そんなこと言っても、早すぎるだろうが！」

「そんなことないって。そしたらあみだくじで決めようか」

「は？　なんでくじなんかで決めるんだよ！」

「いいじゃんいいじゃん。そんなに大声出したら近所迷惑だよ」

そういつて李はあみだくじを作り始めた。こいつの行動には理解できないし、いちいち頭にくる。

「さ、できた。はい、選んで」

広告に裏に適当に書いたあみだができた。四つの直線があり、下は折りたたんで隠している。

「じゃ……これ」

湊は右から二番目の線を選んだ。

「これね。……………。あつ」

「どうした？」

李は紙を持ち上げて二人に見せた。

「今年のクリスマスだ」

「はあ！　なんで今年なんだよ！　少しは考えろ！」

「考えたよ。これでも遅い方なんだよ。他にはジューンブランドとして六月とか、夏休みのために海の日とか、秋で体育の日とか」

「全部今年じゃねーか……」

誠はガクツと落ち込み嘆息する。

「でも、決まったんだから、約束は守んなさい」

「誰が守るか。勝手に決めんな。俺らで決める」

「えゝ、せつかくしたのに意味ないじゃん。だったら、私のキス代ちょうだい」

「……いくら？」

「一千万」

「一千万?!」

「そうだよ。こんな美少女で、可愛くて、おしとやかで、スタイル良くて、おまけに超モテモテの私とキスを二回もできたんだから当たり前じゃん。払えないなら約束は守りなさい」

クソ。こいつ、マジで腹立つ。

「……でも、私、クリスマスに結婚式挙げてもいいよ」

「え？」

湊の唐突な賛成にみんなが耳を傾けた。湊は頬を赤らめながら話す。

「どうせするなら早くしたいし。兄さんと結婚するのは本当に嬉しい。それに、クリスマスは、特別な日なの。クリスマスで、私の誕生日で……お父さんとお母さんの……命日」

「湊……」

「私、お父さんとお母さんって、どんな存在なのかわからないんだよね。ずっと兄さんと一緒だから、親の温もりがわからないの。それに、何一つ親孝行してないし。だからね、せめて命日に、息子と娘の一生で一度の壮大な式を挙げたい。それが、自分ができる精一杯のことだと思う」

湊はクスツと小さく笑った。

「湊」

誠はそつと湊の頭を掴み、自分のもとに引き寄せた。

「わかったよ。今年のクリスマス、その日に式を挙げよう。それまでに費用は俺が絶対貯めるから。お前はそれまで俺のサポート頼むぞ」

「兄さん……うん」

二人は嬉しそうに笑みを浮かべた。幸せそうに、温かな空間に包

まれる。

「あの、幸せなのはいいけど、私たちのこと忘れないでね」

瞳と李はテーブルに肘をつきながらじーっと見ていた。

「あ、悪い。忘れてたわけじゃないんだ。ごめん」

「ふん。いいもん。誠くんの部屋に行ってエッチな本でも探すから」

「なっ！　ちょ、ちょっと待て！」

李は急いで誠の部屋へと向かい、誠はその後を追った。

その様子を見て、湊と瞳はおかしそうに笑っていた。

十二月二十五日。この日はクリスマス。そして自分の誕生日でもあり、両親の命日。

でも、行事はもう一つ増える。今日から、新しい記念が残る。

湊は閉じていた目を開け、綺麗に輝くウエディングドレスを身にまとい、協会の扉が開くことを確認すると、ゆっくりと歩き始めた。

その姿を見て、左右にある関係者の席は口々に感嘆な息が漏れる。

「綺麗だね」

「すっごい可愛い」

「私も懂れる」

クラスメイトが羨ましそうな表情で言う。

「湊ちゃん綺麗だね。あー、ちょっと悔しいけど、仕方ないか」

香が残念そうに嘆息する。

「ふふ、本当に可愛いね。私もいつか素敵な人と結婚したいな。誠くんみたいな人とね」

雫が微笑みながら言う。

「やっぱり二人はお似合いだね。ベストカップルだよ」

茜が腕を組んでうなずく。

「よかったね、誠くん……」

一人端の方で、透明な泉が誠を見つめながらそう呟いた。

「瞳……。あんたの親友、すごく立派になったね。瞳のおかげで」

李が話し掛ける。瞳は首を振った。

「私は何もしてないよ。ただ……湊が頑張ったんだもん」

湊はそっとうつむいた顔を上げ、前の方を見る。

そこには凜々しく立ち、堂々と自分を待っている兄でもあり、夫でもある誠がいた。

誠の元に着くと、二人は見詰め合った。

「湊……」

「兄さん……」

神父は一つ咳払いをすると始めた。

「それでは、清水誠殿。あなたはこの清水湊を妻とし、生涯愛し通すことを、誓いますか？」

「誓います」

誠は堂々とはっきりと言う。

神父はうなずくと湊に向き直った。

「清水湊殿。あなたはこの清水誠を夫とし、生涯愛し通すことを、誓いますか？」

湊はゆっくりとうなずいた。

「誓います」

「それでは、指輪の交換を」

二人は向き合つと、綺麗に輝く宝石の着いた指輪を交換した。そしてお互いの薬指にはめる。

「それでは、誓いの口づけを」

誠は湊のベールを後ろへ回す。湊の顔を出すと、そつと肩を掴んだ。

「湊……」

「兄さん……」

二人はそつと目を閉じた。そして、永遠の愛を誓い、唇を重ね合わせた……。

それから四年が経ち、凍てつく十二月の冬の日。

「稔^{みのり}。お父さん起こしてきて」

「はい」

左右にリボンで結んだ小さなツインテールを作り、可愛いパジャマ姿の稔はドタドタと階段を駆け上がり、一つのドアを開ける。

そのままの勢いで、ベッドの上におもいきりダイブした。

「パパ〜！ 朝だよ〜！ 起きてよ〜！」

ドスツと大きな音を立てる。

ベッドで寝ていた誠は呻き声を上げ、腹を抑えながら稔はどかした。

「わ、わかったから……。頼むからもう少し優しく起こしてくれ……」

「はい」

稔は大きく返事をすると思屋から出て行った。

誠は頭を掻きながら、ぶるっと体を震わせ、会社に行く支度を始めた。

スーツに着替え、居間に降りるとすでに朝食ができており、湊は稔の幼稚園の仕度をしていた。

庭にいる犬のソラはワンワン吠えている。

「もう、どれだけ寝れば気がすむの。早く食べないと片付かないんだけど」

湊が少し怒った口調で叱る。稔はおかしそうに笑っていた。

「ははは。パパ怒られている」

誠は稔にべっつと舌を出すと、新聞を開いた。ちゃんと政治面や経済面を読む。

テレビには茜が帰国したことを報道していた。カメラマンの数が

多すぎる。

それも無理ない。今ではハリウッドスターで、日本を代表するアイドルなのだ。

「あなた、もうすぐ墓参りだから、その日は休みとつてね」

「ああ、わかった」

そこで誠はふと息を着き、壁にかけてある写真を見る。

「もうそんなに経つのか……」

写真には結婚式で撮ったものがあり、誠や湊はもちろん、瞳、李、香、茜、雫、密かに泉も映っているが、誠にしか見えていなかった。

「あなた、幼稚園のバス来たから稔を連れて行って」

「ああ。よし、いくぞ、稔」

「うん！」

二人は元気良く玄関を出る。凍えさせる寒風が襲いかかり、身を縮ませる。

すでにバスが止まっており、中から先生が出てきた。

「おはようございます。稔ちゃん。そして、誠くん」

長い髪が風でなびき、可愛らしいエプロンを着けた女の先生が丁

寧に頭を下げる。

誠も笑顔を見せて挨拶した。

「おはよ、雫。今日も頼むな」

雫は顔を上げると、ニコツと微笑んだ。

「はい。誠くんの娘なので、責任を持って守り通します」

雫は専門学校を卒業後、幼稚園の先生となった。職に就いて二年くらいで、すっかり馴染んでいる。

「普通でいいよ……」

誠は苦笑いを浮かべる。

「本当は私の子を産んでほしかったけど……」

雫が頬を赤くして手で抑えながら恥ずかしそうに呟く。

「はいはい。早くいつてらっしゃい」

そしてバスが発発していく。

「パパ！　いつてきまゝす！」

窓から稔が顔を出し、大きく手を振っていた。雫も手を振っている。

それに応え、誠も手を振る。

そのとき、後ろから声を掛けられた。

「ご苦労様、お父さん」

声を聞いて、誠は笑みを浮かんで振り返った。

「こんなところで道草食っていいのか？ 国家試験対策の勉強しろよ」

誠の目の前には香がいた。手には参考書が握られている。隣にはペットのラッキーもいた。

「たまには息抜きも必要よ。あと一年後には国家試験合格して獣医になるから」

香は東京の獣医学のある国立大学に一発で合格したのだ。現役大學生である。

六年制なので、あと二年間勉学に励み、来年は国家試験だ。それに合格すれば獣医という資格が貰える。

「お前なら大丈夫か。万が一のときは誰かの心を読んでカンニングすればいいし」

そこで香は参考書で誠の頭を叩いた。

「バカ。そんなことするわけないでしょ」

誠は頭を擦ると軽く笑った。

「獣医になったら、家のソラも頼むぜ」

「もちろん。可愛い稔ちゃんのためにね。私に似て、動物が大好きだからね」

「はいはい。それじゃ、よろしく頼むな。俺は仕事だ」

「いつてらっしゃい。気をつけてね」

誠は一旦家に戻ると湊に一言告げ、家を飛び出し会社へと向かう。

その途中、瞳と李に出会った。

「あら、誠くん」

「あつ、お兄さん。これから会社ですか？」

李は大学院に通い、瞳は大学四年生だ。一緒の学校で、将来は特に決まっていらないらしい。今就職活動中だ。

「ああ、そうだよ。あと、親父さんに給料上げてっていつてくれ」

「そんなこと言ったら逆に減給ですよ」

瞳が苦笑する。

「稔ちゃんは元気にしてる？」

李が目を輝かせながら問い掛ける。稔を相当気に入っているようだ。

「ああ。病気一つせず元気だぜ。元気過ぎて困るくらいな」

「そつか。ね、クリスマスのは、瞳の家でパーティーあるからサボらず来なさいよ」

「わかってるよ。みんな来るんだろ？ 香と雫、ま、来るかわかんないけど、茜にも連絡取るよ」

「お願いね」

李はウィンクする。誠は苦笑すると仕事に向かおうとした。

そのとき、瞳が問い掛けた。

「ね、お兄さん。前から訊こうと思っていたんですけど、どうして稔って名付けたんですか？」

「あ、それ私も聞きたい。なんで？」

その質問に、誠はほくそえんで答えた。

「稔の意味はな、努力がよい結果をもたらすことなんだ。だから、スカイなんか頼らず、自分の力で夢を叶えて、それが良い結果になって欲しいと思って名付けたんだ」

その説明に二人は納得する。

「うん。ぴったりだね」

「それじゃ、お兄さん、お仕事頑張ってくださいね」

「おう！」

誠は手を振って再び歩き出す。

そのとき、ふわつと風が吹き、目の前に透明であるが、髪の毛の長い一人の女の人が出てきた。

「頑張つてね、誠くん……」

女の方は、ニコツと笑みを浮かべると、再び風が吹き、目の前から消えてしまった。

「泉……」

誠はふと呟き、そして笑みを浮かべた。

誠は走り出した。新しい家族を守るため。そして愛する人を養うために。

晴れ渡った青空が、島全体を包み込み、今日も新しい一日が始まった……。

瞳編 part 1：相談

始まりは、ある人物からの一言からだった。

三月の下旬、誠が高校を卒業し、もうすぐ社会人として旅立つ前
のときだ。

自分ののんびりできる休みが残り少ないとき、湊の親友である瞳が
やってきた。

「お兄さん！ ちょっと相談があります！」

「え？」

居間で今度就職する仕事場の内容を確認していた誠に向かい、突
然家に上がり込んで来た瞳が息を荒げながら入ってきた。

「お願いです、お兄さん！ 私を助けてください！」

そういつて瞳は誠になすりつく。

「な、何をだよ。ちゃんと説明してくれ」

誠は瞳を離し、少し距離をおく。

「私の、お父さんが……お父さんが……」

瞳は目を瞑ると、嗚咽を漏らしながら泣き出してしまった。

こんなふうに泣く瞳を見るのは初めてだった。

ようやく瞳が落ち着き始めると、誠はキッチンからお茶を持ってきて、そっと前に置いた。

「すみません……」

瞳は涙を拭くと、お茶を口につけた。

「それで、何があったんだ？」

「はい……」

瞳は湯のみを置くと、少し顔をうつむきながら、重い口を開いた。

「実は、私のお父さんが、三年生になったら、塾と家庭教師をつけて、毎日勉強に励めって。それに、部活まで辞めろって。まだインターハイ終わってないのに……」

そういつて瞳はまたしくしくと泣き出した。

「ああ、つまり、お前のお父さんが無茶なこと言っただんな。それが嫌で、お前はここに逃げて来たと」

「……はい」

瞳は膝に拳を置き、すすり泣く。誠は腕を組みながら、ふっと息を吐いた。

「瞳、悪いが、それは俺にも、どうしようもできない。親と子の問題だ。他人が口出しすることじゃない」

「え？……助けてくれないんですか？」

瞳が潤んだ瞳で見つめてくる。誠はぽんと瞳の肩に手を置いた。

「すまないが、俺はどうしようもできない。おじさんには、俺も逆らえなくてね。なにかと、いろいろお世話になったし」

「そ、そんな」

瞳はガクツと落ち込んだ。

瞳の父親は、全国的にも有名な会社の社長なのだ。

両親が死んだあと、湊が中等部で瞳と知り合い、誠たちの家庭状況を知った瞳の親は、何かと支援してくれた。

その恩があり、自分たちを救ってくれた瞳を助けてやりたいが、相手が相手だ。

それに、誠が就職する会社も、実は瞳の父親の会社なのだ。

入社一年目だから、みんなと同じ平社員から始まるのだが、誠だけ給料が少し高い。

もつと逆らえない。逆らえば、絶対といっていいほど、この首が飛んでしまう。

誠は手を合わせて頭を下げた。

「悪いな、瞳。お前にはお世話になったし、本当に協力はしたいんだが、相手がお前の親父さんじゃあな」

瞳がぐすつと鼻を嚙ると、うなずいた。

「そうですね。私のお父さんじゃ、いくらお兄さんでも、何もできませんよね」

瞳は涙を拭いて続ける。

「いつもバカで、怠け者で、アホで、シスコンのお兄さんが、有名会社に入れたのも、私のお父さんのおかげだし。そうやって人から助けてもらえないと、一人で生きていくこともできない。それに、スカイを使つてまで助けたのに、そのお礼はおるか、感謝の印すらない。……本当に、私って不幸ですね」

瞳の言葉に少し棘があつたのは気のせいだろうか。鋭く尖って、全て自分の胸に突き刺さった気がするのだが……。

誠は乱暴に頭を掻いた。

「ああ、わかったよ！ 協力してやる！」

そこで瞳の表情がパツと明るくなった。

「本当ですか？」

「ああ。でも、大して何にもできないぞ。相手が社長だし。少し一緒に説得するくらいしか」

「うん、うん。それでもいい。お兄さんがいれば、私何でもできます。周りで一番頼りになるし、お父さんの知っている人ってお兄さんだけですもんね」

そこで瞳は影でクスクス笑っていた。

「それで、俺は何をしたらいいんだ？」

誠が質問すると、瞳は誠に向き直った。

「はい。私と一緒にいるだけでいいです。傍にいてくれたら、それで」

「なんだ、それだけでいいのか？」

「はい。それだけで十分です」

瞳は満足そうな笑顔でうなずく。すると、瞳の携帯が鳴り出した。

「あつ、湊だ」

瞳は携帯を取り出すと、一言話し、立ち上がった。

「それじゃ、お兄さん。後でまた来ますね」

そういつて瞳は手を振って、家から出て行った。

誠はその後ろ姿を見届けると、ため息を吐いてソファに深く座った。

「ああ、俺クビになんないよな」

家を出た瞳は、街に向かい、一つのおしゃれな喫茶店の中に入った。

ウェイトレスに、待ち合わせです、と伝え中を見渡す。

奥の席に湊が座っているのを見つけ、こっちに手を振っているのがわかった。瞳は向かい側の座り、ミルクティーを注文した。

「それで、兄さん良いつていったの？」

湊がすでに注文していたコーヒーを飲みながら問い掛けた。

「うん。ありがと、湊。ふふ。お兄さん涙目に弱いんだね。すぐにオーケーしたよ」

瞳はクスクスと笑う。

「ふふ。兄さんの弱点だからね。ま、そこがいいところだけど」

瞳は目の前に置かれたミルクティーを口に含むと、ふつと息を吐いた。

「本当にありがとね、湊。湊が親友で良かったよ」

「うん。それはいいんだけど、あの話、本当なの？」

瞳はカップを置くと、複雑そうな顔でうつむいた。

「……うん。今、お父さんの会社、経営が厳しくてね。けっこう大きいから、人員も多いし、その分お金もかかるし。会社を立て直すには、これしかないんだって……」

瞳は改めて湊に頭を下げた。

「ごめんね、湊。少しの間だけでいいの。ちょっとだけ、お兄さん貸して」

湊は瞳の頭を上げさせるとうなずいた。

「いいよ。兄さんくらい、いくらでも貸すよ。それが、親友の頼みなら尚更ね」

「湊……」

瞳は嬉しそうに笑顔になる。

「それで、いつ実行するの？」

「うん。明日かな。今日は湊の家に泊まってもいい？」

瞳が申し訳無さそうに頼む。

「うん、それはいいよ。別にかまわないし」

「ありがとう」

そのあと、二人は楽しそうに話し、喫茶店を出ると家に向かった。

「ただいま、兄さん」

湊が家に帰ってきた。後ろには瞳もいる。

「おお、お帰り。あれ？ 瞳も一緒だったのか？」

誠が湊と瞳が会っていたことは知らない。内緒にしていたのだ。

湊は午前に、誠には友達と遊びに行くと伝えているだけだ。

「うん、途中で会ってね。それと、今日泊まらせてもいい？」

瞳はその場で丁寧に頭を下げる。誠も瞳の家の事情は知っているので、すぐに了承した。

湊と瞳は二階に上がり、湊の部屋に入った。

「ね、お兄さんの部屋はどこなの？」

瞳が湊のベッドに座りながら訊いてきた。

「あ、兄さんの部屋なら、向かい側の部屋だよ」

「そっか、ありがと」

「それじゃ、私夕飯に仕度するね。ゆっくりしていいから」

湊は部屋から出て行った。瞳も立ち上がると、ドアをそっと開け、誠の部屋のドアを覗いた。

「頑張らなくちゃね……」

三人で楽しい夕飯を済ませ、夜遅くなるとそれぞれ寢床に入るこ
とになった。

誠は大きな欠伸をすると自分の部屋に戻っていった。湊と瞳も、
湊の部屋で寝る。

誠はベッドの中に入ると、ドアに背を向け横になった。静かな夜
の中、寝息だけが耳に届き、だんだんと睡魔に襲われる。

すると、静かに誠の部屋のドアが開かれた。そして音を立てない
ように閉める。

それに誠は気づかず、すやすやと寝ている。そして、何者かが誠の
ベッドの中に入ってきた。

そこで誠は違和感を覚える。誰かが後ろから抱きついていて。温
かな温もりを感じる。

「お兄さん」

耳元に甘い声で囁かれる。

誠は眠い目を擦り、後ろを振り返る。視界がぼやけはつきりしない。だんだんと視野が定まってきた。

「湊か？」

誠は目を凝らす。そして誠はその正体がわかると固まってしまった。

目の前に瞳がいたのだ。

「へへ。お邪魔します、お兄さん」

可愛らしい笑顔を見せる瞳。誠は少し叫び声を上げながら、慌てて起き上がると、ベッドから降りた。

「もう、うるさいですよ。湊が起きたらどうするんですか」

瞳が人差し指を立てて、口元に持っていく「しー」と言う。

「い、いや、お、お前、俺のベッドで何してるんだよ」

誠は窓際まで下がり、未だベッドで横になっている瞳を指差す。

「へへ、お兄さんと一緒に寝ようかと思って」

瞳は自分の頭を撫でて無邪気に笑う。

「何考えてんだよ。俺には湊がいるんだぞ」

「わかってますよ。ほら、早く寝ないと明日起きられませんよ」

瞳は毛布を上げ、誠を手招きする。

「だから、一緒に寝られるわけないだろ」

「えゝ、嫌ですゝ。私、お兄さんと一緒に寝たゝい」

瞳が子供っぽく駄々をこねる。こんなやつだったのだろうか。

仕方なく、誠は床で、瞳は誠のベッドで寝る。誠は瞳に背を向けている。

その背中を見て、瞳は軽く口元を緩めた。

瞳の作戦は、すでに始まっていた。

瞳編 part2：宣言

次の日の朝。

誠は何度も欠伸を噛み締めていた。

それとは違い、瞳は上機嫌で朝食を食べている。

「兄さん、どうしたの？ さっきから欠伸ばつかだよ」

隣に座っている湊が問い掛ける。

「ああ、昨日寢床を襲われて、寒くてなかなか寝付けなくて……」

そこで誠はまた欠伸をする。それを見て瞳はクスクスと笑う。

湊は首をかしげることしかできなかった。

朝食を終え、誠と瞳は昨日話し合った通り、瞳の父親の元に向かう準備を始めた。

「それじゃ、行ってくるね」

「うん。頑張ってるね」

湊と瞳が手を振り会う。

瞳の隣で誠は緊張した面目で立っていた。

自分の上司のところに行くのだ。それも遙か雲の上の存在である社長。どうしても緊張してしまう。

瞳は誠の手を取ると、玄関を出た。

湊はその姿を見届け、やれやれといった感じで息を吐く。

「兄さんで大丈夫かな？」

二人は瞳の自宅へと向かう。

今日瞳の父親である、麻生聖司は休みだそうだ。

瞳は余裕の表情で歩いていく。誠はぎこちない足取りだった。

「大丈夫ですか、お兄さん？」

「大丈夫なわけないだろ。クビになんないかな？」

「大丈夫ですよ。クビになったら、私が何とかします」

その自信はどこからくるのだろうか。誠はずっとびくびくしていた。

誠の家から数十分で、瞳の自宅へと着いた。目の前には大きな豪邸が建っていた。

何百坪という大豪邸で、中庭に噴水まである。その先にそびえ立つ

お屋敷は左右対称のシンメトリーで、お金持ちという雰囲気を出していた。

誠は何回か訪れたことがあるが、何回見ても驚きを隠せなかった。

瞳はインターフォンを押し「私」というと門が自動で開いた。

「さ、いっ」

瞳が中に足を踏み入れる。誠は言われたとおり、後ろを着いていた。

屋敷に入ると、お年を感じさせる執事らしき人が駆け寄ってきて、胸に手を添えながら頭を下げた。

「お帰りなさいませ、瞳様。聖司様がお待ちです」

瞳は「やっぱり」と小さく漏らす。そして後ろを振り返り、誠を見た。

「ずっと私のそばにいてね。……何があっても」

瞳の目には冗談ではない力が入っていた。誠は覚悟を決めるとコクツとうなずいた。

「それじゃ、いきましょ……」

瞳は奥へと歩き出した。

瞳の父親の聖司は三階の奥の部屋にいる。自室でもあり、仕事部

屋でもある。

瞳はその前で立ち止まると、軽くノックをした。

コンコン

「誰だ？」

中から少し苛立ちのこもった声が聞こえた。

それに動じず、瞳は「わたし」と答えると、中に入るようにいわれた。

瞳は誠に「いくよ」と一声かけ、ドアを開けた。

中に入ると、目の前のデスクに聖司は座っていた。ずっしりと座り、剣幕な表情で二人を睨む。

それだけで誠はその場から逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。

口を開いたのは、聖司からだった。

「瞳。いったいどこに行ってたんだ。心配したんだぞ」

聖司は立ち上がると、二人の前に立つ。瞳はぎゅっと口を閉ざしていた。

聖司は誠に気づいた。

「これはこれは、清水誠くん。大きくなったね。我が社に入社おめ

でとう」

優しそうな笑顔で、聖司は誠の肩に手を置いた。

「い、いえ、僕のような出来損ないを入社していただき、本当にありがとうございます」

誠はぎこりない言葉で丁寧に頭を下げる。

「そんなにかしこまる必要も、自分を下に見る必要もないぞ。君には期待している。最初はいろいろと慣れるまで戸惑うと思うが、一生懸命頑張ったまえ」

「は、はい」

誠との挨拶が済み、そこで瞳が口を開いた。

「お父様、話があるのですが、よろしいですか？」

聖司は瞳に向き直る。

「なんだね。勉強したくないから、家庭教師も塾も必要ない？ 子供はわがままをいえいいというわけではない。親のいうことを聞いて、立派な大人に成長するべきだ」

聖司はふかふかのソファに座る。そして二人も座るようにうながした。

瞳は聖司の目の前に、誠は瞳の隣に座った。

「それもあるのですが、一つ大事な報告があります」

「ん？ なんだね」

すると、瞳が誠の腕を掴み、ぎゅっと抱きしめ寄り添ってきた。

「私、この人と結婚します」

「……え？」

誠は状況が読めず、顔をゆがめる。聖司の表情もだんだんと変わっていった。

瞳は誠の腕を抱きしめながら、じつと聖司を睨みつけていた。聖司は手すりに肘をつきながら口を開いた。

「どういうことかな、誠くん。入社を許しても、娘との結婚は許さないぞ」

「え？ あ、いや、僕にもなんだか……」

誠は頭を擦りながら苦笑いを浮かべる。瞳は動じず続ける。

「私、今誠ちゃんと付き合ってるの。結婚を前提にお付き合いしてるし、昨日だって、彼の家に泊まったわ」

瞳は堂々と話す。聖司に表情がだんだんと曇り始めた。

「それは、本当なのか？」

誠に問い掛ける。

「え、あ、はい。でも、湊も一緒ですし」

誠は愛想笑いを浮かべる。

これ以上刺激するな。本当に首が飛ぶ……。

「泊まっただけじゃないわ。夜は一緒に寝たのよ」

そこで誠の心の中で何かにひびが入った。

いつてはいけないことを……。

聖司の拳はぶるぶると震えていた。

「そういうわけだから、しばらく誠くんの家で暮らす。戻ってきて欲しいなら……あの話しは全てなかったことにして」

瞳は立ち上がると、誠の手を引っ張って、部屋から出て行った。

聖司は未だにソファに座り、じっと前を向いていた。

二人は瞳の部屋にいた。瞳はバッグに服や必要品を入れていく。

誠はベッドに座り、その様子を見ていた。

「なあ、さっきのなんだったんだよ。なんであんな嘘を？」

誠が少し苛立ちを込め訊いた。

「え？ 私たち結婚するんじゃないの？」

「そんな嘘はやめなさい」

瞳は軽く笑って謝った。

「すみません。でも、ああでもいわないと、お父さん話を聞きますから」

「だからって、結婚って……。嘘でも、湊がなんて言うか……」

「大丈夫ですよ、湊には許可を貰っていますから」

「え？ 湊はこのこと知ってたのか？」

「はい、知ってますよ。お兄さんに話す前から」

「なんだよ、それ……」

瞳は準備を終えると、バッグを持って立ちあがった。

「それじゃ、いきましようか」

「いくつて？」

「もちろん、未来の旦那様の家」

誠は重いため息を吐くと、一緒に出て行った。

屋敷を出たところで、二人は後ろを振り返った。そこには執事がいた。

「お嬢様、どちらへ？」

「うん。ちょっとした、家出つてやつかな」

「さようですか」

執事は誠に向き直った。そして丁寧に頭を下げた。

「どうか、瞳お嬢様をお願いいたします」

「え？ あ、はい……」

お嬢様が出するっていうのに、特に慌てたり引き止めたりしないんだな……。

「それじゃ、お父様によろしくね」

そういつて瞳は軽く手を振り、屋敷から出て行った。

家に戻って来ると、湊を加えた三人で話し合った。

「それで、瞳は俺をこのために利用したのか」

「利用したって、人聞きの悪いこと言わないでくださいよ」

誠はぶすつとした表情で二人を見る。湊はへらへらと笑っていた。

「俺、マジでクビかも……」

「大丈夫です。私と結婚すれば、あの財産は全部お兄さんのものです。良かったじゃないですか」

「それマジでいつてるのか？」

「どうかな」

瞳はとぼけた表情をする。誠は嘆息すると、真面目な顔で問い掛けた。

「それで、これからどうするんだ？」

「そうですね。まずは、相手の動きを見るかな。出方次第で動かないといけませんね」

「ねえ、兄さん。瞳を助けてあげてよ」

湊が本気で求めている。

「助けてやるさ。ここまで来たんだし。瞳にはいろいろとお世話になったしな」

「さすが、お兄さん。いざというときは頼りになりますね」

「ま、瞳のお父さんのことだ。明日の朝とかには、もしかしたらガードマンやらSPやらが連れに来るかもしれないな。その出方次第

で、俺らも動くか」

「そうですね。それじゃ、それまでよろしくお願いします」

こうして瞳が家に上がりこんだが、どこか、瞳にはまだ隠し事がありそうな気がしていた。

瞳編 part3：手段

瞳があのでつかい屋敷から家を飛び出し一日が経った。

朝食を食べた後、瞳はさつきから居間の窓から外の様子を窺う。

誠の家の前には、黒いスーツを着た怪しい人たちがうろつろしている。

片手にはトランシーバーが握られ、数十人の仲間と連絡を取り合っている。

さすがは瞳のお父さん。お金持ちだけあって、あれほどの人目を引く輩を雇うお金があるとは、さすがである。

「ああ、こりやさつさと帰った方が良くないか？ もう逃げ場がないって感じ」

誠も瞳と同じように外の様子を眺める。

近所の人も怪しがって避けて通っている。本当に迷惑極まりない。

「なんか、ちょっと怖いね。危なくないよね？」

湊が少し怯えながら外を見る。

「瞳、ここは謝った方がいいんじゃないか？」

「バカなこといわないで。絶対帰らないんだから」

瞳が強く答える。誠は嘆息してソファに座った。

誠が離れたことを確信すると、湊は小声でまだじっと外を睨む瞳に囁いた。

「ねえ、瞳。あの話なんだけど、お父さんと話し合って解決できないかな？」

同じように瞳も小声で答えた。

「無理よ。うちのお父様は頑固なのよ。それも超が着くほどね。一度決めたことはどんなことがあっても曲げないの。それが……私のことでもね」

瞳は悲しげな目をしながら外に向き直る。

「瞳……」

それから少ししてあちらから動きがあった。

昼食を食べているとき、家のインターフォンが鳴った。

「俺がいく」

誠は立ち上がると居間を出て玄関に向かう。

「はい、どちら様？」

玄関の戸を開けると、そこにはやはりあの黒服の男が立っていた。

サングラスをかけ、誠を見下してくる。

その姿に誠は少し怖気づきながら対応した。

「あ、あの、何か……？」

「……こちらに瞳お嬢様がご在宅だと思っただが」

「え、ああ、その……多分、いません」

そこでサングラス越しから男がぎょっと睨みつける。

誠の体がびくつと怖がり、嫌な汗が流れる。

「嘘を吐くな。さっき窓から確認した」

なら聞く必要ないだろ。

「瞳お嬢様をこちらに渡してもらおうか」

その言葉に誠は気を引き締めた。

「すみませんが、それはできません。本人が嫌がっていますので」

男はじっと睨みつけてくる。しかし、誠は動じず睨み返していた。

「どうしてもか」

「ああ」

すると、男は後ろからスーツケースを取り出し、誠の前に置いた。

「取引だ。一億ある」

「一億!？」

その膨大な金額に誠は驚嘆な声を上げた。

「これで瞳お嬢様と交換だ。悪い話ではないだろ」

誠は考える。

こんな金額、喉から手が出るほど欲しい。すぐに取引成立となる。握手を交わし、お互い喜んでいるだろう。

だが、誠は揺らぐ気持ちを抑え、平静を保った。

「すみませんが、お引取りください」

誠の言葉に男は嘆息する。そして忠告した。

「明日また来る。今日のところは諦める。しかし、今度断るようなら……強行突破も考えなければならぬ」

「そうですか」

男は一礼すると、スーツケースを持っていってしまった。

置いてくれればよかったのに……。

誠は少しガツクリしながら居間に戻ってきた。

「ただいま……」

「あ、お兄さん。ど、どうでした？」

瞳が少し動揺しながら問い掛ける。誠は席に着くと正直に話した。

「金をつまれたけど断った。明日も来るけど、断ったら強行突破をするって」

「そ、そうですか……」

瞳は肩を落としてうつむく。

「ね、兄さん。何とかならないかな。解決できないかな」

「一番良いのは、二人が話し合うことだ。それが一番の解決方法だと思う」

誠は瞳に向き直った。

「瞳、もう一度話し合ってみないか？ 直接会うのが嫌なら電話でもいい。賭けてみよう」

誠の真剣さが伝わり、瞳はコクツとうなずいた。

瞳は客間の方へ移動し、一人になると電話をかけた。どうやら聞かせたくないらしい。

誠と湊は居間に残り、障子越しから瞳を見守っていた。

「瞳、大丈夫かな……」

「これで解決できればいいけどな。無理なら、また考えないと」

数分して障子が開き、瞳が居間に戻ってきた。表情は落ち込んでいる。見ただけで結果がわかってしまう。

「瞳……どうだった？」

湊の質問に、瞳は首を振って答えた。

「そっか……。瞳、そしたらずっとここに居ていいよ。私たちが絶対を守るから」

「湊……」

「大丈夫だよ、瞳。心配しないで。きつと助けてあげる。お父さんが諦めるまで、ここにいればいいんだよ」

「う、うん。……ありがとう」

瞳は申し訳無さそうに礼を言う。

そこで誠が腕を組みながら口を挟んだ。

「なあ、瞳。そんなに勉強をすることと部活を辞めるのが嫌なのかな？」

「え？」

瞳は少し意外そうな表情をしながら顔を上げた。誠は続ける。

「それって、ただのわがままじゃないのか？ 親のいうことを聞かない子供のようにしか見えないんだけど」

「ちょっと、兄さん。止めてよ、守るって約束したじゃない」

湊が割って入る。

「ああ、守ってやるさ。でも、勉強を頑張れって言っているのは親だろ。将来立派な大人になるために、親がそう考えて言ってるんじゃないか。それをただ駄々こねて家出するのはわがままといえないか？」

そこで湊は癇癪を起こした。

「兄さん、いい加減にしてよ！ 瞳だって、こういうことをするのはつらいんだよ。でも——」

「それでも、俺にはわがままにしか聞こえない。本当に嫌なら、逃げたりせず、立ち向かえばいいじゃないか」

「兄さん！」

「湊……もついいよ」

「え？」

瞳がうつむきながら口を開く。湊は反論するのを止め、そつと瞳を見る。

瞳はそのまま誠の方を向き、深く頭を下げた。

「すみません。私のわがままでした。迷惑かけてすみません」

「瞳……」

「もう、帰ります。ご迷惑をおかけしました」

瞳はそつと顔を上げた。その目には涙が溜まり、悔しそうに拳を握っていた。そして涙を拭きながら走って出て行ってしまった。

「あつ、瞳……」

湊は追いかけようとするが、玄関の戸が閉まり、立ち止まった。そしてすぐに誠の方に向き直った。

「兄さん、ひどいよ！　そこまで言わなくていいじゃない！」

「でも、これは俺らが手を出したらいけないことだろ。親子の問題なんだ。他人が口出ししたら――」

「でも、友達が困ってるんだよ。助けを求めているんだよ！　それなら助けてあげるでしょ？　前の兄さんだったらそんなことしなかった。絶対助けたよ……。兄さん、最低だよ！」

湊は居間を飛び出し、部屋に閉じこもってしまった。

「湊……」

誠は深刻な表情になると、ソファにドサツと座った。

そのとき、外で騒ぎが起こった。外にいた何人かの男がうまく聞き取れない声をあげ、その場から走っていく。

おそらく、瞳を見つけたのだろう。

声が聞こえなくなると、誠は嘆息して額に手を当てた。

「俺、間違ったことしたかな……」

瞳編 part 4：親友

瞳が出て行き数時間が経った。

辺りは暗くなり始め、だんだんと太陽が沈んでいく。

誠はソファからそっと起き出した。

いつのまにか横になり寝ていたようだ。時計を確認すると四時間くらい過ぎている。

目を擦ったまま、そっと辺りを見回したが、湊の姿が見当たらない。

まだ自分の部屋に閉じこもっているのだろうか。

誠はだるくなった腰を上げ、少し後ろめたさがあったが居間を後にした。

二階に上がり、自室の向かい側の湊の部屋の前に立つ。一瞬躊躇ったが、そっとノックした。

「湊、いるか？」

中からの反応はない。誠はそっとドアノブを捻り、中の様子を覗いた。

「湊？」

湊はベッドの上でうつ伏せになりながら寝ていた。

手元のシーツは皺ができており、枕は目元の部分だけ濡れている。

誠は風邪を引かないようにそつと毛布をかけてやった。そして隣に腰掛け、そつと頭を撫でる。

湊に、昔の自分なら助けた、と言われたことを思い出した。自分は変わってしまったのだろうか。

でも、これだけは仕方ないはずだ。親子の問題であり、他者が口出ししてもどうにもならない。

友達である瞳には、助けを求めているのなら、自分ができることなら何でもする。でも、こればかりはどうしようもなかった。

誠はそつと湊の顔を覗いた。

確かに湊には悪いことはした。親友であり、自分たちを助けてくれた恩人に対し、きつい対応をしてしまったと思う。

でも、本当に瞳のことを思うなら、これが正しい答えだと、自分はどう思う。

そのとき湊の目がゆっくりと開き、むくつと起き出した。

「あれ？ 兄さん……」

「おはよ、湊。つつても、まだ夕方だけだな」

湊は時間を確認し、そして誠に向き直った。

「……兄さん、さっきは……ごめんなさい。ちょっと、言い過ぎた……」

誠はそつと湊の肩に手を置き、自分に寄り添わせた。

「いや、いいよ。俺の方こそ、少しきつかったかもしれない。瞳のことを考えれば、もう少し優しくできたかもな」

湊はそつと誠の胸に顔をうずめた。そして服をぎゅっと握り締める。

「湊？」

「……兄さん。兄さんなら、瞳のためにどこまでやれる？」

「え？」

「私の親友のためなら、どんなことでもする？」

「どんなことって言われても……。ま、できることならやるさ。それも瞳なら、尚更な」

その答えに、湊はコクツとうなずいた。

「兄さんには話してなかったよね。……私と、瞳の出会い」

「え？」

湊はそつと思ひ出しながら語り始めた。

二人が始めて会ったのは、桜楼学園中等部一年生のころだ。

湊は誠と同じ学園に進学したく受験し、余裕の成績で合格できた。

しかし、ここには小学校で仲良くしていた友人はおるか、運悪くクラスには同じ小学校出身の生徒は一人もいなかった。

入学式が終わり、教室にいる間、湊は誰とも話さず、ずっと机に座り、ぼつんとしていた。

できれば、誰かと話をして友達を作りたい。でも、そんな勇氣はなかった。

引っ込み思案で、上がり症で、人見知りの激しい自分には、到底無理なことだった。

誠に頼りたいが、学年が一つ上で、知らない先輩に会うことになるのは怖い。会いに行く手段はなく、お昼を一緒にするくらいだった。

それから一週間くらいはずっと一人で、なかなか友達はできなかった。

すでにみんな友達ができ、自分に合ったグループができ始めているが、未だに自分は誰一人として会話をしていなかった。

昼休みは誠と一緒に食べているが、誠は実は他の人に誘われても

断り、わざわざ一緒にいてくれているのだ。

少し申し訳なかったが、今の自分には優しい兄しかおらず、この時間だけは安心できた。

そしてクラスでのことを聞いてくれて、友達を作るアドバイスもしてくれた。

「そんなときは、一発芸でもして、みんなに印象づければいいぞ。漫才とかギャグとか」

「そ、そんなことできないよ」

湊が激しく手を振って否定する。

「それなら、わざと朝食抜いて、授業中に腹を鳴らすとか」

「は、恥ずかしいよ」

湊の顔が真っ赤になっていく。

「じゃあ、最後の手段。先生に当てられたら、『先生、そこちゃうよ。もっとこうっしょ。やってられんわ』みたいにやればバツチりだ。みんな爆笑。湊にも友達ができて一件落着！」

「真面目に考えてよ」

湊の目に涙が浮かび始めていた。

「うん。じゃあ、これだな。話し掛けられたら、友達になって、

「と見え。これで友達だ」

「……うん。それなら、なんとかできそう……」

しかし、その勇気も出せず、進展はなかった。

このままでは、自分は一人になってしまう。そんな恐怖に陥り、ますます縮こまってしまっていた。

だが、一人の女子生徒に、湊は出会った。

それは授業中のことだった。

湊は学校にいても友達と会話をせず、休み時間は予習ばかりしている。幾らか勉強は優秀になっており、板書してある問題は何でもできた。

そんなとき、隣の女子生徒が問題を当てられた。

「麻生瞳さん。この問題を答えてください」

「え？ あ、はい！」

当てられた女子生徒はガタツと席を立った。

湊はチラッと隣の生徒を見た。

少し、いやけっこう背の低い女の子で、長い髪をポニーテールでまとめ、とても可愛い生徒がそこにいた。

少し慌てた様子で教科書から答えを探すが、なかなか見つからないようだ。

「麻生さん。この問題わかりませんか？」

「あ、いえ、ちょっと待ってください」

麻生さん？

湊はその名前を覚えてしまった。とても印象的で、話しやすそうで、友達になりたいと思った。

でも、麻生さんとは、噂では確かこの街で一番というほどのお金持ちと聞いたことがある。

お嬢様らしく、とても自分と友達なんかにはなれないと思い、何度も話し掛けようとしたが諦めたことを覚えている。

「え、えと、ええと……」

瞳は頭を抱える。そのとき、湊はそつとノートの端に答えを書き、瞳が見えるようにずらした。

そのとき、瞳が小さく声を上げ、すぐにその答えを言った。

そしてふつと息を吐いて席に着くと、チラッとこつちを向き、ノートに走り書きをした。

『ありがとう』

それを見た湊は、そつと顔を上げて瞳を見る。

湊を見て、瞳は可愛らしくニコツと微笑んだ。

その笑顔に癒され、湊も心から笑顔を見せる。

このときが、恐怖をなくした瞬間だった。

しかし、仲良くなったと思っただが、瞳と会話をする機会はなかった。

休み時間になっても、瞳は他の友達と話し、自分とはまだ一度もしていない。

湊はまた一人になった。

ある日の放課後。

湊は自宅に帰る途中だった。

「あつ」

湊の目の前には大きなリムジンが停まっていた。黒く光る光沢が眩しかった。

その隣には、あの麻生瞳がいた。運転手と何かもめているようだ。

「だから、お迎えはいらないって言うてるでしょ！ お父様の指示でもしなくていいの！」

「しかし、万が一瞳お嬢様の身に何かあったら……」

「いいの！ 子供扱いしないで！ 一人で帰れるの！」

「しかし、今日だけは、お願いします」

「いや！ これから用事があるの！」

「用事、とは何ですか？」

「そ、それは……」

瞳が困った表情で考え込む。そのとき湊と目が合った。

「あつ」

「え？」

すると、瞳は全力で走って湊の下に行き手を掴んだ。

「私、今からこの子と遊ぶの。それが用事だから、もう帰って」

そういつて瞳は湊を強引に連れてその場から離れていった。

一緒に歩き、あの運転手から逃れると、瞳から話し掛けてきた。

「ごめんね、急に」

「う、ううん。いいよ……」

「そういえば、まだ自己紹介してなかったね。私は麻生瞳っていうの。瞳でいいよ。ていうか、瞳って呼んで」

麻生という名前は嫌いなのだろうか。瞳という部分を強調していた。

「わ、私は、し、清水……湊……」

「湊ね。かわいい名前ね。これからよろしくね」

「う、うん。その……あのね……」

「ん？ なに？」

瞳が湊の顔を覗いてくる。湊は少し顔を赤くしながら、勇気を出して言った。

「と……」

「と？」

「……友達に、なってくれない……かな？」

湊はぎゅっと目を瞑り返事を待つ。そのとき、瞳が湊の手を握ってきた。

「え？」

湊はきょとんとしながら瞳を見る。瞳は湊を見ながらニコツと笑みを浮かべた。

「当たり前じゃない。これから、ずっと一緒だよ」

「……うん！」

湊は元気良く、そして嬉しい気持ちを溢れ出しながらうなずいた。

「それじゃ、私たち親友だね」

「親友？」

湊は少し疑問になりながら聞き返す。

「そう。私たちは親友。一番の友達だからね」

「うん。ありがとう」

二人は笑い合った。出会えたこと、巡り合えたこと、勇気を出せたことが生んだ、最高の親友を手に入れた瞬間だった。

それから、瞳はずっと湊と一緒にだった。

休み時間になっても、親しかった友達の下には行かず、湊と二人だけで話し、昼食も一緒に食べ、登下校も一緒だった。

誠にも紹介し、ずっと一緒にいてくれ、と言われていた。その言葉に瞳ははつきりとうなずく。

そのときは、本当に嬉しかった。

話し終え、湊はそつと目じりに浮かんだ涙を拭いた。

「もし瞳に出会えてなかったら、私はずっと一人だった……。こうして学校に行けるのも、元気でいられるのも、兄さんと付き合っていることも、全部瞳のおかげだと思ってる……。私を助けてくれた、たった一人の最高の親友なの……。だから、どうしても助けたかった……。瞳の力になりたかった！」

「湊……」

湊は手で顔を覆って続けた。

「今、瞳はすごく困ってるの……。助けを求めているの……。少しでも、恩返しをしたかった……。私は、私は……」

湊は嗚咽を漏らしながら言った。

「……親友を、助きたい……」

誠は湊を引き寄せ、すつと優しく包み込むように抱きしめた。

「わかったよ、湊。……俺が、瞳を助けてやる。恋人の親友は自分も親友だ。親友が困ってるなら、助けてやらないとな」

「兄さん……」

「まかせろ。絶対、安心させて、瞳を笑わせてやるから」

「うん……」

すると、湊はそつと誠を離し、見つめながら口を開いた。

「ねえ、兄さん。よく聞いて。本当は、瞳には口止めされてたけど……もう言うね。実はね、瞳が嫌がっているのは、塾でも、家庭教師でも、部活のことでもないの」

「え？ どういうことだよ」

「本当はね……」

湊の口から誠は重大なことを聞いた。

そして自分が軽率だったことに腹が立った。

あいつは、そんなこと一言も言っていなかったのに……。

誠は立ち上がった。そして自分の部屋で仕度をする、闇の中を走り出した。

瞳編 part 5：逃走

月が照らす暗い中、瞳は一人で歩き続けていた。

さつきから父親が雇った輩に出くわしたり、捕まりそうになったが、何とか撒くことができた。

しかし、その代償で疲労は溜まり、息が上がってもう走れない。

「はぁ……はぁ……」

瞳は壁に手を着いて休息を摂る。

すでに日が暮れているのに安らげる場所が見つからない。

宿を探すにも、適当に逃げ回っていたせいで、ここがどこだか検討もつかない。

電柱の蛍光灯が不気味に照らし、闇の中に包まれた居心地だ。

「どうしよう……」

さすがにこの状況に不安が募ってきた。

行くあてもなく、寝床も確保できず、食事も摂っておらず、正直身体的にも精神的にもまいってきている。

瞳はその場に座り込むと、体育座りをして、顔を覆い隠した。

もう限界だった。それに寂しさが自分を襲った。帰りたいたも思ってきた。

やはり、一人では何もできなかった……。

「湊……」

湊の下に行きたいとこれほど願ったことはなかった。

いつも一緒に、楽しく笑って、癒されて、ずっと仲良くしていた。

湊のおかげで、どれほど救われたことか。数えたら切りが無い。こんな状況なら、湊はすぐに助けてくれるだろう。

そして、その優しい兄も……。

静寂に包まれた空間の中で、自分の息遣いが嫌というほど耳に響く。

それが不気味に感じ、だんだんと心臓の音が大きく、そしてはつきりと聞こえ出した。

そのとき、瞳のポケットから携帯が鳴りだした。

一瞬体をびくつかせた瞳は、そっと取り出し耳元にやった。

「も、もしもし……」

「あ、瞳か？ 俺だ、誠だ」

「え？……お兄さん？」

「今どこにいるんだ？ どちらのホテルか？」

「う、うん。よくわからないけど、今路上に座ってます……」

「わかった。今からそこに行くから、ちょっと待ってる」

「は、はい……」

瞳は周辺の目印や目に付きそうな物をあげ、誠は場所を理解すると携帯を切った。

そのあとはまた静寂が戻った。

でも、瞳はさっきまで抱いていた恐怖も寂しさも消えていた。

今から誠が来る。それだけで、もう安心感で溢れていた。

いつもだらしく、ぐうたらで、どこか気の抜けた先輩だが、いざとなると発揮するその逞しさに、つい期待して頼ってしまう。

それほど、自分は誠という男に信頼を置いていた。

「お兄さん……」

ぼつりと呟いてみる。そのときだ。

「何だよ」

ハツとした瞳は顔を上げる。そこには手に膝を着いてこつちを見ている誠がいた。

「まったく、こんなところにいやがって。ほら、いつまでもそこにいたら風邪引くぞ」

そういつて誠はそつと手を差し出す。その手を掴み、呆然としていた瞳は起き上がった。

「あ、あの、お兄さん。どうして……」

「ああ、説明はあと。それより、まずはここから逃げた方がいい。さつき怪しいやつらがいたからな」

誠はそういつと歩き出す。しかし、瞳はまだそこに突っ立っていた。

「ん？　おい、どうしたんだ。早く来いよ」

「え？　あ、はい」

瞳は走って誠に追いつき、隣を歩いていった。

二人は何とか誰にも見つからず駅前に来た。

辺りを見渡すがこの時間に人は誰もいない。駅員が掃除をしているだけだった。

「お兄さん。駅に来てどうするんですか？」

瞳が後ろから問いかける。誠は影から誰かいないかを警戒しながら答えた。

「ん、決まってるだろ。この街を出るんだ」

「え？」

「やるからには本気で逃げるぞ。捕まってたまるか」

「で、でも、いいんですか？」

「何が？」

「だって、迷惑じゃ——」

「気にすんな。俺たち友達だろ。友達が困ってんのに、放っておくバカはいないだろ」

瞳はジト目で睨んだ。

「……さっきまではあんなこと言ったのに」

「ん？　なんだ？」

誠がこつちを振り向くと、パツと笑顔に戻った。

「あ、いえ、ありがとうございます」

「よし、それじゃ、行くぞ」

二人はこそこそ歩きながら駅に入り、隣町行きの切符を買った、中のプラスチック製のベンチに座った。

そして数十分して列車が到着し、二人は向かい合って席に座った。

遅い時間なので、中は二人だけだった。貸し切りのように感じられ、少し優越感に浸った。

それから数十分して、隣町に到着。

ここは誠たちが住んでいる街と違い、田舎のような感じで、周りは自然で囲まれている。

でも、そこから少し歩けば、ホテルくらいは見つかる。

「一先ず、もう遅いから、どこかのホテルに泊まるか」

「そうですね。それじゃ、行きましょ」

そこで誠は頬を掻きながら言った。

「ああ、その、瞳さん。申し訳ないのだが、その……ホテル代、貸してくれないでしょうか？」

「え？」

「さっきの切符代で、もう残り少なくて……」

そこで瞳はクスクスと笑った。

「お兄さんらしいですね。いいですよ。カードで払いますから」

「ありがとう。恩に着る」

そして二人は楽しそうに笑いながら、明るく歩いていった。

しかし、二人は困難に巻き込まれた。

「カードが使えない？」

瞳が怪訝そうな顔でホテルマンに問い掛ける。

「はい。このカードは只今使用不可となっています。申し訳ありませんが」

「じゃ、他のカードは？」

「全てダメでした……」

そこで瞳はぎゅっと拳を握る。その様子を見て、誠は瞳の肩に手を置いた。

「……仕方ないよ、瞳。ほら、行こうぜ」

瞳は悔しそうにしながら、とぼとぼとホテルから出て行った。

二人は公園のベンチで、コンビニで買ったおにぎりやパンを食べていた。

たくさん買いたかったが、誠のお金は底が着き、瞳はほとんどカ-

ドで払っており、硬貨や札はあまりなかった。

「すみません、お兄さん。お父様のせいで……」

カードを使用不可にしたのは瞳の父親のせいだろう。使えなくして、遠くにいけなくしたに違いない。

「いいよ、別に。あんな高級ホテルより、公園で野宿の方がドキドキするぜ」

誠はベンチに横になって仰向けになる。

「ふふ。そうですね。お兄さんらしいです」

瞳も一緒になって仰向けになる。

目の前の夜空には幾千もの星が輝いていた。キラキラと煌き、まるで宝石のように瞬いていた。

「綺麗ですね。こんなの、初めて見ました……」

「ああ、本当に……」

すると、瞳はぶるつと体を震わせ、肩を擦った。

「寒いのか？」

「いえ、大丈夫です」

瞳は強がって笑顔を見せる。

無理も無い。今の季節は春といってもまだ寒い時期だ。昼は温かいが、夜はさすがに堪える。

誠は起き上がると、辺りを見渡す。すると、草原の中にダンボールを見つけた。

「瞳、場所移動だ」

「え？」

二人はそのダンボールの上に横になった。誠は上着を脱ぐと、瞳の上に被せた。

「え、お兄さんは寒くないんですか？」

「俺は熱いからいいよ。いやゝ、涼しくて丁度いい」

しかし、誠はおもいつきりくしゃみをした。すると、瞳はそっと誠の上着を誠にも被せ、そしてぎゅっとくっついて来た。

「こうすれば少しは温かいですね」

「え？ あ、ああ、そうだな……」

誠は少し瞳から顔を背けた。

自分には湊がいるが、やはり多少は照れてしまう。ぎゅっと腕を掴まれ、温もりを感じ、顔が熱くなる。

瞳も同じように、頬を紅潮させ、少しドキドキしていた。

「あ、あの、お兄さん……」

「な、なに？」

「……どうして、助けに来たんですか？」

「え？」

「これは親子の問題って言いましたよね。だから、もう助けてくれないと思ひまして……」

誠は小さく笑って答えた。

「湊がな、親友を助けてって」

「え？」

「自分は親友に救われた。何度も助けられた。感謝をしてもしきれないくらい。だから、今度は自分が恩返しをしたいって。でも、自分にそんな力がなく、ただ話を聞いたり、祈るくらいしかできない。だから、代わりに助けてあげてって」

「湊がそんなことを……」

「だから、俺も全力でお前を助ける。もちろん、俺もお前を親友だと思ってるぞ」

「……ありがとうございます」

瞳はぎゅっと手に力を込め、誠の腕を握り締める。

すごく嬉しく、そして安心でき、涙が出るほど救われた気持ちになった。

こんなにも頼りになり、心配してくれる親友たちがいて、本当に幸せだった。

瞳は目じりを拭くと、そっと口を開いた。

「お兄さん。まだ話してませんでした。本当のことを言います」

誠は黙ったまま耳を傾けた。

「私が本当に嫌なのは、塾でも、家庭教師でも、部活のことでもないんです。本当は……」

瞳はふっと一息吐き、そして意を決して行った。

「私……政略結婚させられそうなんです」

瞳は手に込める力を強くし、顔うずめながら続けた。

「今お父さんの会社の経営が厳しいそうで、早く対処しないと危ない状況だそうです。そこで、お父さんと親密な会社の社長の子供と結婚させ、規模をもっと大きくしようと考えたそうです」

瞳は涙を流し、嗚咽を漏らした。

「私は、それが嫌で逃げ出したんです。好きでもない、よく知らない、そんな人が結婚相手なんて、考えられなくて……。自分の人生は、ここで全て終わって、何もかも失いそうで……。すごく怖くて……。だから、必死に抵抗したんですが……」

瞳は少し口調を強めた。

「今……湊とお兄さんが羨ましいです……。二人は愛し合って……。結婚の約束までして……。すごく仲良しで……。本当に、私の理想とそっくりで……。ずっと、私は二人に憧れて……。私も、いつかこんな恋愛を……。したいって思っていました……。政略結婚の話聞いたときは、すごく落ち込みました……。もう、今まで積み上げてきたものが……。壊れていきそうで……」

瞳は唇を噛みながら、力いっぱい誠の服を掴んだ。

「私、ずっと嫌でした……。麻生という名前が、すごく憎かったです……。周りからはお金持ちだから羨ましいとか言われますが……。現実には厳しく、礼儀作法や伝統、麻生家の仕来りなど、毎日この名前に苦しまれてきました……。でも、私も一生懸命頑張りました……。したいことも、友達と遊ぶこともあまりできず……。習い事やお稽古に精を出しました。いつか、言うとおりにすれば幸せになれると……。信じていたから……。でも、最後は知らない人に嫁いで地獄を味わうなんて……。私は、もっと普通に過ごしたかった……。もっと、みんなとたくさんの思い出を作りたいかった！」

瞳は溢れ出てくる涙を流しながら、悔しそうに目を瞑った。

「もう……。嫌です……。もう苦しみたくない……。もうお金も、名誉も、地位もいらない！ 私が欲しいのは……。大好きな友達だけで

す……」

瞳は顔をうずめると声を上げて泣き出した。

誠は瞳の方に振り向くと、ただ黙って抱きしめることしかできなかった。

瞳がここまで取り乱すところを見たことがなかった。

いつも元気で、無邪気に笑って、楽しそうに一緒にいた瞳が、こんなになるまで追い詰められていたなんて……。

あんなに強い瞳が、初めて打ち明かした本音。

瞳の気持ちが痛いほど伝わり、誠はどうにかして助けたいと思った。

そんな苦しみを味わった人たちを、何人も見てきたから……。

誠はふと笑みを浮かべ、優しく頭を撫でて癒した。

「瞳……。大丈夫だから。もう、苦しむ必要はない。もう、お前は一人じゃないんだから……」

「……はい」

「結婚のことは湊から聞いた。俺の方こそ、無責任なこと言って、追い出して悪かったな」

「いえ、そんな……」

「もう大丈夫だから。心配するな。もう泣く必要はないから。……
今はゆっくりと休め」

「……はい……」

瞳は目を閉じ、安らかに、その温もりを感じながら眠った。

何が大丈夫で、心配する必要がないのかわからないが、その言葉は
どこことなく力を感じ、嫌でも安心感を与えた。

無理なことが、本当に解決できそうで、心から安堵できた。

湊は…… 本当に素敵な兄と恋人を手に入れた。

誠は瞳を包みながら、考え込んでいた。

瞳は思ったより華奢で、本当に小さな体をしていた。

それでも、内に秘めている心はとてつもなく大きく、そして優しさに溢れていた。

愚痴もこぼさず、周りに迷惑をかけない瞳が、初めて自分たちを頼った。

それほど追い込まれ、自分の限界を感じていたのだろう。

それは嬉しいことだった。それほど自分たちを信頼してくれている証なのだ。

その期待に、答えてあげたいと思った。

誠は決意した。

この首が飛んでも、瞳だけは守ろうと。どんな手を使っても、瞳の父親の想い通りにはさせない。

たとえば、湊を裏切ることになっても……。

瞳編 part 6：理解

夜が明けると、二人は再び始発の電車に乗り、元の街に戻って来た。

本当なら、もつと遠いところに逃げたかったのだが、金銭問題的に無理が生じ、そして瞳が自分で言い出したのだ。

逃げずに、正面から立ち向かいたいと――。

二人は瞳の屋敷に帰る途中、SP達に捕まり、逃げるつもりはなかったが、強制的に屋敷の中へと連れ込まれた。

誠は苛立っていたが、瞳が首を振り、怒りを抑えた。

二人はすぐに瞳の父親である聖司の部屋へと連行され、誠は後ろで手首をSPたちに抑えられながら立っていた。

「お父様……」

瞳が口を開くと、窓から外を眺めていた聖司は、ゆっくりと振り返った。その目は鋭く、異様な怒りを込められていた。

「瞳……。自分がしたことをわかっているのか？ お前は麻生家の名に泥を塗ったんだぞ……。お前はこのわしに恥をかかせたんだ！」

聖司の迫力ある怒声にその場にいた全員が体を硬直させた。

それでも、瞳は負けずと反論した。

「そのことについては、本当に申し訳なく思ってます……。でも、私は嫌なのです。会社の経営が苦しいことはわかります。でも……。好きでもない人のところに嫁ぐのは我慢できません！」

瞳も心から自分の意見をぶつけた。瞳の誠意に誠は力強くうなずく。

そのとき、聖司は立ち上がると誠の前に立った。

「誠くん。君が瞳をそそのかせたのかな？」

「え？」

「いろいろ支援し、我が社にも君を入社させたにも関わらず、恩を仇で返すとはな」

そのとき、気づけば聖司は拳を握りおもいきり振るっていた。

その大きな拳は誠の頬に直撃し、誠は勢い良く床を転げ回った。

「ぐっ……」

「お兄さん!!」

誠は床にくったりと倒れる。瞳はすぐに駆け寄り、誠を抱いてあげた。

「お兄さん、大丈夫ですか？ お兄さん！」

誠の口からは血がしたり、痛々しさを物語っていた。

誠は苦痛の表情でコクツとうなずいた。

「……あ、ああ……大丈夫だ……」

「お兄さん……」

瞳の目に涙が浮かぶ。そしてぎゅっと抱きしめ、胸の中で泣いた。

「瞳……。そんなクズからすぐに離れなさい。バカが移る。お前はわしの言うことを聞いていれば幸せになるんだ。相手の方はすでに了承してくださっているんだぞ。こっちから申し込んだのに、今さら白紙に戻せなど、失礼にも程がある。さ、そんなバカは放っておいて、こっちに——」

「お兄さんをバカにしないでよ！」

瞳の怒りに聖司は黙り込む。

「何も知らないくせに……。お兄さんのこと、何も知らないくせに……勝手なこといわないでよ！ お兄さんは、お父様が考えているより、ずっと優しく、強くて、誰よりも私のことを考えてた……。私、ずっと好きだったんだから！」

瞳の言葉に、誠は呆然としていた。

「瞳、お前……」

「これ以上私の好きな人を侮辱したら……たとえお父様でも許さないから！」

そこで聖司は大声を上げて笑い出した。

「何をバカなこと言ってるんだ、瞳。そいつを見てみる。どこをどう見れば立派な人間に見える？ 一人じゃ生きていけん、コネがなくては満足に就職もできん、学校は平気でサボる、そんな人間のクズの、どこに好意を寄せるところがあるというのだ」

「お兄さんをバカにしないで！ お父様なんかより、ずっと立派でかつこよくて、優しくて……誰にも負けない思いやりがあるんだから！」

「ふん。そんなことはどうでもいい。もうそんな奴に用はない。さ、早くこっちに来るんだ」

瞳は歯を食いしばりながら、キツと鋭い目つきで睨みつけた。

「これ以上お兄さんをバカにするなら……ここで死んでやる！」

瞳は聖司の机の引き出しからハサミを取り出すと自分の喉元に押しやった。

聖司やSPたちに緊張が走った。

「瞳！ バカなことはやめなさい！ それをこっちに渡すんだ！」

「だったら謝って！ お兄さんをバカにしたことを謝ってよ！」

「くっ！ そんな必要あるか。さ、早く渡すんだ！」

「だったら私は――」

「瞳……」

誠はゆっくりと起き上がると、瞳の手からハサミを引取った。そしてそれを遠くに放り投げる。

「お兄さん……」

「落ち着け、瞳。こんなことをするために戻ってきたんじゃないだろ」

「お兄さん……。でも……」

「俺なら平気だから。自分でもバカだってわかってるし。それよりも、俺は瞳が傷付くところを見たくない。お父さんに言いたいことを、ちゃんと言っただ」

誠は優しく瞳の頭を撫でる。

「……はい」

瞳は聖司に向き直ると、頭を下げてもう一度言った。

「お願いします。結婚の話はなかったことにしてください。私は、まだ誰とも結婚したくないです。……どうか、お願いします」

すると、誠も一緒になつて頭を下げた。

「俺からも、お願いします。結婚は、そんなことのためにあるんじゃないんです。もつと、幸せになるためにあると思うんです。そのことを、僕は瞳に教わりました。それを教えてくれた瞳を、不幸にしたいくないんです。お願いします！」

二人の姿に聖司は黙り込む。

すると、ドアが開き、外から一人の美しい女性が入ってきた。その素顔は、瞳にそっくりだった。

「あなた。その辺で……」

「美鈴……」
みすず

「お母さん……」

瞳がそつと顔を上げて呟く。

紫色の着物に、サラツとした黒髪、煌く肌をした美鈴はふと笑みを浮かべ、聖司に向き直った。

「聖司さん、大人げないわよ。子供に手を上げるなんて」

「し、しかしだな——」

「そこまでいうなら、私はあなたと離婚してここから出て行きますよ」

美鈴は目を細めて唇を緩ませる。

「うつ……」

その言葉で聖司は口を閉ざした。

美鈴はそつと二人に近寄ってきた。

「瞳……」

「お母さん……」

美鈴はそつと瞳を抱きしめた。

「瞳、もういいのよ。ごめんね、こんなことになって。お母さんがもつとしっかりすればいいんだけど」

「お母さん……」

瞳は美鈴の腕の中で涙を流し、ぎゅっと抱きしめた。

美鈴は瞳の頭を撫でながら、未だに頭を下げている誠に向き直った。

「誠さんも、顔を上げて。本当にごめんなさいね」

誠は少し戸惑いながら、そつと顔を上げ、瞳の母親を直視する。

「誠さんにはいろいろ迷惑をかけたわね。いつかお礼をするわ」

「いえ、俺は別に……」

「それと、ありがとう」

「え？」

瞳の母親は柔らかに微笑んで見つめた。

「こんなにも瞳を思ってくれる友人は初めて見たわ。本当に、心からお礼を申し上げます」

「い、いえ、俺なんて、そんな……」

美鈴はゆつくりと首を振った。

「いいえ、あなたは本当によくやってくれたわ。これからも、我が社で頑張ってね」

そこで誠は頭を撫でながら呟いた。

「で、でも、俺、こんなことしたし、クビなんじゃ……」

「あら、大丈夫よ。私は社長よりも上だから」

「え？」

ようやく泣き止んだ瞳は、目じりを拭くと言った。

「お母さんはね、会長なんだよ。つまり、社長よりも位が上なの」

「そ、そうなんですか？」

誠は少し驚嘆な声を上げる。その表情に美鈴はクスツと笑う。

「そう。だから、私が認めればクビにはならないわ。これからよろしくね」

「は、はい！　ありがとうございます！」

誠は深々と頭を下げる。

「それと、瞳」

「はい」

美鈴は温かな眼差しで瞳を見つめ、サラツとした瞳の髪を撫でた。

「瞳は、本当に良い友達を持ったわね」

瞳は嬉しそうに、満面の笑みを浮かべてうなずいた。

「……うん！」

「そうね。結婚するなら、この子なら許してあげるわ」

「え？」

誠はきょとんとした表情で顔を上げた。

「お、お母さん、何言ってるのよ！」

瞳の顔は真っ赤になって美鈴をポコポコ拳を振るう。美鈴は手で受けながら上品に笑った。

「あら、さっき私の好きな人って言ったのは誰だったかな？」

「あ、あれは、違うの！ 友達として好きって言ったの！」

「本当かしら？」

「もう、からかわないでよー！」

その空間だけは、暖かな笑顔に包まれていた。

瞳はようやく、心からといえる笑顔を見せていた……。

騒動が一息つき、誠と瞳は屋敷を出て、湊の下に向かうことにした。

玄関の前で、美鈴は優しくに笑みを浮かべて手を振っている。聖司は結婚が白紙に戻ったことで慌てふためいていた。

瞳は大きく手を振って応えると、誠と一緒に歩き始めた。

「これで解決したな」

「はい！ 本当に、ありがとうございました、お兄さん」

「瞳が頑張ったからだろ。俺は何もしてないよ」

「いえ、お兄さんがいなかったら、私は何もできず、ただ逃げただけでした。……今回は、本当に助けられました。麻生家の娘として、心からお礼を申し上げます」

瞳は丁寧に深々とお辞儀をする。

「や、やめろよ、瞳。そんなの、瞳らしくないぜ」

瞳は顔を上げるとクスツと笑った。

「そうですね。それじゃ、いつも通りに戻ります」

「そうしてくれ」

二人は楽しそうに笑い合う。

そこで誠はあることを思い出した。

「あつ、そういうば、瞳、俺のこと好きっていったよな？ あれど
ういうこと？」

そこで瞳の顔を耳まで真っ赤になっていた。

「あ、あれは、その……だから、友達でつてことです！ 湊の次に
大好きな友達ということですよ！」

「へー、そうか」

誠は可笑しそうにほくそ笑んだ。

「な、なんですか！ 何笑ってんですか！」

「いや、瞳が俺のことをねって思って」

「だ、だから、違うっていつてるじゃないですか！」

瞳がまた顔を紅潮させて反論する。

「まあ、そう怒るなって。でも悪いな。俺は湊一筋だからな。瞳とは付き合えないな。でも、ずっと親友だからな」

「……それはわかってますよ……」

瞳が少しうつむきながらボソツと呟く。

「あれ？ 少し残念がってる？」

「別に、何でもありません。それより」

瞳は誠の前に立つと、ビシッと人差し指を立てて、鼻の上を指した。

「いいですか。私の大親友の湊を泣かすようなことがあったら、ただじゃおきませんからね。すぐに飛んでいって、お兄さんを処罰しますから」

「処罰って……。俺はそんなことしないよ」

誠は両手を前で振って苦笑する。

「絶対ですよ。万が一の時は湊は家で預かりますからね」

「おいおい、少しは信用してくれよ」

「……そうですね。お兄さんなら、大丈夫ですよね」

瞳はニコツと微笑む。

「それじゃ、行きましようか。湊が待ってますし」

「ああ」

二人は再び歩き出した。

しかし、瞳はすぐに足を止め、深くうつむいてしまった。

少し前を歩いていた誠は振り返った。

「おい、どうしたんだ、瞳？」

瞳からの返事はなかった。誠は疑問に思いながら、そっと近づいた。

「おい、どうしたんだ？ 腹でも壊したか？」

誠はしゃがみ込んで顔を覗く。

そのときだった。

「んっ……」

気づけば、誠の目の前には瞳の顔があった。

そしてだんだん大きくなってきたと思ったら、いつのまにか瞳にキスされていた。

熱く、柔らかな感触が伝わり、そして湊とは違うものを感じられた。

瞳はそつと離すと、少し頬を染めながら、誠を見つめた。

「お兄さん……。正直言えば、私はお兄さんのこと、ずっと前から好きでした。お兄さんと会って、少しずつ時間を共有し、好きだという感情がはつきりしました。でも、湊も、お兄さんが好きだということとはわかってました。私は、自分の恋より、親友の恋を優先し、譲ることを選んだんです」

瞳はそつと誠の顔を両手で包んで微笑んだ。

「これだけは覚えていてください。それだけで私は十分です。……私の初恋の相手は、お兄さんだということを……」

「瞳……」

そこで瞳は誠の頬を摘んでぎゅゅと抓った。

「なにバカみたいな顔してるんですか。湊が待っているんですから、早く行きますよ」

瞳は浮きだつた気持ちで歩いていく。

誠は痛んだ頬を擦りながら、呆然と瞳を見ていた。

「お兄さ〜ん、早く〜!」

瞳が数メートル先で大きく手を振っていた。

誠はふと笑みを浮かべると、腰を上げて走り出した。

「おう!」

「ほら、お兄さん。家まで競走ですよ。学園一番の足を見せて上げます。負けた方は奢りですからね」

瞳は楽しそうに、今まで以上の満面の笑顔で、走り続けた。

そして、そっと聞こえないくらいの小さな声で呟いた。

「ありがとう、お兄さん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8535i/>

空からの贈り物 ～ after story ～

2011年4月13日13時57分発行